平成 25 年度 一橋大学経済学部
グローバル・リーダーズ・プログラム

ベトナム短期海外調査

報告書

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

目次

第一部　はじめに ……p.1

- **挨拶** **……p.1**
  - はじめに ……p.2
  - 一橋大学経済学研究科長・経済学部長　石川城太あいさつ ……p.4
  - 教授　奥田英信あいさつ ……p.5
  - 特任准教授　小田島健あいさつ ……p.6
- **プログラムについて** **……p.7**
  - Summary ……p.7
  - プログラム概要 ……p.13
  - 準備について ……p.14
  - メンバー紹介 ……p.17
  - 引率教員・スタッフ紹介 ……p.21

第二部　現地調査記録 ……p.25

- **初日** **……p.26**
  - 一日目の記録 ……p.27
  - コラム「ベトナムの食べ物」 ……p.29
  - コラム「バイク」 ……p.31
- **二日目** **……p.32**
  - JICA 訪問レポート ……p.33
  - JBIC 訪問レポート ……p.37
  - 世界銀行訪問レポート ……p.41
  - 如水会ハノイ支部との懇親会 ……p.46
  - 二日目の記録 ……p.48
  - コラム「韓国企業の攻勢」 ……p.50
- **三日目** **……p.52**
  - 三菱商事訪問レポート ……p.53
  - ドンラム村訪問レポート ……p.57
  - 三日目の記録 ……p.60
  - コラム「ティエムさんの深いい話」 ……p.63
  - コラム「ちょっと役立つベトナム語講座」 ……p.66

◆ **四日目** ……**p.68**
ハノイ財政大学との討論会・交流会 ……p.69
概要・感想 ……p.69
農業班討論会レポート ……p.72
農業班資料（PPT） ……p.76
教育班討論会レポート ……p.92
教育班資料（PPT） ……p.98
交流会の思い出 ……p.110
コラム「カフェ」 ……p.112

◆ **五日目** ……**p.113**
ベトナム計画投資省訪問レポート ……p.114
ベトナム中央銀行訪問レポート ……p.119
五日目の記録 ……p.123
コラム「ハノイとホーチミン」 ……p.125

◆ **六日目** ……**p.126**
Dream Incubator 訪問レポート ……p.127
ホーチミン都市鉄道訪問レポート ……p.131
三菱東京 UFJ 銀行訪問レポート ……p.135
如水会サイゴン支部との懇親会 ……p.139
六日目の記録 ……p.141
コラム「おつりとレストラン」 ……p.143

◆ **最終日** ……**p.145**
市内視察レポート ……p.146
ホーチミン観光のアルバム ……p.147
コラム「ベトナムでのお買い物諸注意」 ……p.149
コラム「アンケート～ベトナムでの思い出～」 ……p.151
コラム「ホテル」 ……p.153

第三部　終わりに ……p.155

◆ 個人レポート ……p.156
◆ 終わりに ……p.174
◆ 編集後記 ……p.175

第一部

はじめに

はじめに

幹事　中尾実貴

研修前、初めてメンバー全員で顔を合わせ、ぎこちないままに行った『ベトナム』議論はとても未熟なものだった。「途上国を訪れる」その趣旨に、快適とはいえない環境を想像するものもいれば、行きつけのベトナム料理屋を思い出し、漠然と食事に期待するものもいた。恐る恐る開いた地球の歩き方には、カラフルなバイクや観光地はあっても、その先に生活する人々は載っていない。

情報化社会にあって、パソコンを開いて指を叩くだけで、今この手に得られる情報は膨大である。ブログ、掲示板、SNS などを通じ、「知りたいこと」はほとんどパソコンが教えてくれる。暑い夏は冷房の良く効いた部屋にこもり、情報収集に勤しむ方がよほど時間と体力の効率がいい、確かにそうかもしれない。しかし、その向こう側にいるのは所詮、同じウェブサイトにアクセスする限られた形の無い誰かにすぎないという事を、忘れてはいけないと思う。

ベトナムの光、音、匂いは、その場に行かなければけして感じる事はできない。そこで出会った人たちの生身の声、手や心の温かさは、なお忘れ難い私達の財産である。バーチャルな世界の限り有る情報から想像したベトナム現地には、「知らぬとさえ知らなかった事」がごろごろ転がっていた。その宝の山に驚き、躊躇する私達を助け導いてくれたのもまた、バーチャルな情報ではなく、生身の人々だった。

この報告書には、メンバーのベトナムへの思いが詰まっている。たった一週間の中で感じ、汲み取った一部ではあっても、それは確かに私達が目に見、耳で聞き、肌に感じたリアルなベトナムの有り様に得た思いだ。半年前には考えられなかったベトナム国への親近感や、メンバー間の深まった絆が、この冊子に集約されている。

本書を手に、学生である私達の五感を 1 つの切り口に、ある種その未熟さ故に感じ取ったベトナムの姿を脳裡に浮かべつつ、「途上国」の名においてこの瞬間も変わり続ける一国の今とこれからに思いを馳せて頂ければ幸いである。

本研修の実施にあたって、多くの方のご支援・ご協力を頂きました。奥田先生、小田島先生、佐賀先生をはじめ、御指導頂いた一橋大学の先生、訪問を御快諾下さった現地日系法人、世界銀行ハノイ事務所、ベトナム中央銀行、ベトナム計画投資省の方々、如水会ハノイ支部・ホーチミン支部の先輩方、心強いサポートをして下さった犬飼様、ガイドのお二人、JTB 担当者の方など、研修を支えて下さった全ての関係者様方に、この場を借りて心より感謝申し上げます。

ベトナム社会主義共和国

ベトナムの風情溢れる
1000 年の都
首都ハノイ（HA NOI）

衣食住の最旬が集まる
商業都市・ホーチミン
（HO CHI MINH）

ベトナム短期海外調査に寄せて

一橋大学経済学研究科長・経済学部長
石川城太

一橋大学経済学部は、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」の事業拠点に採択され、平成 25 年 4 月に「グローバル・リーダーズ・プログラム」を本格的に開始しました。このプログラムの目的は、経済学の専門知識とともに、グローバル経済の現実感覚を備え、自ら世界の諸課題の発見と解決に努め、優れたコニュミケーション能力を持って多様な国々の人々と対話できるリーダーを育成することにあります。

そのプログラムの一環として短期海外調査が位置づけられており、平成 25 年度は、ベトナム、及び、ブルガリア・ドイツで調査が行われました。とくに、ベトナムでの調査は、これまで経済学部が行ってきた「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム（平成 21 年度－24 年度）」の海外研修を引き継ぐものです。さらに、2004 年度に開始された経済学部・大学院経済学研究科 5 年一貫教育システムを構成する 3 つのプログラムの 1 つである「地域研究プログラム」にも接続しています。

この報告書は、JICA 派遣の小田島特任准教授の指導の下に、ベトナムで行った日系企業へのヒアリング調査、開発援助プロジェクトの現場視察、村落視察、ベトナム政府機関及び国際機関の現地事務所への訪問、ハノイ財政大学の学生との討論会などの様子をまとめたものです。

ベトナムは、計画経済から市場経済への移行を近年急速に進めています。ホーチミンなどの都市部では高層ビルが次々と建設されています。また、工業団地などのインフラも整備されて、日系企業を含む多数の外国企業が進出しています。経済学の基礎を教室で学んだ学生たちにとって、このような経済のダイナミックな変化を実際に肌で感じることは大変有益です。また、異なる環境にある同世代の若者同士が、意見を交わすことはとても刺激的です。この報告書を読めば、学生たちがベトナム短期海外調査から何を学んだのか、そしてそれがいかに有意義なものだったのかがわかると思います。

今回のベトナム短期海外調査は、多くの方々の暖かい協力に支えられて、成功裏に終了することができました。大学間交流の機会を与えて頂いたベトナム国家財政大学の方々、多忙の折に貴重な時間を割いてくださった国際機関、ベトナム政府機関、ベトナム中央銀行、ドンラム村、ホーチミン都市鉄道事務所、及び日系企業等の方々、調査実施前から様々な形でお世話いただいた JICA 関係者の方々、後輩を歓迎し激励してくださった如水会ハノイ支部・ホーチミン支部の方々、そのほか本プログラムにご助力を賜った多くの方々、そして学生に金銭的な援助をして頂いた一橋大学基金に心より感謝いたします。

今回の調査に参加した学生の中から、次代を担う若手研究者や国際協力に貢献する人材が 1 人でも多く育つことを期待しています。

ベトナム短期海外調査に寄せて

経済学研究科教授
奥田　英信

ベトナム短期海外調査では、ハノイ５日間とホーチミン２日間、小田島先生および学生の皆さんに同行させていただきました。ホーチミンを訪問するのは初めてで、ハノイとの違いに驚きました。ベトナムでは、工業団地、郊外の農村開発サイト、日系企業、鉄道工事現場、日本国際協力機構（JICA）、国際協力銀行（JBIC）世銀の各事務所、ベトナムの中央銀行と投資計画省などを訪問し、様々な情報に触れて見聞を広めることができました。また、ハノイ如水会ならびにホーチミン如水会の皆様には、歓迎会にご招待いただき、ありがとうございました。

今回の短期調査では、昨年に続きベトナム財政大学の学生・教職員の方々と交流の機会を持つことができました。国際交流担当理事のホアイ先生をはじめとして財政大学関係者に万事行き届いた準備をしていただき、参加学生の皆さんにとって、英語発表・討論や懇親会での交流は有意義な経験になったと思います。ベトナム財政大学と本学は、「東アジア政策研究プロジェクト」で相互訪問や現地調査など研究協力関係を築いてきました。学生間でも、これを機会に交流を更に発展させてくれるよう期待しています。

今回の海外調査は、「グローバル・リーダーズ・プログラム」の一環として実施されたもので、岡室博之先生、大月康弘先生、小田島先生、佐賀裕実先生をはじめとする関係諸先生方、プロジェクト事務担当の犬飼裕子さん、また国際化推進室の鈴木あかねディレクターからご協力をいただきました。また、石川経済学研究科長はじめ関係各位のご尽力にも、深く感謝する次第です。最後になりましたが、訪問先の現地日系企業、ベトナム政府、ベトナム財政大学、JICA、如水会並びに本学卒業生、そして学生に資金援助を頂いた一橋大学基金など、多方面のご協力に対しまして、関係する皆様方のご厚意に改めてお礼を申し上げます。

ベトナム短期海外調査に寄せて

経済学研究科特任准教授
小田島　健

今回は、2012 年度の短期海外調査に続き 2 回目の引率となりましたが、昨年度の課題を踏まえてスケジュールを見直すことができ、また限られた時間の中で学生の問題意識により沿った日程とすることができたと感じております。これは、ひとえに各方面の皆様の御支援の賜物と思っております。ありがとうございました。数年前、JICA のベトナム担当課長として足しげくベトナムを訪問しておりましたが、今回も、エネルギーと若さの溢れる、国／街／人、その魅力にふれ、見聞を広めることができました。暖かく迎えられた現地調査を通じて、講義では伝えきれないベトナムの「躍動」を参加した学生ひとり一人掴み取ったものと確信しています。

短期海外調査の機会を与えてくださり、また実施にあたって様々な助言・支援を下さった石川城太先生、岡室博之先生、奥田英信先生、大月康弘先生、佐賀裕実先生、危機管理オリエンテーションをしてくださった鈴木あかね先生にお礼申し上げます。学生募集手続き、旅行エージェント選定、危機管理段取りなどこれまでの短期海外調査で培った経験を全力で今回の調査に注いで下さった犬飼裕子さんには心から感謝申し上げます。予算面においては、一橋大学基金 Hitotsubashi University Foundation Scholarship から御支援をいただき、志の高い学生の応募・参加を促すことができました。

現地調査では、日本政府機関（JBIC、 JICA）、世界銀行、日系企業（三菱商事、三菱東京 UFJ 銀行、ドリーム・インキューベーター）、ベトナム政府機関（投資計画省、中央銀行）、ベトナム国家財政大学、ドンラム村派遣海外青年協力隊員、ホーチミン都市鉄道事務所、如水会（ハノイ、ホーチミン）など多くの方々に大変お世話になりました。このように各方面の方々からいただいた温かい御支援に改めて御礼申し上げます。

今回参加した学生にひとことですが、数か月にわたる事前準備から現地調査までを通じて、自ら考え、相手に伝え、実地で確かめることを実践できたと思います。各方面で活躍される方々との面談、ベトナムの学生との討論・交流を通じて、「見える」範囲が広がったと思います。短期海外調査の中で皆さんが遺憾なく示してくれたこの力を、これからも発揮してほしいと思います。

A Week in Vietnam:
A Brief Report

In early September in 2013, after the four-month intense preparation since the end of May, we left Japan and flew to Vietnam led by two professors of Hitotsubashi University as our supervisors. During the one-week trip, we first stayed in Hanoi, the capital city rich in historic remains, and then moved on to Ho Chi Ming City, the country's largest and most urbanized business center. To observe the nation's latest trends in economy, education, and government policy first-hand, we visited private corporations, public agencies, and others in both cities, and asked their views on the present and future of Vietnam. Fortunately, at every place, we were warmly received and able to gain truly valuable insights.

In the following pages, we would like to make a brief report of each of our visits, and look back at whom we met and what we experienced.

JICA

First of all, we visited JICA Vietnam Office. In the beginning of the session, we had a presentation about a two-week internship at an ODA project by the students of Kyoto University, and we were strongly interested in hearing more about their ODAs. Mr. Shimizu at the office willingly accepted our request and gave us a fascinating lecture about the topic focusing on their development assistance in such areas as economic infrastructure, industrialization, and health and social welfare. Through the lecture we understood that there are various ODA projects underway, and we were all impressed by JICA Vietnam's dedication to the promotion of Vietnam's self-reliance.

JBIC

The Japan Bank for International Cooperation, or JBIC for short, functions as a governmental financial institution of Japan and an export credit agency as well. Concerning Japanese-Vietnamese business and financial relationship, they have particularly focused on funding Japanese investment in Vietnamese industry, especially in the sectors of infrastructural development and technology. We visited them in their Hanoi Office and interviewed some of the resident officers. What impressed us the most was their impartial stance toward their job: They say that their first priority is not to

increase the national interest of Japan but to achieve the right balance among all the stakeholders, and this is their cardinal principle. This principle is actually underpinned by their belief that Japan should and can contribute more to the betterment of the international financial order.

World Bank

At the Hanoi Office of the World Bank, we were warmly welcomed by the staff members and impressed by their extensive expertise. According to them, Vietnam entered the group of middle-income countries in 2010, and it has recently been receiving loans by both IDA and IBRD. The country still needs to make major reforms of its government systems and land system. However, according to the World Bank, Vietnamese economy has the potential to grow significantly if the country's renovation is steadily carried out in such areas as human resources development, infrastructural development, and administrative reforms,

***Josuikai* (Hanoi Chapter)**

Hitotsubashi's almni association, *Josuikai*, has a worldwide network of members, and it has its Vietnamese chapter in Hanoi. At the second night of our trip, the alumni resident in Hanoi invited us to a wonderful dinner at a luxurious restaurant in the city. Their age and occupations varied, but they all had fascinating stories after their long overseas work experience. What they unanimously said was that living abroad enabled them to look at Japan from an objective viewpoint as an outsider, and it struck us that we could also feel the same way during and after our travel. We would like to thank for their time, hospitality, and inspiring talks from our hearts.

Mitsubishi Corporation

Mitsubishi Corporation is one of the major trading companies in Japan. Since their business transaction ranges various sectors through the world, their role and responsibility as a player in the global economy is obviously significant. We visited them at their Hanoi office, and asked about their business and activities in Vietnam. Currently, in cooperation with the Japanese Government, the company is involved with promoting Vietnam's infrastructural development and providing latest medical appliances for the betterment of the Vietnamese public health.

Duong Lam Village

Located in the west of Hanoi, on the southern bank of the Red River, Duong Lam is a traditional agricultural village that has retained its unique communal lifestyle since ancient times. About ten years ago, due to the rapid social changes brought by Vietnam's industrialization, the village's cultural heritage was on the verge of extinction, and the Vietnamese government launched the preservation project of the district with the support by JICA and other Japanese institutions.

In this village of wooden old houses, time seemed to pass very slowly, and we felt released from the hectic pace of the modern life. Among various hands-on workshops offered to the visitors, we tried cooking spring rolls, one of traditional Vietnamese dishes. We also met some Japanese voluntary staff who were dispatched here by the Japan Overseas Cooperation Volunteers, and they told us that their mission is not to help the villagers in a simple sense but rather to encourage their will to gain further independence. Before leaving, we bought pieces of traditional straw work such as hats and fans as a souvenir of the village.

Academy of Finance, Vietnam

Academy of Finance was established as a financial institution affiliated to the Vietnamese Ministry of Finance as a result of an integration of three financial schools, Hanoi University of Finance and Accounting, the Finance Research Institution, and the Financial Training Center. We were invited to a one-day student seminar held at the academy's main campus in Hanoi, and had an intense discussion about the agriculture and education of both Vietnam and Japan.

The seminar started with the group presentations delivered by both schools alternately, followed by question-and-answer sessions and freer opinion-exchange.

The Ministry of Planning and Investment

The Ministry of Planning and Investment (MPI) is responsible for the management of the investment projects within Vietnam. According to the ninth Five-Year Plan adopted in 2009, the ministry is currently engaged in the allocation and adjustment of the national budget and other issues.

MPI has been on a friendly terms with the Japanese governmental institutions in general, and when we visited them at their Hanoi Office, the officers and other staff also

showed us generous hospitality. Especially, we were able to have a really pleasant time when we talked to Mr. Nguyen Hoang Linh. He hopes that more Japanese youth will visit Vietnam, experience Vietnamese way of life, and work for building a firmer partnership between the two countries. Since we now have fist-hand experience of the country, it will be our responsibility to try our best to measure up to Mr. Linh's expectation and contribute to the bridge-building between Vietnam and Japan.

The State Bank of Vietnam

The State Bank of Vietnam is the central bank of the country. At their headquarters in Hanoi we interviewed them by asking the questions that we had prepared beforehand. For example, we asked about the causes of nonperforming loans, the possibility of further introduction of dollarization, and the viable exchange rate of dong to dollar. The officers answered our questions very kindly and sincerely, and we were fortunate enough to be given such a rare opportunity to talk to the specialists who work in the very center of the Vietnamese banking system.

HCMC Urban Railroad

In Ho Chi Ming City, the construction of a public railway system is currently progressing under the Urban Railway Construction Project. The entire project is expected to complete by 2020, the year in which all of the six lines are scheduled to open.

We visited the project office of Line 1 and its construction site. This line, which is going to run from Ben Than market to Soui Tien, is one of those lines that are to be finished by 2020. According to the site supervisor, in Line 1 they are introducing an IC-card system similar to the JR's *Suica*. We also heard about the major challenges that this type of governmental project typically faces such as the purchase of private land and the lack of advanced construction schemes and technologies.

Dream Incubator

Dream Incubator is a Japanese consulting firm established in 2000, and their major services are to provide business strategies for those Japanese who are interested in expanding into Asian market and to help venture businesses to develop both in and out of Japan as their incubator.

We visited their local subsidiary in Ho Chi Ming City, and as a consultant and investor, they let us hear their candid opinions on the economic system and the established business practices of Vietnam. For example, they warned us not to misunderstand the people sitting on streets in this country, because, in fact, they are not unemployed but doing their businesses as wholesalers! Their stories were full of humor, but they also impressed us by their strong determination to tackle numerous difficulties with passion. We would like express our heartfelt thanks to them for their most interesting and instructive talk.

Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd

We visited Ho Chi Minh City Branch of the Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd. This branch provides financial services mainly for the Japanese companies in Vietnam; however, according to the branch manager Mr. Yamashita, the competition to gain the clients is growing fierce: the banks and other financial institutions that are vying for a larger share in the Vietnamese financial market include—to say nothing of other Japanese lenders—large-scale institutions of the U.S., Europe, and Asia like Citibank or HSBC. In order to survive this bitter rivalry, Tokyo-Mitsubishi UFJ formed a capital affiliation with VietinBank for the expansion of their retail banking services in Vietnam.

At the end of the conversation, Mr. Yamashita emphasized that understanding the history and cultural climate of Vietnam is the most important key to successful business in the country.

Josuikai (Saigon Chapter)

Just like the Hanoi Chapter of *Josuikai* (the alumni association of Hitotsubashi) did, Saigon Chapter of the association kindly invited us to a dinner party at an elegant restaurant near the city hall. We greatly enjoyed a delicious dinner and the conversation with the resident members. The bonds among the members seemed to have strengthened further probably because of their living away from the homeland. We are deeply grateful to them all for their warm and generous reception.

After leaving Vietnam, we all felt that the fruit of this travel was greater than we had expected before departure. At preset Vietnam may still be on the road to its full development, but the country will certainly see a rapid economic growth in just a few more decades. But we think we should not just vaguely wait for the Vietnamese to achieve their economic prosperity as if we were mere onlookers at a distance. Instead, we think it our duty, as ones who have seen directly the country and people of Vietnam, to involve ourselves in building bridges between Vietnam and Japan and try our best to establish a reciprocal relationship with each other. What we can do may be very limited, but maintaining close contact with the people we met during our program will be our first step.

Our program would have never been accomplished without the help of the companies, organizations, professors, and all other people who helped us set our goals, arrange our plans, and steadily pursue our objectives. We would like to thank them for their readiness to take time off their tight schedules and to encourage us throughout the program.

プログラム概要

概要

一橋大学では、運営の基本方針として、『スマートで強靭なグローバル一橋』を目指し、新たな『キャプテンズ・オブ・インダストリー』の育成に力を入れている。平成 21 年度より、JICA との連携のもとに、海外に関する「現場感覚」を備えた学部学生を育成することを目的とし、新しい知識や機会を提供するオープンな参加型教育プログラムとして、「地域研究を通じての国際経済分析者養成プログラム」が実施された。平成 22 年度のインドネシア、平成 23 年度の中国、そして平成 24 年度の調査対象国はベトナムが選ばれた。

このプログラムは平成 24 年度をもって終了したが、短期海外調査（ベトナム）は平成 25 年度より、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」にも採択された「グローバル・リーダーズ・プログラム」に引き継がれることとなった。

ベトナムは東アジア第三位の人口約 8870 万人（2012 年時点）を誇り、計画経済から市場経済への移行を着々と進めている。日系民間企業の海外事業展開に関するヒアリング、開発援助プログラムの現場視察、村落視察、ベトナム政府機関及び国際機関の現地事務所への訪問、ハノイ財政大学の学生との討論会を通じて、ベトナム経済の変化や、海外直接投資、政府開発援助・国際協力への取り組みと今後の展望を調査することを目的に実施された。　（募集対象：一橋大学に属する全学部生、募集人員：10 名）

調査日程表（9 月 8 日～9 月 15 日）

	年月日	都市名	時間	内容
1	9/8（日）	成田発 ハノイ着	午前 午後	成田国際空港集合 空路、ハノイへ（所要：約５H30） ハノイ・ノイバイ国際空港到着、ホテルへ
2	9/9（月）	ハノイ	午前 午後 夜	JICA ベトナム事務所訪問 JBIC・ハノイ事務所訪問 世界銀行ハノイ事務所訪問 夕食・如水会ハノイ支部との懇親会
3	9/10（火）	ハノイ	午前 午後	三菱商事訪問 ドンラム村訪問 村落開発視察および交流プログラム
4	9/11（水）	ハノイ	終日 夜	ハノイ財政大学との討論会 夕食・ハノイ財政大学との懇親会
5	9/12（木）	ハノイ ホーチミン	午前 午後 夜	ベトナム計画投資省による講義(JICA 事務所) ベトナム中央銀行訪問 国内線にて、空路、ホーチミンへ ホーチミン空港到着、ホテルへ
6	9/13（金）	ホーチミン	午前 午後 夜	ドリームインキュベータ訪問 ホーチミン市都市鉄道運営組織設立支援プロジェクト視察・日本工営訪問 三菱東京 UFJ 銀行訪問 夕食・如水会サイゴン支部との懇親会
7	9/14（土）	ホーチミン	午前 午後 夜	ホーチミン市内視察　資料整理 （中央郵便局、統一会堂、紛争博物館、ベンタイン市場など） ホテルチェックアウト
8	9/15（日）	ホーチミン発 成田着	午前	ホーチミン・タンソンニャット国際空港到着 成田国際空港到着

準備について

経済学部　4 年　齋藤　玄

今回の海外短期調査は、5 月 21 日から正式に始動した。ここでは、海外短期調査に向かうまでに我々が行った準備と、実際に調査を終えてから報告書作成を行った過程について記す。

5 月 21 日

ハノイ財政大学との討論会でのテーマについての議論

この時点では、大きく経済、農業、人口、環境、原子力、教育が大きなテーマとして挙げられた。

5 月 28 日

21 日の時点であげたテーマについてどの分野を取り扱いたいか投票を行う。

この時点では、農業、市場主義への移行、人口、対中政策、原子力、教育が候補として残る。これらのテーマのうち農業、人口、市場主義への移行について議論を重ねた。

6 月 4 日

対中政策、原子力、教育についての議論を重ねる。ハノイ財政大学に提示する資料として、5 月 28 日に議論した農業、人口、市場主義への移行について英語のテーマ説明書の作成を行った。

また、訪問したい企業についての話し合いを行った。その際に候補に挙げられた機関は商工会、ドリームインキュベータ、三菱商事であった。

6 月 11 日

6 月 4 日に議論を行った対中政策など 3 つのテーマについても、農業などと同様に英語でテーマの説明書を書き、すでに出来上がっていた農業、人口、市場主義への移行のテーマの説明書と共に小田島先生に英語の添削をしていただいた。

6 月 18 日

訪問したい企業についての議論を行った。

その際に昨年訪れたところで引き続き訪れたい機関として、世界銀行、JICA、JETRO、ベトナム中央銀行を候補に挙げた

今年の訪問場所としたい機関としては以下の機関を候補に挙げた。

ベトナムの政府関連の機関や多種多様な事業会社とのかかわりを持っている機関として、金融機関、商社、コンサルティング会社
現地の消費者事情を理解している機関として、広告代理店、コンビニエンスストア、メーカーの会社を候補として挙げた。
業界、企業について担当者を決めて、次週に発表することとした。

6 月 25 日

6 月 18 日に決めた担当者が担当の企業等について発表。
この週は銀行、コンサルティング会社、商社、広告代理店についての議論を重ねた。また、この日にハノイ財政大学に提出していたテーマ設定の回答が返ってきて、討論のテーマが教育と農業に決定した。そこで教育班と農業班を作り、チーム分けを行った。

7 月 2 日

JETRO、JICA についての発表を行った。
また、教育班、農業班それぞれどのような発表内容にしていくかを班ごとに議論した。

7 月 9 日

世界銀行、コンビニエンスストアについての発表を行った。
訪問する機関がだいたい決定したので、各訪問機関に質問する内容を考える人を割り当てた。

7 月 16 日

9 日に割り当てた担当機関の質問状について添削を行った。
また、農業班の発表する内容についての確認を行った。

7 月 23 日

訪問機関の中でも、特に英語で質問する機関についての質問状の添削を行った。
教育班の発表する内容についての確認を行った。

8 月 23 日

ベトナム財政大学での討論会の練習を行った。プレゼンテーションを佐賀先生に見ていただいて、改善点を探し出した。

9 月 6 日

海外調査の直前ということで、注意事項の確認、そして報告書作成の際の担当を決めた。

訪問するまでの準備期間の日程を表にまとめると、以下のようになる。

5 月 21 日	討論会のテーマ決め(1)
5 月 28 日	討論会のテーマ決め(2)
6 月 4 日	討論会のテーマ決め(3)
6 月 11 日	討論会のテーマ決め(4)
6 月 18 日	訪問機関の決定(1)
6 月 25 日	訪問機関の決定(2)
7 月 2 日	訪問機関の決定(3)
7 月 9 日	訪問機関の決定(4)
7 月 16 日	訪問機関への質問状作成(1)
7 月 23 日	訪問機関への質問状作成(2)
8 月 23 日	プレゼンの演習
9 月 6 日	注意事項の確認など

また、今回行ったベトナム海外短期調査の報告書作成は以下のようなスケジュールで行った。

10 月 1 日	スケジュールの作成、報告書担当分野決定
10 月 8 日	企業レポートの作成(1)
10 月 15 日	企業レポートの作成(2)
10 月 22 日	個人レポートの作成
10 月 29 日	英語サマリーの添削
11 月 12 日	農業、教育各班のレポートの添削
11 月 19 日	その他の部分の添削、ページ数の確認
11 月 26 日	最終調整
12 月 10 日	原稿締切（第 1 次）
12 月 17 日	原稿締切（最終）

報告書作成は、主に訪問した機関についてのレポートを中心として行った。訪問した際に講義していただいたことや質疑応答により伺った内容を報告書に収めている。機関の訪問や市内の視察を通じて感じたことについては個人レポートとして、個々人の意見をまとめている。

☆メンバー紹介☆

新井　小百合

経済学部１年　カメラ係
財政大学討論会　農業班

他己紹介
遅れてきたゼミの救世主さゆちゃん。気づけばそこにいる彼女の和みゆるキャラパワーは最高！優しくおっとりな女神のぷにぷにほっぺに皆夢中です。そんな彼女も中身はしっかり橋女…のはずが、同じくデキ女…のはずの三浦さん（下記参照）とセットにすると宇宙語で話しだすので要注意。通訳は瑠璃子ちゃんにお願いします。「まろはもう眠いのじゃ」かわいくマイペースな低燃費少女♡

石井　大河

経済学部４年　企業連絡係
財政大学討論会　教育班

他己紹介
カナダから帰国して今年 4 年生の大河さん。初対面ではとても真面目で少し近付き難い印象を受ける。話してみるととても気さくな方。後輩の面倒を親身になって見て下さる、面倒見の良い頼れる存在。玄さん、柊人さんと仲がよく、三人でじゃれあう姿はまるで子犬(!?)のよう。個人的には柴犬に似ているかと。留学生活で磨きをかけた英語力を駆使し、国籍を問わず女性を虜にする。実際にベトナムでも被害者発生。眼鏡の下のキラースマイルにご注意を!

齋藤　玄

経済学部４年　副幹事
財政大学討論会　教育班

他己紹介
別名、ミンさん。日本語が異常に流暢なベトナム現地の方です。嘘です。
ベトナム名物のかさ帽子の余りの似合いように、皆が驚愕した、正真正銘日本人の我らが副幹事はるかさん！笑すごく真面目で優しいです。準備や報告書作成の時は、大変な仕事も笑顔で引き受けてくださって、本当に助かりました！頼りになる、大黒柱であります！
ホテル従業員の方とのパンツ事件や、パッキングの異常な下手さ加減など、意図しない爆笑ネタに尽きない不思議な人。意図して笑いをとろうとする時よりも、遥かにドッカーンする、天然さんなのです。
それにしても、やっぱりミンさんだなぁ……。
(S さん)

潮崎　真唯子

経済学部２年　旅程管理係
財政大学討論会　教育班

他己紹介
２年生（２１）。面白いキャラをしている。外部の学生団体でバリバリやっている模様。明るく元気で場を和ませる。特にツッコミの的確さに定評がある。いつもオシャレ。痩せているのによく食べる。市場で盛大にぼったくられるなどネタに尽きない。キャンパスでは主に外国人と歩いている。（Ｉさん）

高津　柊人

経済学部３年　編集長
財政大学討論会　農業班リーダー

他己紹介
皆がお疲れモードのとき、太陽のような笑顔で光を差し込む先輩。女子高生のモノマネが得意のようで、いつのまにか女子扱いされていましたね！〇河さんと並ぶと、カップルに見えるかも。食べ物とお土産に対する愛情は人一倍で（食に関しては私も負けませんよ笑）、ベトナムのスーパーではフォー大人買い！おみやげ袋がサンタクロースの袋みたいになっていました。ちなみに、親指先生のネタは面白かったです。（Ａさん）

中尾　実貴

法学部４年　幹事
財政大学討論会　教育班

他己紹介
なんてったってお姉さま！こんなに頼れるお姉さまに私は今まで会ったことないです！ゼミでのまとめ役としてはもちろんのこと、ベトナム現地で流暢な英語で議論をしている姿や、私たち弟妹軍団の人生相談にも乗ってくれる姿に、憧れと尊敬の念を隠せません！それでいて笑いのセンスもピカイチなんだから、本当にもう素晴らしすぎます！彼女の出身高校では「…先輩」の代わりに「…お姉様」と呼んでいたようです。私たちもみきお姉様とお呼びしていいですか？笑（Ｍさん）

三浦　真実

経済学部２年　学生連絡係
財政大学討論会　農業班

他己紹介
見た目はデキ女、中身ももちろん…ねっ！デキ女ですよね、まみさん！
真実さん「そうですよ～私デキ女ですよ～オホホホホホ～」（Ｔさん）

村田　瑠璃子

経済学部１年　カメラ係
財政大学討論会　農業班

他己紹介
一年生ながら、海外研修に参加されている、とても勉強熱心な方です。
写真係として写真や動画をたくさんとってました。お疲れ様です。その際に ipad を使ってとっていましたが、画面を見ないでとるなど高度なテクニックを駆使していました。彼女曰く、画面を見ないで写真を撮ると予期せぬ面白い写真が撮れるとのことです。企業訪問の時のメモも全部 ipad で処理していて彼女ほどうまく ipad を使いこなしている人見たことないです。
また、似顔絵がとても上手で、財政大学の学生に描いてあげていた絵は、とても好評でした。私も似顔絵描いていただきましたが、とてもかわいらしく描いていただき大変満足しています。(S さん)

小田島先生

すらりと長身、スーツを着こなし風貌から仕草まで紳士な先生は、知的で優しく中身までジェントルメン。そんな先生お得意の手作り窯焼きピザが食べたいです＾＾（中尾）

第一印象から紳士なお方。時折冗談を交えながらのお話は、学生に敷居を感じさせず、かつ先生の見識の広さを感じさせるものでした。紳士の理想像ですね！（三浦）

笑顔が素敵な先生です。普段の授業では、私達学生のレジュメを丁寧に添削して下さいました。研修中では訪問先との懸け橋となってくれました。先生のおかげで楽しかったです！ありがとうございます！（新井）

豊富な知識と適切なコメントで私たちを導いて下さいました。訪問先で「元 JBIC の小田島さんですよね？」と言われているのを見て、実は産業界にも名を轟かす凄いお方であることが判明しました。(石井)

異国の地にいても馴染んでしまうであろう、日本人離れした体型の持ち主。どこをとっても「スマート」。理想の先生像を体現されている方。(村田)

身のこなしがスマートな先生です。専門の金融のことになると、議論も白熱することもしばしば。趣味？のログハウス作りに人手が必要とのことで、呼ばれたら参加させていただきたいと思います。(齋藤)

おそらく一橋大学 No.1 の長身ダンディ教授。なんて格好いいのでしょう。いつもニコニコしていて優しいのですが、そのままのニコニコ表情できつい課題も出してくださいました笑。最前線で活躍なさっている小田島先生から学んだことは計り知れず、先生への憧れが今後の勉学へのモチベーションになる気がします。(潮崎)

帰りの空港でチェックインを待っているときに、「受付の人たちにアフレコすると面白い」とおっしゃっていて先生の海外経験の豊富さとお茶目さに触れました！　気さくな先生で一週間を楽しく過ごせました。(高津)

奥田先生

法学部の私は実ははじめてお目にかかり、おっとり静かな先生…かと思いきや、教育現場への熱い思いや波瀾万丈な出張談義などで場を盛り上げてくださいました。（中尾）
ハノイでの如水会交流の時に、以前の一橋の様子やこれからの大学の教育についてのお話をお伺いして、いろいろ学ばせていただきました。深い見識をお持ちの先輩です。（三浦）
世界銀行や財政大学との交流時に、英語でたくさんの質問をなさっていた姿が印象に残っています。私も先生のようにもっと積極的にならねば…（新井）
訪問先にて専門的で鋭い質問を英語で投げかける姿を見て、一流の研究者とはかくあるべきかと思いました。学生とも気さくに話してくださって大変勉強になりました。(石井)
切り替えのはっきりしている、多くのギャップを持つ先生。財政大学での討論会は、先生のお力添えなしには成立しなかったものと思います。(村田)
経済学などの大学の学問はあまり役に立たないのではないかという疑問を持っていた我々に対して、実務を積んだうえでの学問の重要性を説いてくださり、感銘を受けました。（齋藤）
夏に開発経済(金融)学を受講していたため、おおお本人だぁ、というのが最初の印象でした。普段はにこやかですが、専門分野になるとキリッと本気モードになられて、聞いていて非常に勉強になります。朝食は少なめにおとりになる、というのが朝食バイキングでの分析。(潮崎)
先生の授業を何回か受講したことがあったが、今回初めてお話しさせていただいた。財政大学討論会では今まで見ていた授業の真面目な雰囲気もありつつ、食事の際は授業のときと違う気さくな一面も見ることができた。空芯菜のにんにく炒めにはまっていらっしゃった。（高津）

ハノイガイド・ティエムさん

お水のボトルが日本橋～！一橋～！と配って下さった笑顔が最高のティエムさん。ベトナム視点からの独特な国際政治・歴史観には、自分の無知を諌められた気がします。（中尾）
朝バスでティエムさんが待っていてくれると思うと、わくわくして夜も眠れないくらい、ティエムさんはステキです！今回の報告書、ティエムさんのコラムが私の一番の力作かもしれません笑。尊敬しております。（三浦）
ティエムさんのお話やクイズはどれも面白かったです。特に、ティエムさんの日本留学の体験談は感動ものでした。ティエムさんのような方にガイドをしてもらって本当によかった！これからもドンドンドン、頑張ってください！（新井）
終始笑顔で面白い話をして下さる真摯な姿勢に、プロのガイド魂を感じました。ベトナムの庶民の生活や考え方など、ティエムさんからしか聞けない話が盛りだくさんでした。(石井)
ベトナムの地に降り立ち、はじめて会ったベトナム人がティエムさんでした。日本に関する造詣が深く、日本人として恥ずかしくなることもしばしば。その熱い思いで、これからも日本とベトナムの友好の橋になってください!(村田)
日本とベトナムの歴史に大変詳しく、大変勉強になりました。特に、自分の国の歴史を外国語で説明するということは並大抵の努力でできることではなく、ベトナムと日本の懸け橋となろうとしている熱意が強く伝わってきました。私もティエムさんのように自国の歴史を他言語で伝えられるように努力せねばと思いました。（齋藤）
みんな大好きティエムさん♥ダジャレ好きのニコニコしたちょこまか動くおじさま。もう可愛くて仕方ない。ですが面白いだけでなく、日本とベトナムの文化・歴史・人々に造詣が深く、常に真摯に向き合って生きてきたと思わせる方でした。ベトナムで、一番心を動かされた話は、ティエムさんのお話。彼がガイドさんでよかった。（潮崎）
ティエムさんの日本語はとても流暢で、かつ日本のことわざにも詳しくすごい方。ハノイを楽しく案内してくださいました。（高津）

ホーチミンガイド・ソンさん

ハノイから一転、突然の都会ぶりにビビる私を優しく率い、最終日にはバイクの行き交う繁華街を素敵なマッサージ屋さんまで連れて行ってくださった。心強かった…！（中尾）

シャキッと爽やかなシャツ姿で流暢な日本語を話すソンさん。プロだなあと尊敬のまなざしを送っておりました。今度私にベトナム語を教えて下さい！（三浦）

ホーチミン空港でソンさんの写真を撮りたいと言ったら、ものすごく元気な笑顔とピースをしてくれて、とても嬉しかったです。２ショットも撮りたかったなあ…。（新井）

真面目な仕事ぶりに感銘を受けました。腹痛に苦しむ私をトイレに導いて下さって本当にありがとうございました。(石井)

最終日の観光の時、ホーチミンを知り尽くしている立場として私達をスムーズに導いてくださいました。アオザイを着ている私に、とても似合っていると声をかけてくださったこと、忘れません!(村田)

ホーチミンの三日間という非常に短い間ですが、お世話になりました。ホーチミンの如水会の時にどうしようかまごまごしているソンさん、かわいかったです。（齋藤）

日本の巷で見かけても可笑しくない、こちらもニコニコなおじさま、ソンさん♥すごく真面目で一生懸命で、いろんな話をしてくれたり、最後のショッピング Day にいろんなお店に連れて行ってくださいました！問題児ばかりでごめんなさい！ソンさんありがとう＾＾（潮崎）

買い物をしたい私たちの要求に親切に応えてくださり、市場やスーパーに案内してくださいました。ソンさんおすすめの観光穴場スポットのお寺、めちゃめちゃよかったです！（高津）

第二部

現地調査記録

ベトナム調査

一日目

最初からシステム故障のハプニング・・・!?　空港で長いこと待ちました!

美しい機体に胸を膨らませます!!

ティエムさんとの出会い　　見覚えのある日本企業の工場が・・

ギャラクシーホテル到着 広い!!　　初めての散策　フルーツジュース♪

初めての夕食　　無事にベトナムに着き一安心

コラム　ベトナムの食べ物

ベトナムの料理は日本人の口にあっていてどれもとてもおいしかったです。ヘルシーな料理であっさりとした味付けが特徴です。たくさんの料理の中から、特に記憶に残っている物を紹介します！

No.1　生春巻き（ゴイ・クォン）

日本でもおなじみで人気の生春巻き。エビや香草などをライスペーパーで巻いたもの。ヌクマム（魚醤と唐辛子のつけだれ）やトゥオン・デン（黒味噌）につけて食べる。毎回の食事の前菜として出てくることが多かった。

No.2　揚げ春巻き（チャー・ゾー）

ひき肉や春雨などの具材をライスペーパーで巻き、それを揚げたもの。あるレストランではパイナップルにささって出てきておもしろかった。

No.3　空芯菜のにんにく炒め（ザウ・ムォン・サオ・トイ）

前菜の定番。夏は空芯菜だが、冬は別の野菜のにんにく炒めに代わるそうだ。シンプルだが何回も箸をのばしてしまう、思わずやみつきになる料理。

No.4　フォー

こちらも日本で有名なベトナム料理。米麺を使っており体に優しい味が特徴。ホテルの朝ごはんで毎回オーダーでき、牛肉や鶏肉入りのものを毎日食べていた。

No.5　バイン・セオ

ベトナム風お好み焼きとされているが、食べ方は全然違う。ぱりぱりの外皮の中にエビや豚肉・もやしが入っていて、それを香草や野菜で包んで食べる。

No.6　ハスの実チャーハン

ハスの実が入ったベトナム風のチャーハン。中華風のチャーハンとは異なり、味付けはあっさりしていて箸が進む。お店ではハスの葉にくるまって出てきた。

No.7　チェー

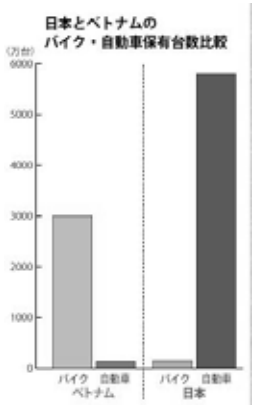
ベトナム風のあんみつ。冷たいものと温かいものがある。冷たいものは甘く煮た豆やゼリー・削った氷が入っていて、かき氷のようであった。温かいもので食べたのはもち米とタロイモのチェーで、やわらかい甘さがおいしかった。

No.8　プリン（バイン・フラン）

プリンといってもベトナムのプリンは濃厚で少しかためにに仕上がっている。フォーのお店でセットで頼んだら少し崩れているものが出てきてごめんなさいと言われた。実際見た目は気にならないし味はとてもおいしかった。

コラム　オートバイだらけ！

ハノイ・ホーチミンに行った私たちが最も肌で感じた特徴は、「オートバイの数」である。



写真を見て欲しい。ハノイ市内ではどこもかしこもこんな感じである。危ない、事故ばかり起きそう！と思う方もいるだろうが、写真だと分からないけれど実はスピードはすごく遅い。見たところ、自転車と同じくらいと考えてよい。ブレーキをかければすぐに止まれるくらいの速度ではあるので、事故だらけという訳ではない。しかし勿論、交通事故の件数自体は多い。また、街中にいつもクラクションの音が鳴り響いている。バイクが多い上に余り交通ルールが守られず、道も整備されていないところがある。日本ではクラクションは余程のことがあった時にしか鳴らさないだろうが、ハノイではもう少し気軽にクラクションを鳴らす事態に陥るだろう。

ハノイの街を見て、以前家族旅行で行ったタイ・バンコクとのあまりの違いに私はとても驚いた。私の勉強不足ではあるが、タイとベトナムの経済発展の度合いに大きな差があるとは認識していなかった。街の清潔感や匂い、ショッピングモールの大きさと数、交通ルールを守るか、そしてオートバイの数、鉄道の有無など、バンコクと比べるとベトナムは「途上国」という印象が強かった。肌で感じるとはこういうことか、と衝撃を受けた。オートバイは、バンコクでは 2.47 人に一人、ハノイで 1.61 人に一人が所有している。(2010)

ハノイでは2009年において、公共交通機関分担率が10%、私的交通機関分担率が90%[i]と、公共交通機関の使用率がとても低い。これには、鉄道が余りないことと、バスなどは運行しているが、混雑やスリなどの治安の問題で人気がないことが理由として挙げられる。しかしこの交通渋滞は大きな社会問題となっているため、解決が急がれる。日本の ODA が行っている都市鉄道にも期待が集まっているので、訪問先のそちらも参照頂きたい。

---

[i] http://www.jica.go.jp/project/vietnam/016/activities/

ベトナム調査

二日目

JICA

文責　三浦真実

1. 訪問日時・場所

9 月 9 日（月）9 時から 11 時

ハノイ市の国際協力機構ベトナム事務所において

2. 担当者

次長　清水様

JICA Japan Desk Coordinator 八木規子様

3. 機関概要

日本国際協力機構 JICA は外務省所管の独立行政法人であり、独立行政法人国際協力機構法に基づいて、2003 年 10 月 1 日に設立された。政府開発援助（ODA）の実施機関の 1 つであり、開発途上地域などの経済及び社会の発展に寄与し、国際協力の促進に資することを目的としている。

4. 講義内容

（1） 京都大学工学部の学生によるインターン報告

- インドネシアタンジュンプリオク港の緊急再建プロジェクト
- ハノイ都市鉄道建設プロジェクト
- 飛島建設ブルネイ現場
- 片平エンジニアリングインターナショナル（KEI）
- 国道 9 号線再舗装工事

における 2 週間のインターンシップ活動の概要とその感想、またそこで見つけた問題点について。

（2） オブザーバーとして参加してくださった宮崎様、井桁様、大兼様からのお話
主に開発コンサルタントの役割について。

（3） 対ベトナム日本の ODA について（パンフレットに沿ったベトナム事務所清水次長の講義）

概要：ベトナムは現在工業国化を目指し開発を進めている。その目標に即し、JICA は成長と競争力強化、ガバナンス強化、脆弱性への対応の 3 つを柱とし支援を行っている。支援方法としては、二国間援助による技術協力、資金協力

（無償支援と ODA ローンの両方を含む）、ボランティア事業がある。これらの支援方法を用い、経済インフラ開発、産業開発、地方農村開発、自然環境保全、保健医療、気候変動対策、ガバナンス、南南協力の分野において支援を行っている。以下パンフレットの URL。
http://www.jica.go.jp/vietnam/office/others/ku57pq00000m936r-att/Yakudou_ja.pdf

5. 質疑応答

（１） 資金協力において、主な投資先は電力・運搬の分野であったが、他の分野ではなくそこに重点を置いたのはなぜか。また、この二つを整備したことにより、これからのベトナムの経済にどのような変化が期待できるか。

（回答）件数的に電力・運搬分野が多いかというと、必ずしもそうではない。この分野はローンが主体なので、一件ごとの協力金額が大きくなる。また、この２分野を強化していくことで、ベトナムが目標としている工業化に大きく貢献することができ、それによりベトナム経済を刺激することができる。

（２） 2011 年に有償、無償ともに資金協力額が大幅に増加しているが、それはなぜか。また、ベトナムの経済発展に伴い、有償資金協力と無償資金協力のバランスを今後どう変化させていくのか。

（回答）2011 年に資金協力額が増加しているのは、2010 年度に資金協力を決定する予定であったものが東北大震災の影響で延期になり、その決定が 2011 年度に持ち越されたためである。またベトナムの経済発展に応じて、無償資金協力が減り、有償資金協力が増える可能性がある。無償資金協力と有償資金協力では支援内容が大きく異なるため、無償資金協力を有償資金協力に切り替えるというよりは、ベトナムの発展に伴い、無償資金協力すべきプロジェクトが減り有償資金協力の対象である大規模なプロジェクトが増えると考えられる。しかし、日本にも利益をもたらすプロジェクトやローンだと小さすぎて対応できていないもの、災害被害に対する支援などは、今後も無償資金協力をしていこうと考えている。

（３） 産業開発において産業人材育成に力を入れているようだが、その一環として行われている、職業訓練学校における教育内容の改善とは、具体的にどのようなものか。従来の教育内容にはどのようなデメリットがあったのか。

（回答）教育内容の改善では、日本学科を設けて日本式の教育を導入した。従来の教

育内容に問題があったというよりは、日本式の教育により得られるメリットがあったためこれを導入した。そのメリットとは主に次の 2 つである。1 つ目は従来なかった学生支援科が設けられ、ベトナム学生が安心して学業に励み就職活動ができる環境になったということである。二つ目は、日本式の教育を受けた学生は日系企業に重宝されるという点である。日系企業にとっても、特に IT など日本で研究すると多額の資金が必要になる分野においては、ベトナムの学校と協力することはメリットになる。日本の技術が漏洩してしまうのではないかとの懸念もあるが、これからは支援する側もそれを受ける側も一緒に成長していくという意識が大切になってくるので、ベトナム・日本の両者にとってメリットとなりうるこの教育内容の改善を行っている。

（4） 地方農村開発は、貧困格差を是正していくことに大きく貢献すると思われる。今までの農村開発支援で、貧困削減に大きく影響したプロジェクトは何か。また現行のもので効果が上がる期待が大きいのは、どのプロジェクトか。

（回答）ベトナムでは少数民族がほとんど農村に住んでいるので、農村を支援することによりマイノリティーへの配慮と貧困格差是正両方を行うことができる。この 2 つに最も貢献したものとして、中部高原ザーライ省のコミューンにおける参加型農村開発の支援が挙げられる。ザーライ省は住民の収入がベトナムで最も低い地域であったが、社会主義時代には国からの委託であった農村開発に住民が直接参加していくことで、住民や役所の意識を高めることができた。これが住民と役所の農村開発への長期的なモチベーションにつながっていくことで、これからのザーライ省の発展を期待することができる。これからの効果も期待できるプロジェクトとしては、農産物に付加価値をつけて販売していくということが挙げられる。具体的には農薬などを使わない安全野菜などである。ベトナムでは中国から農産物もたくさん入ってくるせいか、日本と同様食に関する安全に敏感な人が多いため、安全野菜は他の商品に対して大きくアドバンテージをとれる可能性がある。

（5） すでに農村開発を推進してきた途上国において、機械の導入によって農村部における失業者が増加したり、農薬によってその土地の生態系が崩れる等というケースがあると言われている。実際、農村開発における技術協力には、農村部における雇用の減少や環境破壊などのリスクがあるのか。ベトナムの農村開発において、このような事象が起きてしまったことはあるか。またそれを防ぐためにはどうしたらよいか。

（回答）農村における技術発展による雇用の減少は今のベトナムにとっては逆に都合

がいい。今ベトナムが目指している工業化においては、工業就業者の割合を増やすことも目標の一つなので、農業に必要な人口が減ればその分を工業にまわすことができることは目標達成のための手段の一つである。農村においては技術開発による環境破壊は起こっていないが、観光振興や産業開発によるハロン湾自然遺産の汚染問題が危惧されていたりするので、JICA は環境保全とバランスの取れた持続可能な開発を支援していく方針である。

6. 感想

私は今回の訪問で、JICA に関して大きく次の二つのことを学んだ。

まず一つ目は、JICA は、政府機関であるのに国益を重要視しすぎないで、きちんと両国の利益バランスを考えているということである。例えば技術支援に関して、私は日本の知的財産が海外に流出してしまうということは日本にとって不利だからしないほうがよいと思っていたが、JICA の方のお話では日本とベトナムが一緒に成長していく方法として技術支援を受け止めていた。開発支援をする機関は、開発が終わってしまえば自分達の利益はそこから得られなくなるのだから、このような、活動の目的（開発の完成）を求めることと、自分達が利益を得ることのバランスをとっていく姿勢が重要なのだと感じた。

二つ目に、JICA は、学問的な開発理論を実践に移すことができる数少ない場であると同時に、それが上からの改革にとどまらないように裾野まで目を向けるということもできる場であった。JICA が担当している分野は多岐にわたっているので全体を俯瞰する学問的視点も必要であり、かつそれぞれのプロジェクトを推進していくにあたって実践的視点も重要なのだなと思った。この二つの要素を兼ね備えることにより、国連機関や NGO などとはまた違う側面から開発を援助していけるのだろう。

この他にも実際訪問して、説明していただいたことで分かったことがたくさんあった。お忙しい中今回このような貴重な機会を作っていただいたことをとても感謝しています。本当にありがとうございました。

国際協力銀行（JBIC）

文責　中尾　実貴

1. 訪問日時・場所

9 月 9 日（金）11 時から 12 時
国際協力銀行ハノイ事務所にて

2. 担当者

首席駐在員　高橋様　　駐在員　長友様

3. 機関概要

・株式会社国際協力銀行法に基づく特殊会社であり、日本の公的輸出信用機関。日本政府 100%出資の特殊銀行で、政府と一体の法人とされる。前身は日本輸出入銀行。
・一般の金融機関が行う金融を補完することを旨としつつ、日本及び国際経済社会の健全な発展に寄与することが目的。
・日本にとって重要な資源の海外における開発及び取得の促進、日本の産業の国際競争力の維持及び向上、地球温暖化の防止等の地球環境の保全を目的とする海外における事業の促進、国際金融秩序の混乱の防止またはその被害への対処を使命とする。
・日本で唯一、国際金融に特化した政策金融機関。対外経済政策・エネルギー安全保障政策を担う。主にプロジェクト・ファイナンスを活用して融資を行っている。最近は出資業務も本格化させ、日本の国際政策及び成長戦略を推進する上でキープレイヤーとしての役割を担っている。

4. 講義内容

（1）　事業内容について（ベトナムでの具体的業務）

輸出金融、輸入金融、投資金融（工場設立など）、事業開発（環境査定）金融、出資、保証業務など、JBIC の任務のほとんどを行っている。案件数としてはどのメニューも多い。

具体的事例…8 月冒頭、JBIC×双日×ペトロベトナムで行う事業の融資契約の調印等。

『プロジェクト・ファイナンス』の具体例

着眼点によって意味合いが変わる。企業が単に融資を調達するのが企業金融とするならば、企業の信用力に「なるべく」影響しない形で融資を行うのがプロジェクト・ファイナンス。従って、その一つの『プロジェクト』のキャッシュ・フローにのみ依拠して融資の決定を行う。企業自体の評価には訴求しない。限定的訴求の場合はある程度まで問われる。

（２） ご自身の経歴について

高橋様　大阪にて投資金融担当→タイ赴任→海外ビジネス担当→2013 年 8 月にベトナム赴任、現職。

長友様　資源開発担当→製造業海外進出担当→2011 年ベトナム着任、現職。

5. 質疑応答

（１）共産党支配が強く国営企業中心の産業構造であるベトナムで業務を行う際に難しいことは何か？また、他の東南アジア諸国と比べて異なる点はなにか？

（回答）一党独裁体制であること。これは他共産圏でも同じで、ベトナムだからといって日頃ビジネスを行うのにやりづらいことは無い。

一党独裁体制の弊害は、まず意思決定プロセスがわかりづらく、遅いこと。誰が意思決定をしているのか把握するのにも時間がかかり、（最終的には首相まで）主務官庁で解決できそうな問題でも、意思決定が上まで求められてしまう。人、時間、お金も無駄が多い。この意思決定のプロセスについては、タイよりも時間がかかっている。ベトナムでは誰がどのように決定権を持っているのかがわかりづらい。ドイモイ政策から 20 年足らずで、まだ学んでいる段階。時間がかかる根本的な原因は、

1.各人材の知識不足で有効な決定ができない　2.人々に責任回避の気質がある

いずれも考えられる。ベトナムには優秀な人も多いが、共産国家の教科書で学んだ人間が企業や官庁に努めると、海外のやり方との齟齬に直面するのは道理である。（プロジェクト・ファイナンスなどの難しい金融手法など。）

（２）融資や投資対象として、案件数、金額共にベトナムの現地企業よりも日本企業の方が多いのか。

（回答）JBIC は日本企業が関わっていない案件には融資できない。仮に日系企業とベトナム企業のタイアップであっても、日系企業のほうが多いかもしれない。

（３）JBIC が日本企業やベトナム企業にもたらすメリットは？

（回答）【ハード】①ベトナムにおける雇用を生み出すこと　②ベトナム企業にとって製品調達手段が増えること　③共同技術開発により高度な技術移転が期待できること【ソフト】④先進国企業のマネジメントやビジネスマナー、コーポレート・ガバナンスなど、合弁しなくても共にビジネスを行うことで学べること

（４）BIDV と JBIC が提携し、日本の中小企業の進出支援を行おうとしているが、想定している業種は何か？

（回答）特に絞ってはいないが、結果的に製造業＞サービス業が現状。日本のものづくりの強み（自動車・電気企業）を活かすとそうなる。

（4）-2　そもそも進出の時点で製造業が多いのか、それとも融資条件のスクリーニングによりサービス業の進出が減っているのか？

（回答）JBIC の融資は長期融資（１年以上）が前提。よって、設備投資の案件が多い。設備投資が重要な製造業は減価償却にかかる４～５年の期間は融資を求める。一方、サービス業の問題は設備投資ではなく、日々の資金繰りである。

もちろん長期融資の必要なサービス業には門戸が開けられている。

（５）同じく中小企業の進出支援を主要業務とする JETRO との違いについて

（回答）JBIC は銀行。JETRO は投資環境を調べて、進出検討企業に対して情報提供するのが主要業務。情報提供によって進出のサポートや、既存企業のサポートを行う。（セミナー、勉強会など）情報提供にあっては JETRO のほうが専門的だ。

（６）他国との競争が激化する中で、日本をどう売り込むか？

（回答）日本が世界に勝てる技術はまだたくさんある。JBIC は、「日本企業が海外で仕事をしやすいように、間に立って政府や企業にものを申す」だけで、特別に何か宣伝は行っていない。

近視眼的になりがちなベトナム企業は、安易に他国の安価なプロジェクトを実行して故障や遅延に悩むことも多い。安かろう悪かろうか、高いけれど質が高いか、どちらがいいですか？という言い方はする。長いサイクルで選んでほしいというのがセールストーク。（プロジェクト・マネジメントの質が良ければ、結果的にコストベネフィットも高い。）特にインフラ事業は、長期使用を鑑みれば日本製品のほうが格段に優れている。日本にとっても、ルールづくりに参画できる意義が大きい。

【具体例】

インフラプロジェクトには、民活プロジェクト（官民連携/PPP）などで民間の力をもっと入れていかねばならない。外国資金が入る際助言を行うことで、外資全般が入りやすいルールづくりに関与できる。外国投資家が入りやすい仕組みを投資家自身と一緒に作ろうという仕組みを確立したい。最終的には融資につながるよう協議していく。例えば三菱商事など、日本商社は電力プロジェクトに力を入れている。

(6)-2　ベトナムに知見を与えるというが、逆にベトナムから学べることは？

（回答）「郷に入っては郷に従え。」日本の管理システムやパワハラ文化をそのまま持ち込むケースもまま見られるが、これでは反感をもたれるのみ。例えば、年に一度のスポーツ・イベントで、工業団地の１画をサッカーコートにし、息抜きの場を作ったり、社員旅行を行ったりして従業員定着率を上げる試みも必要。旅行では、キャンプファイヤーなどの企画や出し物をさせるなど、チームワーク作りも大切。日本人・ベトナム人が家族ぐるみで付き合い、融合するのが望ましい。ロイヤリティも高まる。

（８）進出支援や銀行業務など、民間企業と重複する業務があるが、JBIC の特殊性と強みはなにか？

（回答）JBIC は民間との協調融資を行っている。（6 割上限）金融機関としては確かに民間とも一緒だが、政府系であるため

1.民間ではとれないリスクがとれる（政治リスクによる返済停滞の猶予）

2.有事には相手国政府・企業に打診できる。

以上の『リスクマネジメント』に強みがある。

また、民間は収益前提で行っている。もちろん JBIC も収支相等の原則に従うが、儲け一番ではなく、少なくとも人件費だけは稼ぐという思いだ。従って、民間との関係は競合ではなくあくまでも補完。政府系が肥大すると民間の経営妨害となってしまう。儲けなくても良いが健全な銀行経営が行われるよう、最終的には成果が国民の利益に還元されること、それこそが公的機関の使命である。

6. 感想

穏やかで優しいお二人だったが、そのお話の節々に国益の為に働く気概と自信が感じられた。最後に『私達は日本のために仕事を行っている。』との言葉を頂いたが、実際に世界を舞台に働く方の口から聞くにあっては現実味に溢れ、迫力があった。

私達にとっては「普通」に世に溢れている製品やサービスも、他国にとっては必要でないものかもしれない。品質を見極めるほど経験に長けていない途上国の人々に、『長期的視点』で先進国からものをいうことは、言うに易く理解してもらうにはとても難しそうだ。相手との妥協を測り、真に求められるものを提供できるよう試行錯誤しながらも、最終的には自国利益に落としこむ作業は、やりがいこそあれとても大変だろうと想像する。ともあれ、その使命に駆られる JBIC 職員の方の「格好良さ」には、理想の社会人として憧れを抱かずにはいられなかった。

世界銀行　ハノイ事務所

文責　潮崎真惟子

1. 訪問日時・場所

9 月 9 日（月）15 時 30 分から 16 時 30 分

ハノイ市の世界銀行事務所にて

2. 担当者

Senior Economist Macro Economics:Doan Hong Quang 氏

Communication officer：Nguyen Hong Ngan 氏

3. 機関概要

各国の中央政府または同政府から債務保証を受けた機関に対し、融資を行う国際機関。本部はワシントン D.C.加盟国 184 ヶ国。

1944 年ブレトン・ウッズ会議で設立が決議された国際復興開発銀行と、1960 年に設立された国際開発協会を、あわせて世界銀行と呼ぶ。国際通貨基金と共に、第二次大戦後の金融秩序制度の中心を担う。世界銀行は、第二次大戦後は開発資金援助に特化している。

4. 質疑応答

（1） ベトナムで買い物をした際、お店が細かいおつりを持っておらず、おつりを正確に貰えないことがあるのはなぜか

（回答）おつりが足りていないのは、経済危機の影響。高いインフレーションが起きていたため、人々は小さいお金を使わなかった。2013 年もまだ 6~7%のインフレーションが残っており、物価が高い。そのため小さいお店では、十分な量の小さい単位の貨幣を持っていない。

（2） ベトナムの経済発展の経路はどのようなものになるとみているか？（カンボジア、ラオス、ミヤンマー等周辺国との違い、あるいは先発アセアン諸国と比べた優位性はどこにあるのか）

（回答）2000 年頃、投資は GDP 比 30%ほどだった。2008~2009 年、GDP 比 45%の投資に増えたが、これは持続可能な開発モデルではない。そこで 2010 年、効率的な投資モデルへの移行が図られた。公共投資を削減し民間投資も世界経済危機の影響で減少し、現在は GDP 比 35%に減った。しかしその影響で GDP の成長が今までの 7~8%から 5.5%に下がった。

高投資モデルから効率的モデルへの転換の為には、

① 公的部門を効率化すること。: ベトナムの銀行や企業は、カンボジアなどと比べて規模が大きいが、運営が非効率的であるため、改善する必要がある。

② 公共投資を減らすこと：そのために政府が今行っていることは、年ごとに資源配分を決める仕組みから、中長期的なスクリーニング、投資のモニタリングの強化

③ 銀行部門の改革：今はあまり財務状況が良くない。政府・中央銀行による、金融機関の業務の監督を改善する。

【他の ASEAN との違い】

カンボジアなどよりもベトナムの輸出の構成が多様。

ラオスは資源への依存度が高い。

2020 までに取り組むべき課題は３つ

① 政府の改革

② 人材開発(教育システムの改善。30 歳未満が 5200 万人で、カンボジア・ラオス・ミャンマーに比べて多い。)

③ インフラストラクチャー建設(空港、港などの接続を効率的にして、物流を円滑にする。海外製品などをよりマーケットに届けやすくしたい。)

（３） ASEAN の統合が更に進むと、他の ASEAN(タイ、マレーシア)との競争が激しくなる。労働力の質を改善するには時間がかかる。ベトナムは世界経済の中で成功しているが、これは継続しうるか。

（回答）次の 3 点から、継続しうると考える。まず、中国から賃金の上昇をうけてベトナムに来る企業もあり、ベトナムに機会は充分あること。また、ベトナムは労働力の質を高めるために、教育に多く投資していること。さらに、国内市場はかなり大きいため、そこを使って経済成長も可能であること。

また例えば、WTO にベトナムが加盟したとき、急遽主要な関税を撤廃した時は大変だった。輸入品によりベトナム市場が席巻されてしまうおそれもあったが、それほど深刻にならず、数年で克服出来た。だからベトナム企業の国際競争力は弱くないはずである。

（４） 発展の結果、将来ベトナムは自立しうるか？(ベトナムが自国の信用力で国債を発行し海外市場から投資資金を集めうるのは何時か？)

（回答）これまでに国際市場からは 2 回だけ借りたことがある。2 回目は 2010 年に 10 億ドル。世界銀行、ADB、JICA のローンを利用しているため、国際市場からお金を借りることに積極的な訳ではない。

2010 年に中所得国になり、IDA 条件でなく IBRD 条件のローンが増えた。(IDA 条件：無利子で 40 年、IBRD 条件：国際市場から借りるよりは安い程度)
例えば中国などは IBRD 条件で借りつつ国際市場から資金を調達しているから、借り入れがあるからといって、国際市場から潤沢に資金を調達できないとは限らない。借り入れと金融的自立の相関は薄いのではないか。
だが、ベトナムはまだ中所得国でも最下層なので、融資をする側に回る時期は考えにくい。

（5） 山岳地帯の少数民族に対してなどの援助の際、開発を進めていく中でどのように現地少数民族の独自の文化を維持していくか？
他に、援助して介入することによって引き起こしてしまう被害（デメリットのこと）は何か。(おそらく、環境問題など。→多数派の考えに基づいた援助により少数原住民の生活に介入することが本当に正しいのか考えたい。所得水準の向上と独自文化維持の両立。)

（回答）日本から学びたい！日本が、文化を残しつつ経済発展した例なのではないか。文化維持には多くの資金・人を割く必要がある。特にベトナムは多くの少数民族を抱えるため、大きな問題。今まで北部少数民族に対しては、コミュニティベースのプロジェクトをやってきた。ボトムアップでやっていくことが必要。
また、これは少数民族の問題だけでなく、キン族（ベトナムでの最大多数民族）の問題でもある。グローバリゼーションの影響で、マジョリティの文化にも影響が及ぼされるのだ。(中国テレビ、韓国ドラマなど)

（6） 今後の展望(長期的視野で、量は維持しつつも分野ごとの比重の見直し、あるいはだんだん融資量そのものを減らしていくなどの見通しはあるのか？
融資を減らしていくまでに、何が課題・障害となるか、その対策は？)

（回答）世界銀行のベトナムへの貸付にまだまだ量的変化はないだろう。しかし譲許性[1]が低い、より市場での調達に近い条件での借り入れになっていくと思われる。だが貧困削減、経済開発に対してお金はまだまだ必要である。インフラストラクチャー、電力、人材開発、保健衛生、などもまだ発展の途中の段階。
ローンの分配に関しては、ベトナム政府と交渉中。インフラストラクチャーが最優先事項。また政府はまだ、IBRD からのローン（市場での調達条件に近い）よりも IDA の利子が低いローン（譲許性が高い）で借りられるように頼んでいる。
2030 年までの新しい Global Goal ：極度の貧困をなくすために、それに関連したプロジェクトに注力して世界銀行のローンを活用すること。

[1]援助条件の緩やかさのこと。（譲許性が低いほど、厳しい条件）

（7） ADB や JICA と、世界銀行の、ベトナムでの住み分け、連携・協調は実際にどのようになされているのか？

（回答）ミーティングを行って、どのように連携するか話し合う。グループ間で利益がぶつかることもあるが、開発のパートナーとして、とにかく話すことがとても大事である。特に大きなミーティングとして、年に二回援助国会合が行われている。今回中所得国への移行に伴って、その会合の内容が、ベトナムがより主体的に自国の開発を考える場に変わった。しかしながら低所得国時代と同じように、援助国側とベトナム政府側の話し合いも濃密に行われている。

（8） 社会主義が残るベトナムでは、他の東南アジアと比べて、世銀プロジェクトを進めやすいのか否か。どのような点で優位であり、どのような点で不利か。

（回答）

①プロジェクト実行の際、最初の 2 年間は「準備」に費やされて、何も行われない。プロジェクトの事前準備が不十分だからである。また、そもそも準備段階に多額の資金を必要としてしまうこと、ガイドラインなどが充実しておらずプロジェクトの実行過程が曖昧なことが問題。

②土地制度は欠陥だらけ。土地は国のもの。市場主義でないため、土地所有者に払うべき合理的値段が計算出来ない。また所有者の地位によって優遇などがある。

ひとつの解決策として、独立した第三者のコンサルティングにより土地の値段を確定させることがあげられるが、結局は当事者が交渉に合意せねばならず、妥協と折衷に。

（9） 他国からベトナムのガバナンスに対する不満が聞かれることもあるが、ガバナンス改善のために何か取り組んでいることや、個人的に思うことはあるか。

（回答）これは非常に大きな問題。法をむやみに増やせば良いわけではない。

問題は、

① 中央集権の制度内で作られた法を、国中あまねく同じ解釈をさせるのは難しいこと。

② 法の草案を作るプロセスに問題があること。法を作る段階で、その法律によって最も利害をかぶる者が関与する仕組みになっている。

5. 感想

経済開発と独自文化維持の両立に関して聞いた時、「どうすれば良いのか、日本に聞きたい」と言われたことに驚いた。現代日本がそれらを両立して出来たというイメージ

はなかったし、そもそも過去にその両立に悩んだ時代が日本にあったかどうかについて考えたことが無かった。日本人の生活の端々に日本独自の文化が残っているような気はするが、戦後の発展の中で何が失われたのだろう。そしてどんな文化がどんなプロセスで維持されたのだろうか。

ベトナムでの研修を通して、日本を「発展の先進モデル」として捉えられることが多かったことに驚いた。しかし同時に日本は、環境問題・公害問題のように「失敗の先進モデル」でもある。日本の様々な経験を客観的に見直して、これから似た経験をするかもしれない他国に受け継げる反省があるか、今一度しっかりと勉強したい。

如水会ハノイ支部の方々との懇親会

ベトナムについて二日目の夜、初めての企業訪問を２件終えた後、如水会ハノイ支部の皆さんとの懇親会が開かれた。社会の第一線で活躍されているOBOGの方とお会いするのはかなり緊張した。実際に会ってみるととてもきさくな方が多く、徐々に緊張もほぐれてきた。

OBOGの方々は年代・職種も様々で、銀行に勤めている方、商社勤務の方、外務省の方、またベトナムの法整備に携わっている方などがいらっしゃった。

ベトナムにおける生活で困るのはベトナム語の発音が難しく、簡単な言葉ですら通じないということだった。例えば、ベトナム語でありがとうは‘Cám ơn.（カムオン）’と言うのだが、ただカムオンと発音しても通じない。ベトナム語は声調が六つあり、日本人には発音がとても難しいそう。OBの方のお話しでは、Cám ơn.が通じるようになるまで半年以上かかったとか。

またベトナムでは屋台が多く、歩道にプラスチックの小さい椅子と机を並べて鍋や焼肉などの料理を食べている人々がたくさんいるが、OBの方が屋台で食べたところあたってしまったそう。日本人の胃腸には少々刺激が強いようで･･･。

特に印象に残っているのは銀行勤務の方と商社勤務の方のお話しである。お二人のお話しは海外駐在で日本を相対的に見ることができることや、幸福と経済的な豊かさについてなど、普段の大学生活では気づけない視点でのお話しでとても興味深いものであった。

海外駐在によってその国の良い点悪い点に気づくと同時に、日本や日本人の良い点や悪い点にも気づくそうだ。駐在している国から日本に戻り、切符を買う列に並んでいると前の人が切符の購入に手間取っているだけで列に並んでいる人がいらいらしていることが気になったそうだ。日本人は列が動かず少々長く待たされると遅延の原因にイライラしたりときには文句を言ってしまったりするようで、OBの方はその傾向にがっかりされたそう。ただ悪い点だけではなく日本の良い点にも気づくことは多いとのこと。確かに私もベトナムに一週間滞在しただけだが、日本の価値観が絶対的なものでないことを身をもって感じる場面は多かった。

また、幸福と経済的な豊かさというテーマにも話が及んだ。ベトナムの隣のラオスをOBの方が訪れた時に、ラオスは経済的には豊かとはいえない発展途上国であるもののラオスの人々はみんな笑顔で楽しそうに日常生活を送っている様子に驚いたとのこと。ラオスは幸福度がなんと世界一で、経済的な豊かさと幸福度には相関性がないことの証明になっている。対照的に、日本は経済的には非常に豊かだが、世界的にみた幸福度は決して高くはない。日本の経済成長はかつての高度経済成長期ほどは見込めないことは自明であり、経済的な豊かさとは別の方向で幸福を追求していく必要があるのではないか、とおっしゃっ

ていた。

様々な面白いお話しをしてくださり、あっという間に時間が過ぎてしまいました。一橋はOBOGの方々のとのつながりが強いと評判ですが、初めて会った私たちを歓迎し丁寧にもてなしてくださり、そのつながりの強さを実感しました。如水会ハノイ支部の皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

レストランの前でハノイ支部との皆さんと

女性陣スーツでピシっと企業訪問!　　男性陣のきらきらスマイル♪

お昼に食べた中華料理♪　ここで思い出に残るおつり事件が起きました^^
(コラムをご参照ください!!)

如水会ハノイ支部の方のアレンジで訪れた、立派なレストラン!!
思わずシャッターをきってしまうお二人♪

昨日よりもバイクに慣れ(笑)、一列通行で遠くまで探検です♪

長い一日の終わりに。甘いコーヒー、フルーツジュースを飲み、如水会の方々のお話を皆で共有しました!　まだまだ続きます!

コラム　韓国企業の攻勢

過激なナショナリストではないと自負している。と、はじめながらも、ハノイの街中にTOYOTAの看板を見て相好を崩し、ホーチミンでNOKIAの看板を指差して眉をひそめる自分に、何とはなしに気づいている。

今、韓国企業の攻勢が凄まじい。国家ぐるみで海外進出を進める韓国、その巧みな戦略に日本は大分遅れをとっているのではないか。JETRO調査（2012）によれば、ベトナム進出を果たした日本企業は940社、対する韓国企業は2000社を越えるらしい。不安を一層確からしくさせるほど、韓国の影は目に見えて大きかった。

1. 宣伝力

韓国ドラマやK-POP、一見工業製品とは無関係に思えるコンテンツ文化を用い、韓国は国がかりで売り込みを続けている。その威力は思う以上に強い。J-POPという言葉こそ知れ、その実誰一人アーティストを知らない学生は多い。一方、韓国人の俳優や歌手は連日話題に登るという。彼らが身に付け、用いる韓国ブランドも同時に知られていく。意識、無意識に関わらず植え付けられたネームバリューは、しだいに『時代遅れ』になりつつある日本ブランドを凌駕している。

2. 進出力

韓国が、かつての日本企業に取って代わろうとしている事には間違いないと思う。過去に日本企業で埋まっていた地域には、まず撤退した日系の隙間を埋め、更にそこから侵食するようにして韓国系企業が入ってきている。安い人件費で良質の労働力を確保でき、投資規制も緩やかなベトナムは、中小企業にとっても魅力的だ。大企業などは、社会格差までを考慮した複数のブランドラインをもってして進出に拍車をかけている。リスクテイクに寛容で、意思決定のスピード感を重視する韓国企業は、機械類から消費財まで、あらゆるベトナム人の生活に密着している。日本企業の看板を覆い隠すように建てられていく看板を見て唇を噛む日本人は、私だけでは無いと思う。

3. 交渉力

韓国は何より交渉に強い。それは押しの強さだけでなく、相手（ベトナム）が求めるものを的確に差し出し、落とし所を見つけるという点で、日本よりずっと優れていると感じる。

電化製品にせよ、化粧品にせよ、質も値段も共に上から日本、韓国、中国だといえる。まさに発展の途上であるベトナムにとっては、あまりに質の悪い製品を平均水準とするのは避けたい一方、身の丈に合わない質に高額を支払うリスクも取り難い。質も値段も中間

どころ、納得の上で取引できる韓国製品は、これから少しだけ背伸びしたいベトナムに最適である。そしてこの事を、韓国自身がよく知っている。巧みな営業トークに交渉を妥結させ、更に次の機会につなげていく。「扱い方が上手い」とは、苦笑混じりのベトナム人の言葉だ。

一方、一部の人々が極度の『韓国シンドローム』に蝕まれるのを、ベトナムのメディアや世論は冷ややかに見つめているという。充実したコンテンツのウラに見え隠れする商業主義の意図に気疲れする人も増えている。幸か不幸か、これまで商業と無関係に一異国文化として取り込まれた日本のアニメ、漫画や、日本の謙虚なビジネスの姿勢（それが利益につながるかは別ではあるが）には、純粋な好感が持てるというから興味深い。韓国企業・韓国政府のやり方に一本取られたと結論づけるには時期尚早かもしなれない、

より一層の競合を見る日本と韓国だが、共存の道はあるのだろうか。
『今の時代、我こそが、と国々同士で争っていては、皆が共倒れしてしまう。協力・協調の先に共通の利益を見出すのが、これからの理想のあり方ではないか。』−実は今回の企業訪問の中で頂いた意見の一つである。
僭越ながら、私はこれに反対である。ユートピアを目指してお人好し国家に成り下がるより、現実主義者と揶揄されるほうがまだ良い。
もちろん、「共通の利益」に反対するつもりはないし、『共存』を否定するわけでもない。真の『共存』とは、どちらかが依存したり、互いの利益を食い物にしたりするのでなく、共栄する為に、互いに強くあることだろう。日本は強くあらねばならない。必要な争いは闘い抜いてこそ、肩を並べるに相応しい国として、世界に認められるのではないかと思う。

ベトナム調査

三日目

株式会社　三菱商事

文責　村田瑠璃子

1. 訪問日時・場所

9 月 10 日（金）9 時から 10 時 30 分
ハノイ市の三菱商事事務所にて

2. 担当者

ハノイ事務所　所長代理　三木尚彦様

1995 年東京本社入社。自動車部門に従事しインドネシアでの販売支援を担当。その後鉄道のレールメンテナンスマシーン(保線機械)の輸入・販売を担当。2002 年に三菱社内の組織改編が行われ、東京の開発建設の仕事を 2012 年まで担当。(2005 年から東京電力との合弁会社である省エネ事業会社に出向。）その後 2013 年 2 月にハノイ赴任が決定。現在に至る。

3. 機関概要

三菱グループの総合商社。

三井物産、伊藤忠商事、住友商事と並んで日本を代表する総合商社であり、三菱東京 UFJ 銀行、三菱重工業と並んで「三菱グループ御三家」の一つ。

総合商社は「ラーメンからロケットまで」といわれるように取扱商品・サービスが極めて多い点で、日本独自の業態であると言われる。ただし、商社冬の時代を経て、旧来のような単純な貿易・販売や商社金融業務のほとんどは現在では子会社・関係会社に移管されており、国内・海外企業への出資ならびに経営管理、経営層を含めた人材の派遣、IT の蓄積やシステム開発など、事業持株会社やある種の投資会社に近い機能が総合商社本社の業務内容となってきている。また、これらの機能を活かして、自ら新規業務を立ち上げることも多い。

4. 質疑応答

（1）　MC では様々な製品を取り扱っていらっしゃいますが、ご自身は現在どの分野を担当されていますか?

（回答）三菱全体では環境インフラに重きを置いているが、ベトナムではあまり省エネのビジネスチャンスはない。重きをおいているのは、インフラ、船、自動車、エレベーター、医療関係、不動産、水事業など。インフラ、医療関係については JICA と協力し、特に医療関係は JICA の提供した ODA 案件を引き受けている。航空機について

は、官民連携である。特に近年ベトナム航空に対する売り込みに力を入れている。不動産については、ハイフォンに大型工業団地を建設。工業団地には、日本企業を売り込むだけではなく、周辺地域を含めたタウンシップ開発などを行っている。最近ではベトナムとシンガポールの共同案件に間接出資を行い、シンガポールと組んでハイフォンの開発を行っている。これら多くの事業をハノイ事務所では日本人 4 人でカバーしている。一つの分野に集中する本社での仕事とは異なり、あらゆる分野を少人数でカバーする海外支店での仕事は、様々な人脈に恵まれるなどの面白みがある。

(2)　MC ベトナム全体で、現在どの分野に力を入れていらっしゃいますか? ベトナムの輸出品を見たところ、近年一次産品の比重が減り、機械製品など二次産品の比重が増していますが、その傾向が大きいのでしょうか。また将来的にはどの分野が強くなっていくとお考えですか?
（回答）まだ一次産品の割合が強い。ベトナムの若者は新しいものを吸収しようという意欲が高い。こうしたことから、今後商社の役割は変わってくると思われる。またベトナムでは現在内需の拡大が激しく、輸出によってというよりも内需が逼迫することで物流が激しくなると思われる。

(3)　御社にとってのベトナムへの投資のメリット、デメリットは何ですか?
(回答) ベトナムだから、というのは特に無い。というのも投資回収率が高いと本店で判断されたもののみを支店は事業として扱えるから。投資回収率が高いか低いか、それだけが投資の基準である。個人的見解だとベトナムはそのポテンシャルの高さ故に、今後案件が増えていくと思われる。

(4)　御社が他の商社に対して大きく差別化を図っている点はありますか?
(回答) 発電、エビの養殖、不動産関係など。発電は ODA と連携し歴史的に長く扱っている。電力関係の案件数が圧倒的に多い。逆に他の商社に劣っているのは、ネット事業、自動車など。今後はベトナムで取引している会社を整理し、とれる案件を絞り出していく必要がある。

(5)　ご自身の個人的見解、ベトナムでの経験で一番心に残っている出来事を教えて頂けますか。
(回答) 日本で事業管理を担当しそこで身につけたスキルが現在活きており、 仕事がとても面白く、興味深い。JICA や日本大使館などの政府機関に頻繁に出入りする機会が増えたのも、赴任先ならでは。人間関係に関しても、子供を通じた付き合い、レジデンスでの付き合い、大学の同窓など様々な付き合いが増え、日本では味わうことのできない密な関係が成立している。

（6）　国益はどの程度重視されますか?
（回答）　政府の後ろ盾があってこそ成立しているプロジェクトも多く（新幹線など）、ある程度国益重視である。国が何を売り込みたいのか、採算基準にあうかなど、実行までに様々な段階での判断を重ねている。

（7）　中国、韓国などとの協調受注のついては、どうようにお考えですか?
（回答）　中国、韓国の人件費の安さを利用することは多い。金額的に全てを日本企業が賄うことは厳しいからだ。コアな部分は三菱重工だが、下を支えているのはヒュンダイ建設だったりする。

5. 感想

担当して下さった三木様は、こちらが用意していた質問全てに的確な答えをくださり、大変満足度の高い訪問となった。下調べの最中からその事業内容が見えづらかった商社だが、こうして実際に中で働いていらっしゃる方にお会いしお話を伺うことで、理解はだいぶ深まったように思える。それでもなんとなくぼんやりとした印象が拭えないのは、商社が扱うフィールドの広さ故だろうか。

最も心に残った話は、商社の海外支店駐在員としての日常生活の話である。商社マンの海外出張に興味を持っていた身としては、こうした生活レベルでの話が一番興味深く、もし自分自身がこの先海外出張をする機会があるならばこのような体験をするのだろうかと、思わず想像を膨らませてしまった。

三菱商事訪問に限らず他の企業を回った時にも感じたことだが、 日本の大企業が海外で担う役割の重さとは私が今想像できる以上のものであるのだと思う。そしてその大企業の中の一握りの人の手に、一国の経済を変えてしまうほどの力があるというのは、ある意味恐ろしい。一方で、それだけの力を巨大プロジェクトを通して握っているからこそ、一人一人の仕事に対するプライドも尋常ではないのだろう。仕事に対する誇り、その仕事を与えてくれる企業に対する忠誠心とは、こうして生まれるのだろうか。

何はともあれ、仕事に対するプライドの強さはその人の語り方から伝わってくる気がする。三木さんの語り方がまさにそれだった。

Mitsubishi Corporation
Reception

ドンラム村

文責　新井小百合

1. 訪問日時・場所

9 月 10 日（金）13 時～

2. 担当者

JOCV 吉原三貴様　宗陽香様　吉本康之様

3. ドンラム村概要

人口約６０００人。のんびりとした雰囲気の中、伝統的家屋、つぼ、田んぼが残されている。

２００５年に、ベトナム農村として初めて国家文化財となった村であり、現在は世界遺産を目指している。昭和女子大や奈良文化研究所、JOCV の方々によって専門家を派遣し保存や修復、調査にあたっている。

4. 訪問内容

（1） 春巻き作り

二つのグループに分かれて春巻き作りに挑戦。具材は村の方が既に調理をされていて、私達はそれをライスペーパーで巻いた。上手く巻けた人は村の方々から褒められた。

（2） 皆でご飯

村の方の民家に入り、二つのテーブルに分かれ、青年海外協力隊の方とお話しをしながらご飯を食べた。皆で作った春巻きを揚げたものが出てきて、すごくおいしかった。他にも、カボチャの煮物、鶏肉の炒め物などおいしくてヘルシーなお料理をたくさん頂いた。メンバーの皆もご満悦。

（３） お土産購入

たっぷりとご飯を食べた後、集合写真を撮って、村の出口へと向かった。その途中お土産屋さんがあり、思わず立ち止まってお土産を買ってしまった。麦わら帽子やうちわなど、手作りの商品でぬくもりがあった。

その後青年海外協力隊の方にお見送りをしてもらって、ドンラム村を後にした。

5. 質疑応答

（１） 観光業を営める人とそうでない人の村内での格差をどうやって埋めるのか？

（回答）伝統家屋、伝統料理を作れる技術が有るか、無いかで観光業を営むスタート地点が変わってくる。ゆえに、技術の無い人には、おみやげの売り方などを教えて支援している。ただ、人によって向き、不向きがあるのであくまでもきっかけ作りを提供するようにしている。

（２） 他の青年海外協力隊の農村開発支援と比べて、ドンラム村での支援の特徴は何か？

（回答）観光が特徴。ただ、村の人々自らが考えて行動するようにさせる。有機野菜栽培の知識を生かした農業、建築指導、パソコン指導なども行っている。

（３） どのような顧客をターゲットとして観光業をしているのか？

（回答）今のところは、ターゲットは無い。観光客がいないと成り立たないから、とにかく一人でも多くの人に来てほしい。

（４） 観光業をやることによるデメリットは何か。また、それへの対策は何か。

(回答) 収入が不安定なところや、格差が広がってしまうところ。(観光業を開始する前後で収入が１０倍に増えた人も)対策として、ポスターで村の宣伝をして客寄せをしたり、低所得の住民の気持ちを配慮して新たな観光形態を作るようにしている。

（5） インフラ整備・教育支援などといった支援プログラムとしては今どのようなものが必要か。

(回答) 今村に一番必要なのはコミュニティー開発である。具体的には PDCA サイクルなどである。ベトナム全体に言えることだが、近視眼的な見方をする人が多く、長期的なプランで社会に還元するといった試みがない。よって、村の人同士でしっかりと話し合って、村全体の底上げをする必要がある。

（6） 客観的視点・長期的視点に立つことに慣れている外部からの支援者である青年海外協力隊の方々と、村の人たちで、意見が対立することはあるか。

(回答) あくまでもボランティアの一環として、村の人々にアドバイスをするだけなので対立はない。協力隊員は期限があるので、村の人々自身が考え、動いてもらわないと意味がない。

（7） 目指すモデルとしている実際の観光地はあるか。そのモデルに近づくための長期的なプランはあるか。

(回答) 日本の飛鳥村や、韓国のヨンドン村。(ヨンドン村にはもとから外国人がいて、ドンラム村とは少し状況が異なるが) 家屋、村の資産をそのままの状態を維持しながら残したい。しかし、現状としては、とにかく観光客を呼んで収入を安定させることが大切なので、モデルに近づくための長期的なプランはない。

6. 感想

とても楽しくて、リラックスできた。村全体の雰囲気が穏やかで、時間がゆっくりと過ぎていた。村の方々も青年海外協力隊の方々も、みなさん親切で色々なお話をして下さった。特に、ボランティアのあり方についてのお話は興味深かった。というのも、単に手助けをするだけでは村の人々のためにならないことが改めてわかり、援助の仕方について考えさせられたからだ。村内での所得格差など様々な問題を解決しながら、村を発展させていく困難さは、実際に自分の目で確かめて話を聞かないと理解しにくいだろう。

また、村の方々と交流しながら、懸命に働いている協力隊の皆さんを見て、ボランティアをしたいという気持ちが一層強くなった。国内、海外問わず、助けを必要としている方の役に立ちたいと思う。

皆さんいい笑顔。

おみやげ買いました。

三日目のドンラム村訪問では、企業訪問から一息、リラックスした姿が♪

村の方が振る舞って下さった料理の素朴な味に、どういうわけか懐かしさを感じました・・・

ギャラクシーホテル前のフルーツジュース屋さん。お店の方のご好意で、通りに椅子を出してジュースを飲むという貴重な体験ができました・・♡　ハノイの街を肌で感じながら語り明かしたことは、忘れられない思い出になりました。

コラム　ティエムさんの深いい話

ハノイでガイドをつとめて下さったティエムさん。数々の心温まる話をしてくれたので、ここで皆さんと共有したいと思います。

1、2 万ドン紙幣のひみつ

みなさん、これは二万ドン紙幣です。他の額の紙幣同様、ごく普通に使われているお札ですが、二万ドン紙幣には特別な意味があります。この裏に描かれている絵、なんだか分かりますか？正解は日本橋です。ベトナムのホイアンというところにある、1500 年代の終わりに日本人が建てた物です。これができてから日本とベトナムの間で朱印船貿易が始まり、今日まで友好的な外交が続いています。ベトナム人は、この日本橋を作った日本人と、現在までベトナムと仲良くしてくださっている日本への尊敬の意を込めて、二万ドンに日本橋を描きました。みなさん、私は日本のことをとても尊敬していますし、これからもずっと今までのような良い関係を続けていきたいと思います。そのためには、みなさんが、二本だけではなく三本、四本と、ベトナムと日本の架け橋になって下さい。

ティエムさんはこの後、にほーん！といいながら、水を二本ずつ持って私達に配ってくれました。このように、日本を尊敬してくれる人がいるということは、とても励ましになるし嬉しいことですね。私達もティエムさんの強い思いに応えられるよう、頑張りたいと思います。

2、ティエムクイズ！

ここでクイズです。平均年収が 720 万ドン、日本円で約 36 万円であるベトナムにおいて、1 番高値で買われた車はいくらでしょう？
私達
1000 万円！750 万円！3000 万円！
ティエムさん
うーん、皆さんおしいです！正解は 1 億 2000 万円です。どこの国にも所得格差はありますが、ベトナムの所得格差はかなり大きいようです。
みなさんはもし 1 億円あったらなにに使いますか？ベトナムでは、1 億円あったら欲しいと思うものはすべて手に入ります。でも私はまず、その半分の 5 千万円を、東日本大震災からの復興のための資金として寄付します。そして 4995 万円をベトナムや他の発展途上国で学校を建てるために使います。そして、私はまだベトナムで生活必需品であるバイクをもっていないので、残りの 5 万円で小さな 50cc のバイクを買いたいと思います。

日本人は、実際そんなことする人はいないだろうと思うかもしれませんが、この話をしているときのティエムさんはとてもまっすぐな目をしていました。彼は本気でそうしようと思っています。今の日本に、このように他に献身的になれる人はどれくらいいるでしょうか。私の予想を上回るといいな、と思います。さて、皆さんは 1 億円あったら何に使いますか？

1、ティエムさんの日本留学記

私はベトナムの大学を出た後、日本語を勉強するために日本に留学しました。私の他にもいろんな国から留学生が来ていましたが、そのころは韓国からの留学生がたくさんいました。彼らは日本により発展的な勉強をするために来ていましたが、彼らの両親などから日本の韓国併合時の話を聞かされていたせいか、日本で生活しているにも関わらず、日本のことを嫌っていました。留学生の仲間たちと飲み会をするときには、あちこちのテーブルで日本の悪口が飛び交いました。日本が大好きな私にとって、それはとても不快でした。そんな時、ある韓国人の学生が私に日本の軍国主義の愚行を長々と語りだしたのです。私はしばらくそれを聞いていましたが、ついに頭にきて立ち上がり、こう言いました。「確かに日本は韓国にとてもひどいことをしてきたかもしれない。でもそれを理由に、もう直接関わった人がいない日本を責めていいと思う？韓国だって、ベトナム戦争でベトナムの民間人を虐殺したり拉致したりしてきたんだよ。僕はそのことでみんなを責めたことがないじゃないか。」そしたら韓国人の学生たちはびっくりして「ごめんよ、それは知らなかった。僕たちは自分の国がしてきたことを棚に上げて、何を言ってきたのだろう。」といって泣いて謝ってくれました。

日本の軍国主義の悪行は許されるべきではないし、償いきれるものではありません。しかし一方で、このように日本をかばってくれる人がいるということを嬉しく思います。私たちも原爆のような日本が受けた被害に目を向けがちですが、日本が他の国に与えてきた被害も忘れないように心掛けていきたいものです。

コラム ちょっと役立つベトナム語講座

今回のベトナム研修で、ベトナム語が話せたらいいなと強く思いました。皆さんがベトナムン行くとき、また私が再度ベトナムを訪れるときに役立つよう、簡単にベトナム語の基礎の基礎をまとめてみました。

三大挨拶

・Xin chào.　　シンチャオ
おはよう、今日は、今晩は、さようなら
（昼夜問わず会ったとき、別れるときに使えます。）

・Cám ơn.　　カムオン
ありがとう
（オンの発音は、口をイの形にしてオと言います。発音が難しく伝わりにくいので注意！）

・Xin lỗi.　　シンロ～イ
すみません

自己紹介の仕方

・Tôi tên là （自分の名前）.　　トイ　テン　ラー（自分の名前）
私の名前は・・・です。

これも付け足すと好印象！
・Rất vui được gặp.　　ラット　ヴーイ　ドゥォック　ガップ
お会いできてうれしいです

発音

ベトナム語には、１１種類の母音（表記上は１２種）、６種類の二重母音（表記上は７種）、さらに２種類の半母音と呼ばれる母音があります。

この図は､ベトナム語の母音を発音した際の口の形と舌の位置を表したものです｡上に行くほど口の形は｢あ｣から徐々に狭くなり、右に行くほど舌の位置が後方になります。

また、
^ はそれがつかない同じ文字の母音よりも狭く、
˘ はそれがつかない同じ文字の母音よりも短く、
’ は唇を丸くすぼめないことを表す記号です。

http://hum-viet.com/tieng-viet/phatam/より

数

１	ｍｏｔ	モッ（ト）	１１	ｍｕｏｉ ｍｏｔ	ムオイ	モッ（ト）
２	ｈａｉ	ハイ	１２	ｍｕｏｉ ｈａｉ	ムオイ	ハイ
３	ｂａ	バー	１３	ｍｕｏｉ ｂａ	ムオイ	バー
４	ｂｏｎ	ボン	１４	ｍｕｏｉ ｂｏｎ	ムオイ	ボン
５	ｎａｍ	ナム	１５	ｍｕｏｉ ｌａｍ	ムオイ	ラム
６	ｓａｕ	サウ	１６	ｍｕｏｉ ｓａｕ	ムオイ	サウ
７	ｂａｙ	バイー	１７	ｍｕｏｉ ｂａｙ	ムオイ	バイー
８	ｔａｍ	タム	１８	ｍｕｏｉ ｔａｍ	ムオイ	タム
９	ｃｈｉｎ	チン	１９	ｍｕｏｉ ｃｈｉｎ	ムオイ	チン
１０	ｍｕｏｉ	ムオイ	２０	ｈａｉ ｍｕｏｉ	ハイ	ムオイ

ベトナム調査

四日目

ハノイ財政大学との討論会・交流会

経済学部　4 年　齋藤　玄

1. 概要

今回の討論会、交流会は以下のようなスケジュールで行われた。

スケジュール	予定時間
開会式	9:00-9:10
AOF　Do thi phi hoai 教授による挨拶	9:10-9:15
一橋大学　奥田教授による挨拶	9:15-9:20
AOF　農業班のプレゼンテーション	9:20-9:50
休憩　1 回目	9:50-10:05
一橋大学　農業班のプレゼンテーション	10:05-10:35
ディスカッション	10:35-11:30
昼食	11:30-13:30
一橋大学　教育班のプレゼンテーション	14:00-14:30
AOF　教育班のプレゼンテーション	14:30-15:00
休憩　2 回目	15:00-15:15
ディスカッション	15:15-16:25
閉会式	16:25-16:30
交流会	16:30-

※この表ではハノイ財政大学は AOF と省略している

プレゼンテーション、ディスカッションは、詳細は各班のレポートに譲るが、それぞれの大学の学生が、相手の大学のプレゼンテーションを聞き、それに対する疑問を提示して、プレゼンテーションをした大学がそれに回答するという形で進んでいった。途中からは一橋大学、ハノイ財政大学の教授もディスカッションに加わり、白熱した議論が展開された。

補足：

休憩の時間は tea break ということで、ベトナムコーヒーやお菓子や果物が用意された。休憩中にはハノイ財政大学のキャンパスを紹介してもらった。キャンパス内に寮やバスケットコート、サッカー場などが併設されており、リフレッシュして勉強に集中しやすい環境が整えられていた。

閉会式の際には日本の学生とベトナムの学生によるプレゼント交換会が行われた。日本の学生からは日本のお菓子を差し上げた。ベトナムの学生からベトナムコーヒーを頂いた。

交流会は場所を変えて、ベトナム料理を出すレストランで行われた。

2. ハノイ財政大学(The Academy of Finance:AOF)について

ハノイ財政大学は 1963 年に Hanoi University of Finance and Accounting(HUFA)の名前で設立された。The Academy of Finance という名前が正式に使われるようになったのは 2001 年のことで、 HUFA とベトナム財務省の部門であった Institute of Finance Research と Senior Financial Expert Capacity Building との合併により新たに生まれた組織に The Academy of Finance という名前が付けられた。

財政大学はベトナム財務省、ベトナム教育訓練省、ベトナム科学技術省などの管轄下に置かれている。財政大学はベトナムでは高い評価を受けている伝統ある大学であり、近年では海外の大学と提携も行っている。

この大学の持つ公に対するミッションは Finance and Accounting、則ち金融と会計の分野で教育と研究の成果を社会に還元するということであるとされている。

3. 感想

ベトナムの大学生はよく勉強しているということを今回の討論会を通じて感じた。学生は皆これからのベトナムを担うという自覚をもって勉強しており、今回の討論会でもプレゼンテーションのための資料の充実具合や、こちらのプレゼンテーションに対する鋭い質問などからその能力の高さ、勉学に対するやる気を感じさせられた。日本の農業や教育の実情をベトナムの大学生に伝えることができたという点に加えて、ベトナムの農業や教育の実情を詳しく知ることができ、大変有意義な討論会であった。

また、ベトナムの学生は日本のポップカルチャーが好きな人が多く、日本のアニメや音楽などに詳しい人が多く驚いた。なぜ日本のアニメや音楽に詳しいか財政大学の学生に聞いたところ、日本でも有名なアニメは結構ベトナムでも放送されているという答えが返ってきた。海外の多くの国で日本のアニメが放映されているということは知っていたが、実際にどのくらいの人が見ているかということまでは知らなかったが、結構な人数の人が日本のアニメについて知っていたことを考えると多くの人が視聴していることがわかり、いい経験だった。

交流会を通じてベトナム人の気質というものも知ることができたのも面白い経験だったと感じている。交流会の時に写真を撮った時にも、ベトナムの学生は、満足がいくまで何度も取り直したりと、写真が好きなのか、完璧主義なのかは定かではないが写真に強いこだわりを持っていたのは意外に感じられることであった。また、ベトナムはかかあ天下の社会であるということをベトナムで訪問した時にいろいろな機関の人やベトナム人のガイドの方から聞いたが、実際にベトナムの学生と交流してみると、やはり女性の方が積極的に主張している印象を受けた。

今回の討論・交流会は、互いの国の教育、農業事情やベトナム人のことをよく知れて大変有意義な会であったと感じている。

CỘNG SẢN VIỆT NAM QUANG VINH MUÔN

農業班　プレゼンテーション

メンバー　高津・新井・三浦・村田

1. 一橋大学プレゼン概要

「日本とベトナムの農業生産性を上げることは可能だろうか。」という疑問から始まり、日本とベトナムの農業の比較、問題点の検討、それに対する解決策の提示といった流れで発表した。まず、両者の農業生産量を比較し、問題点として高齢化等による農業人口の減少、土地使用の制限などを挙げ、大規模農場経営、第六次産業（注１）を提示したのである。問題点は日本が今直面しているものを中心に述べたが、ベトナムでも今後起こる可能性があるとして発表した。農業全体を幅広く扱ったプレゼンとなった。

注１　第６次産業とは、第一次産業である農林水産業が、農林水産物を原材料として加工食品の製造・販売や地域資源を生かしたサービスなど、第二・第三次産業にまで踏み込むことである。（１次産業×２次産業×３次産業＝６次産業）

2. ハノイ財政大学プレゼン概要

大枠としては、日本とベトナムの農業における問題、それらに対する解決策を発表した。まず農業の現状として両国の過去(WWⅡ以降)と現在を比較し、その変化を考察。その上で各国の問題点をあげた。日本についてはとりわけ自然災害に着目し、東日本大震災のことも織り込んでいた。次にそれら問題を引き起こした原因について詳しく述べ、解決策を与えた。最後に、日本とベトナムの関係性について取り上げ、近年のベトナムにおける農業面における成長は日本からの技術移転、日本側の研究結果の反映によるものだとした上で、今後の農業の発展に両国の良好な関係の維持が不可欠だと締めくくった。

3. 質疑応答

一橋大⇒ハノイ財政大

① 生産性向上の為に教育が必要だというが通常どのような教育を行っているのか。

（回答）ベトナム人のトレーニング方法は日本人とはかなり異なっている。農業人口の大部分が十分な教育を受ける機会を持っておらず、そのせいか農業ではあまり高い技術が使われていない。そんな中、大学の専門教員がやってきて行う直接的な授業なども行われている。ベトナムには農業大学（職業訓練学校）があり、2 年間のトレーニングがある。これに満足しなかった場合、もう一度四年制大学に入る機会も与えられる。

② 農業にどんなイメージを持っているか。

（回答）大きな可能性を持った産業である一方、技術的な限界や、最新の機械を使える人が少ないといった問題を抱える分野でもある。例えば、ベトナムのエビや魚は、米国や日本、中国が要求する基準を満たさなかった為に輸出を拒否されてしまった。このように、国際的な基準を満たしておらず、またその基準を理解できていないため、まだまだ他国に追いつけていない側面がある。

③ 中国やラオスとの間で問題になっていることはあるか。

（回答）中国にある多くのダムが再建設されているが、これによってメコン川の灌漑システムが大きく影響を受けており、それが議論の焦点になっている。ベトナム側は、メコン川は農業 GDP の 40%を内包する重要な川であるため、そのダム建設による影響の精査を行うか、場合によってはダム建設の停止も行われなければならないと考えている。ベトナムの土地は脆弱であるので、守るために最善を尽くす必要がある。このダム建設に対抗する為には、国際的チャネルへの参画が必須である。日本などの先進諸国の協力を仰ぎ、より大きな発言力を持ってベトナムの灌漑システムを守り生態系を保護していくことが要求される。アメリカや日本の協力を仰ぎたい。

ハノイ財政大⇒一橋大

① マーケティングにストーリー性をというが、例えばどのようなものか？

（回答）昨日、ドンラム村を訪れた時思いついたものを一つ具体例としてあげると、世界遺産に認定された場所で育てた食物などは、安全性に加えてその『世界遺産』的な付加価値をつけることができる。

② 日本市場に入ってくる食物には多くの制限が課せられていたはずだが、それでもかいくぐってくるケースがあったと聞いて驚いた。今日本が行っている以上に、食物の安全性を高める為には何をすべきだと考えるか？

（回答）多くの事件があったことにより、中国産の食品の購入を避ける人が増えている。そのため、例えば農薬を含む食品に対する規制を厳しくするなど、より高い制限を設けるべきだと考える。

③ 自分たちの将来を考えてみた時、農業に関わろうという思いはあるか。

（回答）今回の訪問前は農業に正直興味がなかったが、この調査を通し、農業についてより詳しく調べ、第六次産業について知った。これからも農業の一線で働くことは選択肢にないが、ストーリーメイキングなどの農業におけるマーケティ

ングに関わることで、農業従事者をサポートしていくことには興味がある。−三浦
私達は東京などの都会に住んでいて、普段農業を実際に目にすることはほとんど無いので、あまり農業について考えたことがなかった。しかし同時に、農業はこれからも必要とされるセクターであり、若者ももっと農業に興味をもち、学ぶようなあり方が保証されなければならないのではないかと考える。−村田

4. ディスカッション

①ベトナム人にとって、農業に対して個人的にどのようなイメージを持っているか？（HIT→VNM）

（回答）農家で働くという選択肢は、ベトナムでもあまり魅力的ではない。労力が必要な反面、見返りは低い。またベトナムの田舎は娯楽が少なく教育の機会も制限されているため魅力が少ない。

都会市民の私にとって農業への従事は選択肢にならない。都会に住んでいると、農家の現状を見る機会があまりなく、農家の方々と交流することも無い。

②ベトナムでは、農業従事者の収入が低すぎて適当な技術を用いることができないケースが多い。日本はどのようにこの問題を克服したのか？（VNM→HIT）

（回答）日本はそもそも農業従事者が少ない。より労働力を引き付けるようなインセンティブが農業には必要であり、今後の課題でもある。

③農業従事者が高い生産性を望む場合、汚染などへの配慮が減ってしまい、安全性が犠牲になってしまうのか？これをすべて解決する方法は？

（VNM→HIT）

（回答）高い生産性は時に重要ではないかもしれない。生産高よりも、そこにある付加価値、安全性を重要視しなければならない。

④（ドンラム）村を訪れたというが、生産物に対し観光的・輸出的に効果のある『ストーリー』、付加価値をつけることができるのか？またどのように付加価値をつけるのか？　教育の場で、生徒に対し何かできることはないか？

（VNM→HIT）

（回答）来年度からは、より実質的な観点が養えるようなプロジェクトを考えている。今はこのプロジェクト自体が試行錯誤をはらんでいる段階である。（小田島先生より）

5. 感想

農業が主要産業であるベトナムの学生の農業への考えと、衰退産業ともいえる日本

の学生の農業への考えが時に異なり時には一致していることが興味深かった。ベトナムでは機械化のための設備投資の資金が確保できないことが切迫した問題であるのに対して、日本では金融システムが発達しているためそのような問題はあまり取りざたされない。これに対して、日本で重要視されている食の安全性はベトナムでも同様に問題になっている。

ベトナムの農業は主要産業とはいえまだまだ設備や人材育成など課題が山積みである。日本も人手不足や放棄地の問題が存在している。しかし、討論を通じて見えてきたのは、日本の農業技術力が世界的に見て優れているという事実だ。現在、アベノミクスの成長戦略の一つとして農業の規制緩和が議論されているが、優れた技術を活かしベトナムのように農業が成長産業となることを期待する。（高津）

財政大学のプレゼンはわかりやすく、災害の農業への影響など、我々が扱わなかった分野にまで渡って説明をしていた。特に日越共同の農業プロジェクトや、日本のベトナム農業に対する投資の話は印象深かった。今後そのような活動が一層増えて欲しいと思う。

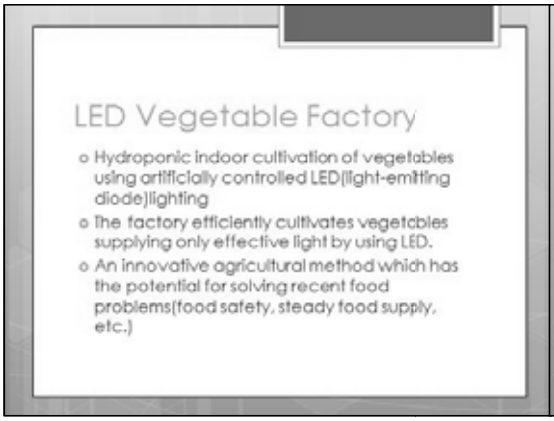
さて、今回の反省点としては、我々のプレゼンが日本の農業に偏りがちであったことだと思う。財政大学のプレゼンは日本とベトナム両方にバランスよく触れていた。また、発表資料自体も、図やイラストを多用し簡潔に説明していてとても見やすかった。再びこのようにプレゼンをする機会があったら、今回の反省を生かして、もっとわかりやすい、バランスの取れた発表にしたい。(新井)

日本の農業を調べただけでは分からないことが、ベトナムの農業と比較することで見えてきたのはとても面白かった。特に、ベトナムにおける農業を生かしつつ工業化に力を入れるという、バランスの取れた政策からは、日本も多くのことを学べると感じた。普段あまり扱わないトピックだけに、新しい発見も多く、これから経済を学んでいくときに農業という視点からも見るということに役立てていける知識や観点を身につけられたと思う。有意義なプレゼン、ディスカッションの時間にしてくれた財政大学の農業班の皆さんに心からの感謝の意を表する。（三浦）

農業という、我々の普段の生活に直接関わる身近なトピックでありながら、どこか人任せにしがちな問題を掘り下げて考えることは、私にとって非常に有意義な経験であった。また、他国の学生の日本の農業に対する考えにふれ、日本の農業が他国のロールモデルにもなりうるのだということを、改めて認識させられた。貴重な場を設けて下さった財政大学の方々に感謝しつつ、ここで学んだこと、感じたことを進んで発信していきたい。(村田)

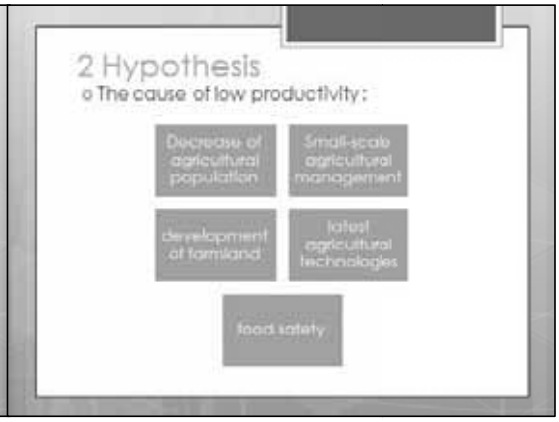
Agriculture

Introduction


LED Vegetable Factory
Hydroponic indoor cultivation of vegetables using artificially controlled LED(light-emitting diode)lighting
The factory efficiently cultivates vegetables supplying only effective light by using LED.
An innovative agricultural method which has the potential for solving recent food problems(food safety, steady food supply, etc.)

Contents
1 Research Question
2 Hypothesis
3 About Agriculture of Japan and Vietnam
4 The role of agriculture of Japan
5 Problems
6 What is Ideal of agriculture ?
7 Challenges for the future
8 References

1 Research Question
Is it possible to increase the agricultural productivity of Japan and Vietnam?


2 Hypothesis
The cause of low productivity :
Decrease of agricultural population
Small-scale agricultural management
development of farmland
latest agricultural technologies
food safety

3 About Agriculture of Japan and Vietnam

- 3.1 Agriculture of Vietnam and Japan: A comparison
- 3.2 Decrease of agricultural Population

3.1 ○ Comparison of the Agricultural Output

China	738,377	1
India	303,711	
United States	164,704	1
Indonesia	124,677	
Brazil	115,166	
Nigeria	80,387	
Japan	67,414	
France	45,662	6
Australia	35,878	6
Malaysia	34,177	
Germany	29,985	6
Canada	28,442	
Vietnam	27,220	

The Agricultural Output of the world

1 Gross agricultural output (2009)
Japan: 7th place in the world ranking ($67,414m)
Vietnam: 24th place in the world ranking ($27,220m)

2 Agricultural production growth
Japan: dwinding in recent years
Vietnam: rapidly growing by 5.1% annually

The Ministry of Agriculture, forestry and Fisheries—www.maffgo.jp/kyukyu/kiyu_ch_c013.html

Overseas Trade of Agricultural Products (2010)

Vietnam

Import

Item		2010 Amount	2010 Sum
Grain		3,885,016	964,105
	Rice	983	767
	Cone	1,659,176	396,623
	Wheat	2,086,235	501,437
	Barley	88,873	20,558
Soybean		227,697	115,134
Potato		52,883	23,648
Onion		131,890	51,819
Grape		39,166	64,736
Apple		122,217	75,448
Milk		14,784	14,007
Chicken		506,971	615,338
Beef		90,757	271,621

Global Note→http://www.globalnote.jp/post-4460.html

Overseas Trade of Agricultural Products (2010)

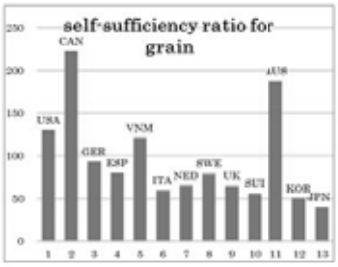
Export 1,000US dollar

Item		2010 Amount	2010 Sum
Grain		6,886,279	3,247,985
	Rice	6,886,177	3,247,860
	Cone	102	124
	Wheat	0	0
	Barley	0	0
Soybean		30,000	15,000
Potato		253	128
Onion		776	333
Banana		51,560	4,272
Milk		584	478
Pork		10,145	25,681
Chicken		292	352
Beef		501	1,801
Egg		2,134	4,874

Global Note→http://www.globalnote.jp/post-4460.html

○ Pastoral landscape in Japan

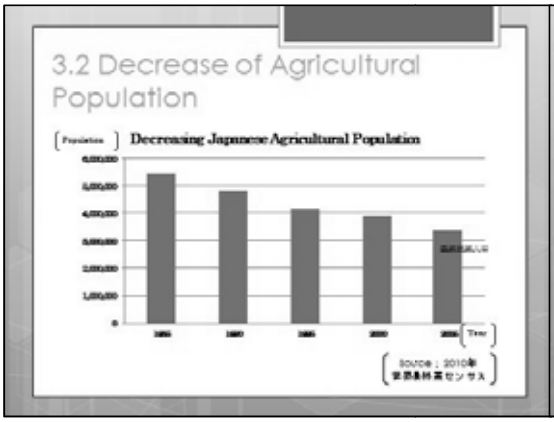
○ Self-sufficiency ratio for grain

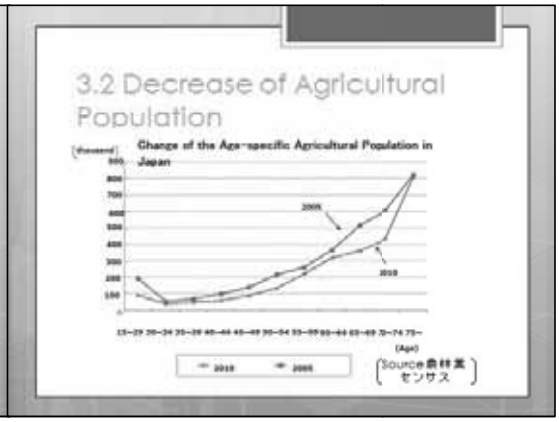


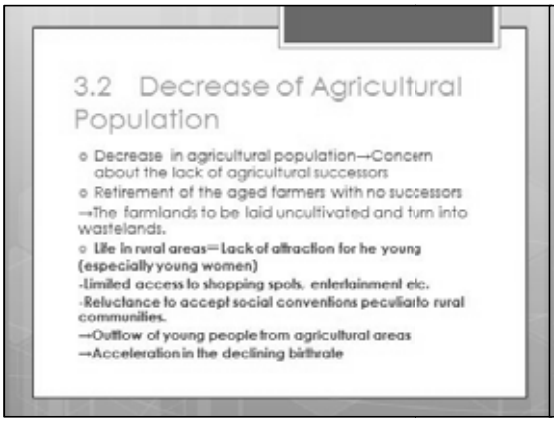
Japan: 40% Vietnam: 140%

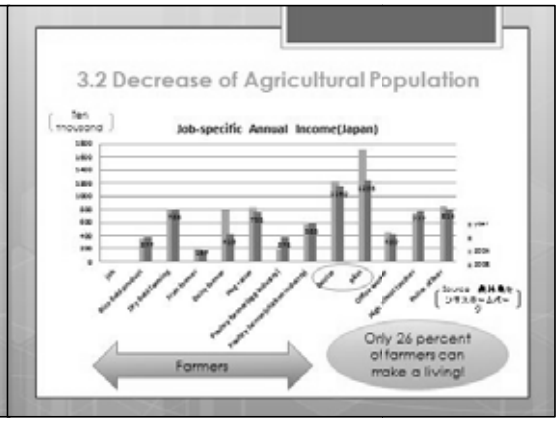
About JA
JA= The National Agricultural Cooperative of Japan
Ultimate aim: To provide efficiency the members with various information, techniques and materials and help them raise their agricultural productivity, economic conditions, and social status.
Major tasks of the JA
1.To supply faming materials to the members
2.To supply daily commodities to the members
3.To establish common facilities for the members
4.To establish a secondary market.
5.To play a prominent part in processing, storage, distribution and sale of agricultural products.
6.To provide training programs for learning new farming technologies and management strategies.
7.To engage with various innovative development in cooperation with overseas agricultural cooperatives.
References:

3.2 Decrease of Agricultural Population
o Decreasing Japanese agricultural population
o Aging of Japanese agricultural population
o The income comparison between agriculture and other jobs


3.2 Decrease of Agricultural Population
Decreasing Japanese Agricultural Population
Source：2010年


3.2 Decrease of Agricultural Population
Change of the Age-specific Agricultural Population in Japan
(Age)
Source 農林業センサス


3.2 Decrease of Agricultural Population
o Decrease in agricultural population→Concern about the lack of agricultural successors
o Retirement of the aged farmers with no successors
→The farmlands to be laid uncultivated and turn into wastelands.
o Life in rural areas=Lack of attraction for he young (especially young women)
-Limited access to shopping spots, entertainment etc.
-Reluctance to accept social conventions peculiar to rural communities.
→Outflow of young people from agricultural areas
→Acceleration in the declining birthrate


3.2 Decrease of Agricultural Population
Job-specific Annual Income(Japan)
Farmers
Only 26 percent of farmers can make a living!

3.2 Decrease of Agricultural Population

- Low income of farmers→A serious hindrance for people wishing to newly engage in agriculture
- Agriculture=unprofitable hard labor

→Income gap between farming and other industries

4 The role of agriculture of Japan

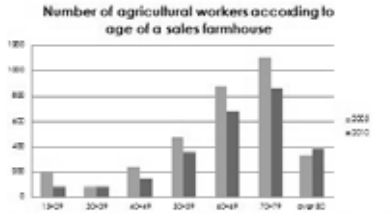
Japanese agriculture

- During the period of postwar recovery:
  - Agriculture = the country's main industry
- At present
  - Agriculture = a declining industry
  - Common idea of agriculture(shared among the young) = a demanding, dirty ,and unprofitable job

5 Problems

- 5.1 Lack of young farmers(as the successors to the aged)
- 5.2 Relation between urban and rural areas
- 5.3 Inefficiency peculiar to the small-scale agriculture
- 5.4 Safety issues of agricultural products

5.1 Difficulty of finding successors

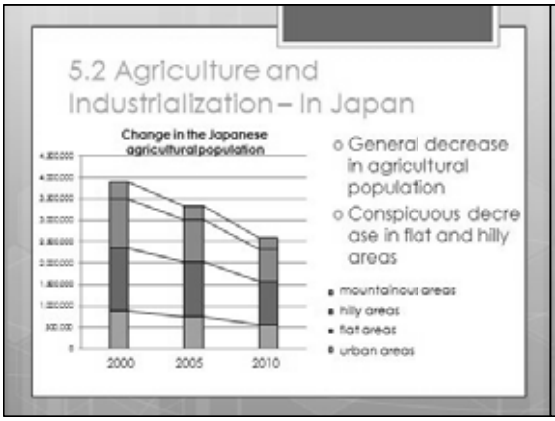


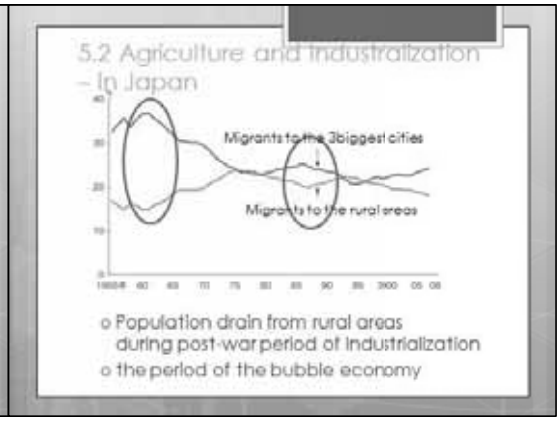
5.1 Difficulty of finding successors

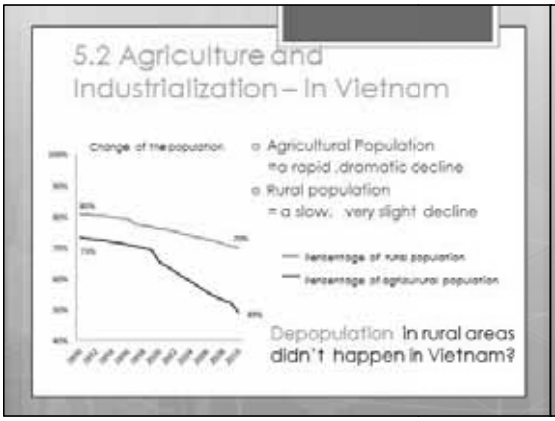
- Why successors don't appear?
  - difficulty of reservation of farmland or a residence
  - big-ticket agricultural machine
  - Few incomes
- It is difficult for non-farmhouse graduate person to enter into agriculture independently

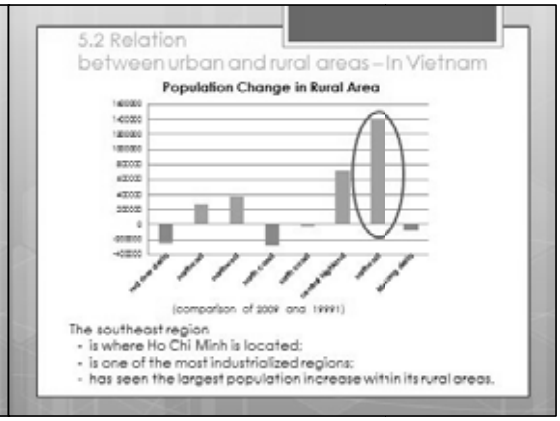
5.2 Agriculture and industrialization

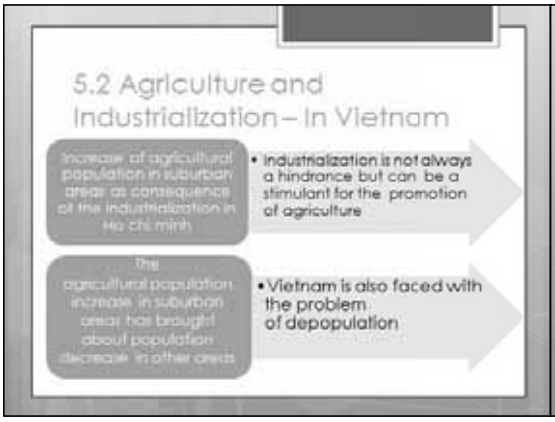
- With industrialization, structure in the labor market has changed
- Through that, how has the role of agriculture changed ?

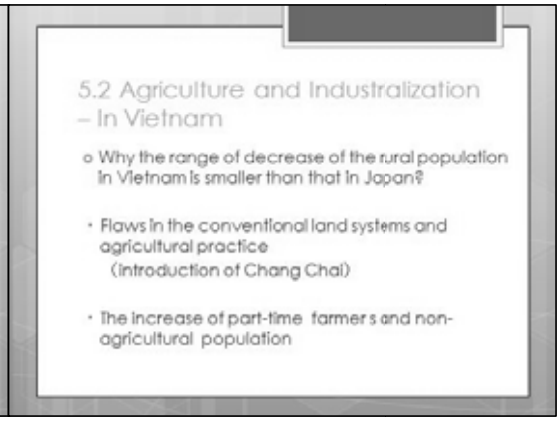

5.2 Agriculture and Industrialization – In Japan
Change in the Japanese agricultural population
2000
2005
2010
o General decrease in agricultural population
o Conspicuous decrease in flat and hilly areas
mountainout areas
hilly areas
flat areas
urban areas


5.2 Agriculture and Industrialization – In Japan
Migrants to the 3biggest cities
Migrants to the rural areas
o Population drain from rural areas during post-war period of Industrialization
o the period of the bubble economy

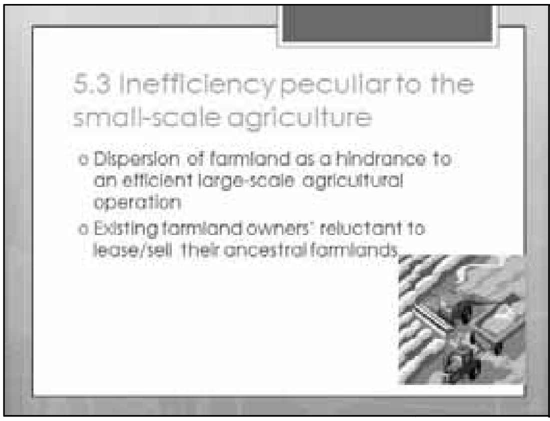

5.2 Agriculture and Industrialization – In Vietnam
Change of the population
o Agricultural Population
=a rapid ,dramatic decline
o Rural population
= a slow, very slight decline
Depopulation in rural areas didn't happen in Vietnam?

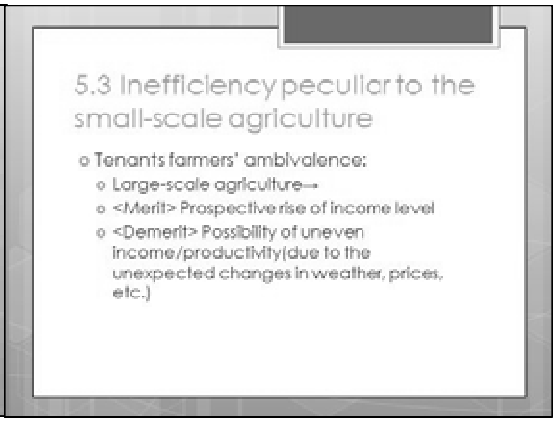

5.2 Relation between urban and rural areas – In Vietnam
Population Change in Rural Area
(comparison of 2009 and 19991)
The southeast region
- is where Ho Chi Minh is located;
- is one of the most industrialized regions;
- has seen the largest population increase within its rural areas.

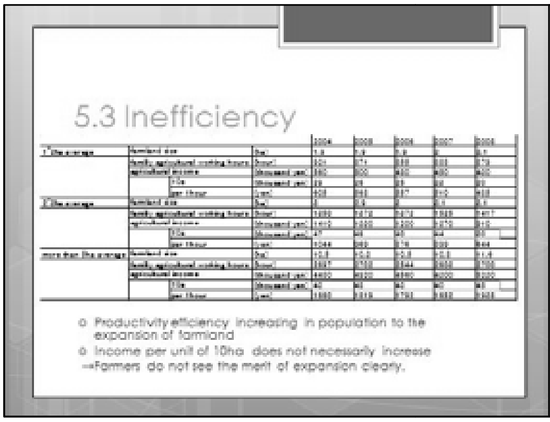

5.2 Agriculture and Industrialization – In Vietnam
Increase of agricultural population in suburban areas as consequence of the industrialization in Ho chi minh
• Industrialization is not always a hindrance but can be a stimulant for the promotion of agriculture
The agricultural population increase in suburban areas has brought about population decrease in other areas
• Vietnam is also faced with the problem of depopulation

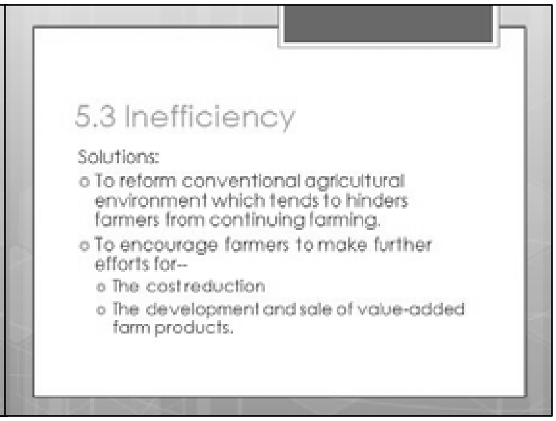

5.2 Agriculture and Industralization – In Vietnam
o Why the range of decrease of the rural population In Vietnam is smaller than that In Japan?
· Flaws in the conventional land systems and agricultural practice
(Introduction of Chang Chai)
· The increase of part-time farmer s and non-agricultural population

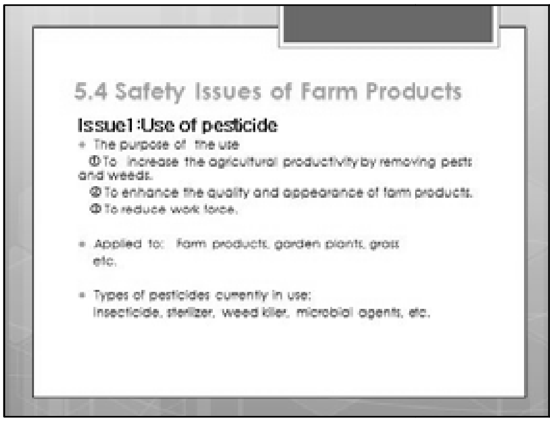
[一橋大学—農業班 PPT]

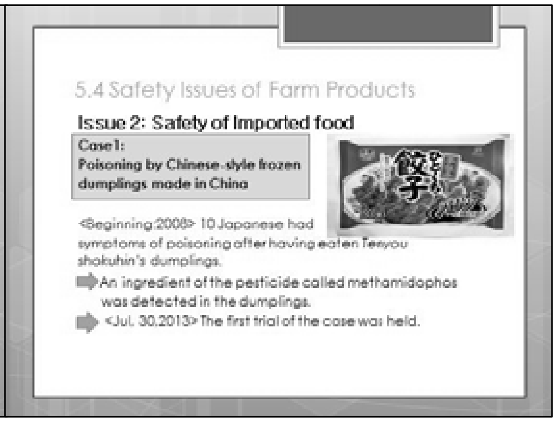

5.3 Inefficiency peculiar to the small-scale agriculture
Dispersion of farmland as a hindrance to an efficient large-scale agricultural operation
Existing farmland owners' reluctant to lease/sell their ancestral farmlands


5.3 Inefficiency peculiar to the small-scale agriculture
Tenants farmers' ambivalence:
Large-scale agriculture→
<Merit> Prospective rise of income level
<Demerit> Possibility of uneven income/productivity(due to the unexpected changes in weather, prices, etc.)


5.3 Inefficiency
Productivity efficiency increasing in population to the expansion of farmland
Income per unit of 10ha does not necessarily increase
→Farmers do not see the merit of expansion clearly.


5.3 Inefficiency
Solutions:
To reform conventional agricultural environment which tends to hinders farmers from continuing farming.
To encourage farmers to make further efforts for--
The cost reduction
The development and sale of value-added farm products.


5.4 Safety Issues of Farm Products
Issue1 :Use of pesticide
The purpose of the use
①To increase the agricultural productivity by removing pests and weeds.
②To enhance the quality and appearance of farm products.
③To reduce work force.
Applied to: farm products, garden plants, grass etc.
Types of pesticides currently in use:
insecticide, sterilizer, weed killer, microbial agents, etc.


5.4 Safety Issues of Farm Products
Issue 2: Safety of Imported food
Case1:
Poisoning by Chinese-style frozen dumplings made in China
餃子
<Beginning:2008> 10 Japanese had symptoms of poisoning after having eaten Tenyou shokuhin's dumplings.
An ingredient of the pesticide called methamidophos was detected in the dumplings.
<Jul. 30.2013> The first trial of the case was held.

5.4 Safety Issues of Farm Products

Issue 2: Safety of imported food

Case 2: Epidemic of BSE in the US and the import of the US beef

<Beginning:Dec.2003>

The first case of BSE in the US was discovered.

➡ Japanese government banned the import of US beef (both raw and material)

The ban affected the business of Yoshinaya (a Japanese fast-food franchise specializing in beef bowls):

They suspended serving the dishes using beef(to avoid sacrificing the quality by replacing the Us beef with available alternatives.)

➡ Japanese government lifted the ban and beef bowls are now back to Yoshinaya's menu.

5.4 Safety Issues of Farm Products

Issue 3: Safety of genetically-modified food

- Genetic modification:
  Biological modification for artificially manipulating one or more genes taken out of one organism and incorporating them into another in order to create modified type of organism.
- Consumers concern over the GM food's safety:

➡ Introduction of an obligatory food-labelling system applied to designated processed foods to clearly show whether any GM farm products are used or not.

The foods which include corn, oilseed rape, cottonseed, alfalfa, sugar beets, soybeans, and potato, in their production process.

5.4 Safety Issues of Farm Products(Summary)

To relieve deep concern over the food safety broadly shared among consumers-

The government needs-

-To hold the food-labelling system under close supervision;

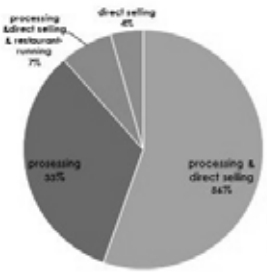
-To encourage the expansion of the market for lower-priced organic vegetables;

-To conduct a surprise inspection at food manufactures.

6 Requirements for an Ideal Form of Agriculture

- 6.1 Invigoration of agriculture by turning it from the primary industry to 'the sixth industry'
- 6.2 Introduction of large-scale farming run by a company

6.1 The 'sixth' industry



6th = Primary × Secondary × Tertiary industry

The key= Processing

6.1 The 'sixth' industry

Processing

Product-making
- Means of production and distribution

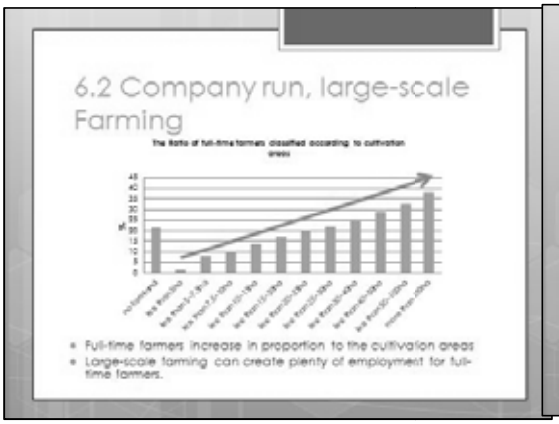
➡ Developing alternative sales channels
- Income that doesn't depend on market price

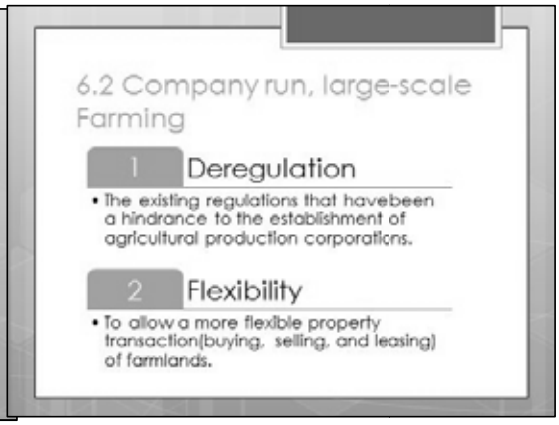
Story- making
- I Creating scenarios to describe the benefit of the products for customers

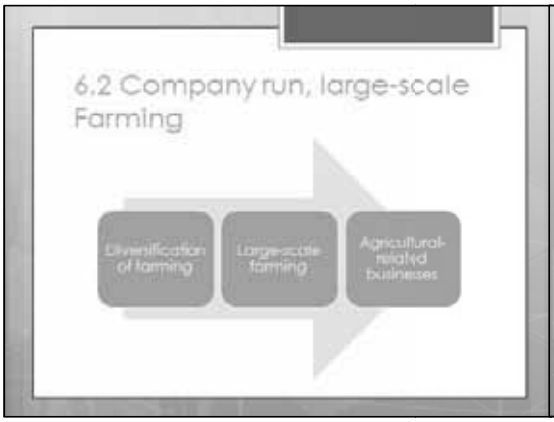
➡ Branding of the product

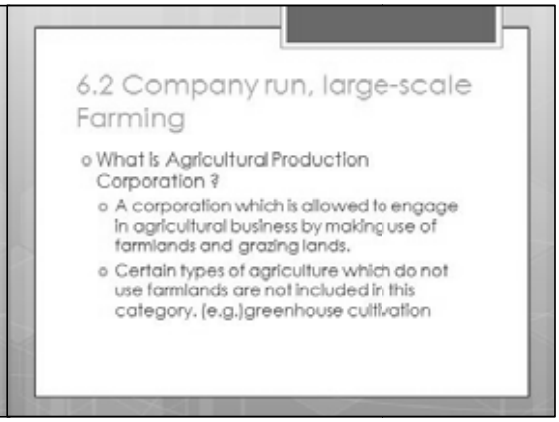
6.2 Company run, large-scale Farming
Problems
It takes time to reap the rewards of the investments
4.5 years average to make surplus
dairy farming
fruit cultivation
vegetable cultivation
years
The safety of the products needs to be emphasized.
Farmers have to consider safety of their products

6.2 Company run, large-scale Farming
The management body rate classified by area
Necessity for incorporation over 30 ha


6.2 Company run, large-scale Farming
Full-time farmers increase in proportion to the cultivation areas
Large-scale farming can create plenty of employment for full-time farmers.


6.2 Company run, large-scale Farming
1 Deregulation
The existing regulations that havebeen a hindrance to the establishment of agricultural production corporations.
2 Flexibility
To allow a more flexible property transaction(buying, selling, and leasing) of farmlands.


6.2 Company run, large-scale Farming
Diversification of farming
Large-scale farming
Agricultural-related businesses


6.2 Company run, large-scale Farming
What is Agricultural Production Corporation ?
A corporation which is allowed to engage in agricultural business by making use of farmlands and grazing lands.
Certain types of agriculture which do not use farmlands are not included in this category. (e.g.)greenhouse cultivation

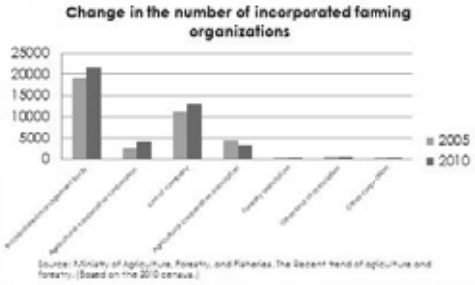
6.2 Company run, large-scale Farming

- Basically, corporations (except for agricultural production corporations) are not allowed to own farmlands in Japan
- Establishment of an agricultural production corporation is admitted only when the severe requirements are satisfied.

6.2 Company run, large-scale Farming

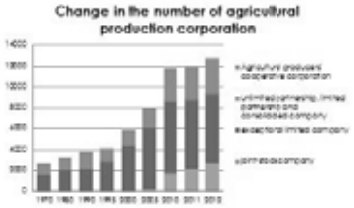
- Reform of the Agricultural Land Act:
  - Corporations in general are newly allowed to acquire the right to lease (but not buy) farmlands.
  - Expansion of farming businesses owned/run by corporate organizations.

6.2 Company run, large-scale Farming



Source: Ministry of Agriculture, Forestry, and Fisheries. The Recent trend of agriculture and forestry. (Based on the 2010 census.)

6.2 Company run, large-scale Farming



Source: Ministry of Agriculture, Forestry, and Fisheries. Revised Agricultural Land Law.

6.2 Company run, large-scale Farming

- Example 1: Taniguchi farming company
  - Foundation: in 1968
  - Annual turnover: 300 million yen
  - Employees: 18 full-timers
  - Cultivation area: 48 ha
  - Business operated: growing, processing and selling of organic farm products
  - Principle: To put special emphasis on the products' safety

6.2 Company run, large-scale Farming

- Example 1: Taniguchi farming company

6.2 Company run, large-scale Farming

- Example 2: Watami Farm
  - Parent company: Watami Food
  - Foundation: in 2002, organic cultivation
  - Scale: 10 farms (the largest one = 69.4ha)
  - Main business: cultivation of organic vegetables
  - Main client: the parent company(External sales is also on increase.)

6.2 Company run, large-scale Farming

- Example 2: Watami Farm

6.2 Company run, large-scale Farming

- Example 2: Watami Farm
- Strategies:
  - To give the first priority to organic cultivation
  - To introduce thorough cost-cutting measures:
    - To employ part-timers who are enthusiastic about agriculture
    - To use second-hand farm machines
    - To grow the vegetables that are easy to grow
    - To sale the products directly to the customers
- Successful production of cheaper organic vegetables

6.2 Company run, large-scale Farming

- Issues to be addressed:
  - The problems of abandoned farmlands, shortage of famers, and inefficient agricultural practices
  - The necessity to undertake related businesses during off-seasons for Necessity to undertake related business
  - The development of value-added products through branding
  - The enhancement of profit though spread effect to other industries (processing, selling, and sightseeing etc.)

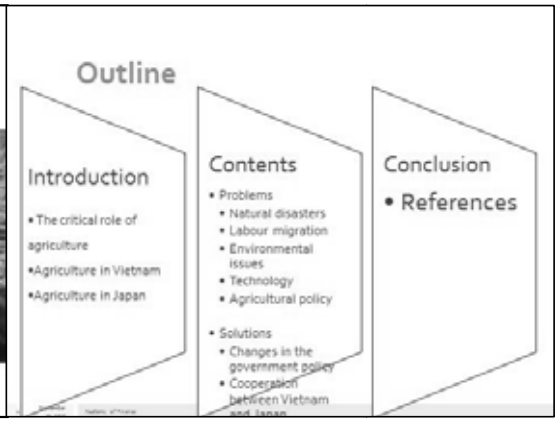
7 Prospects for the future

- Agriculture is an indispensable industry for securing food to sustain the lives of human beings.
- To promote the development of agriculture is one of the urgent tasks of the present time.
- We hope the solutions that we proposed today will be adopted and improve the productivity of Japanese agriculture.

8 References

- Homepage of Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries [illegible]
- 3.1 ; The Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries—[illegible]
- 3.1: Global trade—[illegible]
- 3.1: JA—[illegible]
- Ministry of Agriculture, Forestry, and Fisheries. The Recent trend of agriculture and forestry. (Based on the 2010 census.)
- Ministry of Agriculture, Forestry, and Fisheries. Revised Agricultural Land Law.

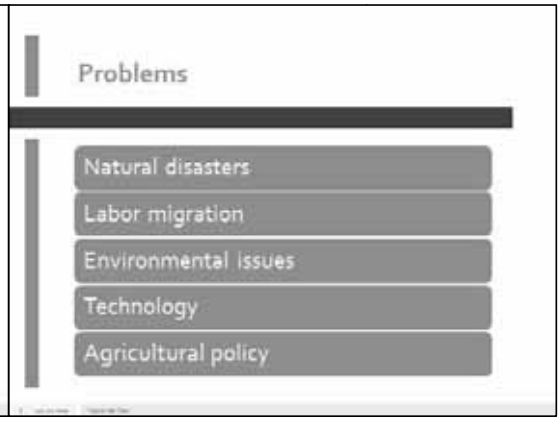
THE AGRICULTURAL SECTOR OF VIETNAM AND JAPAN: PROBLEMS AND SOLUTIONS


Outline
Introduction
• The critical role of agriculture
• Agriculture in Vietnam
• Agriculture in Japan
Contents
• Problems
• Natural disasters
• Labour migration
• Environmental issues
• Technology
• Agricultural policy
• Solutions
• Changes in the government policy
• Cooperation between Vietnam and Japan
Conclusion
• References

The Role of Agriculture
• Food Security
• Livelihood and Employment
• Raw Material
• Contribution to National Income

Agriculture in Vietnam
• In the past:
o Supply food for North Vietnamese people
o Support the liberation army
• At Present:
o Contribute to poverty reduction and economic growth
o Still have some urgent difficulties

Agriculture in Japan
• In the past:
o Achieve major development after WWII
o Give way to modern industries
• At Present:
o Have low share in the country's GDP
o Need rational strategies to ensure a sustainable self-sufficiency


Problems
Natural disasters
Labor migration
Environmental issues
Technology
Agricultural policy

1. Natural disasters

In Vietnam

- Multiple natural disasters: typhoons, flash-floods, landslides and droughts.
- 59% of area and 71% of population being prone to natural disasters.

Mekong river Delta

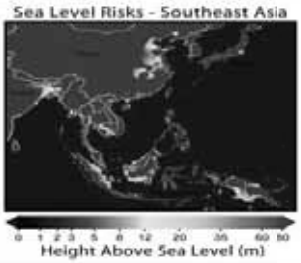
Two problems:

- Changes in the flow of Mekong river.
- The salinization caused by the sea level rise.

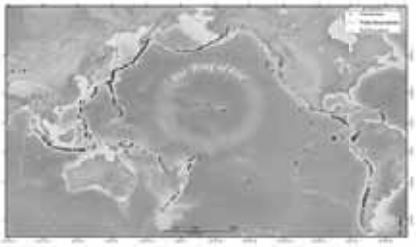
Changes in the flow of Mekong river

- The reduction in the fresh water and fertile soil needed for crop production.

The sea level rise



In Japan



Earthquake and tsunami in 2011

2. Labor migration

Industrialization and urbanization

- Thousands of hectares converted to industrial zones.
- Farmers' job expectations.

Income gap

- The income not commensurate with efforts.

Wealth disparity between rural and urban area

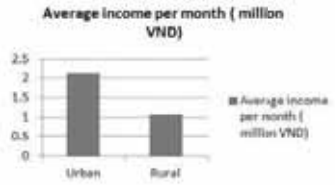


Figure 3: Distribution of income in Vietnam by percentage

3. Environmental issues

In Vietnam

Both countri

4. Technology

New technology in Vietnam

New technology in Jap

5. Agricultural policy

In Vietnam

In Japan

- Lack of incentive policies for young farmers and farming households

Solutions

- Changes in the government policy
- Cooperation between Vietnam and Japan

1. Changes in the government policy

Vietnam's aiming ourselves towards the quality of the growth

- To encourage and support farmers to apply high technology
- To enhance connection between farmers, scientists and enterprises

Ensuring effective investment in agriculture

- Two top priorities:
- Sustainable growth
- Improved living conditions of rural population

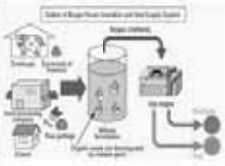
Farmers' subsidies

Farmers' training

How to improve ?

- To ensure human resources development (HRD) via training intervention, agricultural extension service
- To update and improve training materials, as wellas training methods and curriculum.
- To maximise advantages of the internet and mass media in knowledge transfer
- To establish technical forums and build online knowledge banks.

Ensuring quality, hygiene and environment standard



Strengthening international cooperation on agricultural extension

2. Cooperation between Vietnam and Japan

Strengths and weaknesses of Vietnam and Japan in agriculture

	Vietnam	Japan
Strengths	o Golden population o Much fertile land	o Advanced technology o Strong financial resources
Weaknesses	o Obsolete techniques and technology o Lack of capital for large scale cultivation	o Aging population o Lack of arable land due to natural conditions

Potential areas for future cooperation

- Technical exchanges
- Investment of Japanese agriculture companies in Vietnam
- Trading of agricultural products
- Cooperation in researching new plant varieties
- Introducing and training on international standards
- Doing marketing for agriculture

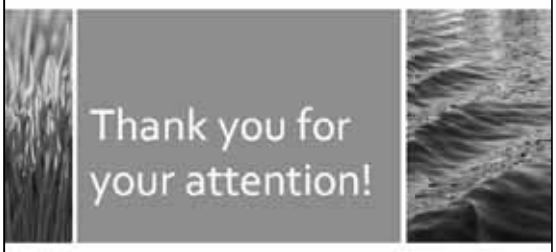
Conditions needed for future cooperation

- Positive attitude from both sides
- Technical support
- Co-financing

Conclusion

IV, References

- http://www.tokyofoundation.org/en/articles/2008/the-perilous-decline-of-japanese-agriculture-1
- http://www.monre.gov.vn/vn/default.aspx?tabid=428&CateID=248&ID=129284&Code=IUIR129284



教育班　プレゼンテーション

メンバー　斎藤・中尾・石井・潮崎

1. 一橋大学プレゼン概要

「現代社会に求められる人材はどのような人材か？そして教育によって現代社会に求められる人材を育て上げられることは可能なのか？」ということをテーマから、教育、特に高等教育について論じた。

・企業社会で求められる人材は、基礎的な学力、専門知識に加えてコミュニケーションスキルやチームワークなど現行の教育では賄いきれていない点が能力として求められている点

・初等教育、中等教育では詰め込み教育が行われるが、高等教育では企業が専門知識をあまり重視しないこと、カリキュラムが緩くなるため学生があまり勉強をしなくなるという日本の教育の問題点

・就職活動が 3 年の夏から始まり、大学教育に集中できなくなり、しかも短期間に行われるため選んだ職業のミスマッチが起こりやすい、そして日本の企業は大学で学んだことを軽視しているという現行の日本の就職の問題点

以上の日本の教育とその先にある就職の問題点を指摘した後に、社会に必要な能力を育てられていない教育面の解決策として、１．教育予算の増加２．企業等へのインターンシップの拡充３．GPA をもっと有効活用することで大学の教育への信頼度を向上させること４．より学生のキャリアプランを考えさせる機会を提供することを提案した。

2. ハノイ財政大学プレゼン概要

“What Motivates First Year Students at University”―大学一年生の学習意欲の源は何か、という題目で、新入生の大学生活が中心となっていた。一部では、ハノイ財政大学他計 520 名へのアンケート調査を行った結果、・生活環境や学習方法の劇的な変化　・大学での学習環境が期待を下回っていたこと　・そもそも進学を選ぶ際、その選択肢（学部・大学など）に親や教師の影響を強く受けており、自律性が無かったことに気付いた事　などによって学習意欲をそがれてしまった新入生が多いことが判明したと述べた。続く二部では、・入試制度や学生の評価システムの改善　・理論（暗記）より実践重視の教育へ転換　・高校と大学の関係をより密接にする　・教育分野における日越間の連携強化　が、改善への道であると提案した。特に教育の質の向上、雇用機会の上昇において、日本の一層の協力が求められるという。

3. 質疑応答

ハノイ財政大⇒一橋大

① 大学のクラブ活動や文化祭に参加した体験や、それによる利点があれば共有してほしい。

（回答）まずは就職活動との繋がり、という文脈でお答えしたい。クラブ活動では、肉体だけでなく礼儀作法や上下関係等で精神的にも鍛えられ、また卒業生との強い繋がりを持つ体育会の部活動は就職に強い。その他文化部や文化祭への参加も、一つの目標に向けて頑張る経験として自分の財産にはなる。とはいえ、一義的には共通の趣味をもった仲間を作るなど、娯楽や余暇の一つとして行う事が多い。

② 客観的な大学の評価については、何をもって改善できると思うか。

（回答）多くの人々、特に学生にとって、大学ランキングは重要な意味を持つ。ランクが高く名の知れた学校に行く事で、親にも友人にも簡単に評価される。まずはこうした世の中のあり方を変えなければならないかもしれない。マスコミが設ける、時に安易な基準に基づくランキングが出回り、信ぴょう性の有無を問わず多くの人々がそれに翻弄される現状を変えたい。

③ アルバイトにはどのようなものが有るか。また、その利点は何か。

（回答）学生に人気なのは家庭教師、チューターであり、これらは収入が良く簡単にできる点で経済的に明るい。その他レストランの給仕や、パン屋・コンビニなど販売営業で店頭に立つ仕事は、比較的収入は良くないが、これまでデスクワークに徹してきた学生として社会経験を積む意味が大きい。双方に共通するのは、学業と両立させタイムマネジメントの大切さを学ぶことである。

④　日本でも、大学に入学することはキャリア形成の上で重要なステップか？

（回答）もちろんである。大学全入時代にあっては大学に入ることは当たり前、より高く評価されるには高いランクの大学に入る必要がある。

⑤　現在日本は税収が伸び悩む中で緊縮的な予算運営がなされていると聞くが、教育への配分をどのように増やすつもりか？

（回答）私達が理解する現状の説明からさせて頂きたい。少子高齢化も手伝って、日本では国会や政府などの意思決定者に比較的年配の方が多く、その意向を如実に反映し、高齢者の社会保障を手厚くする声が高まる一方、次の世代の教育保障は若干見過ごされがちである。自己保身と社会政策の境界が曖昧になされないよう、次世代の社会を担う私たち自身が、バランスの取れた政策決定に積極的に関わっていきたいと思う。

一橋大⇒ハノイ財政大

①発表では１年生に焦点があてられていたが、２～４年生の学業に対する姿勢は？

（回答）もちろん一部の生徒は熱心に専門教育を受けるが、残りは一年生の時のまま、怠惰であり続ける。GPA が低い学生も多い。

１年時は試験へのプレッシャーが最も高い上、試験範囲も一般教養を含めとても広く、ただでさえ緊張を強いる入学試験を乗り越えた先に更に山積みの課題に直面し、かえってモチベーションを低くする学生が増える。学年が上がるにつれて専門科目が増える為、この一年を乗り切り、更に選択した専門科目が性にあっていれば、より熱心に勉強できる可能性がある。

② ベトナムの学生が GPA を高く保つべき理由があるとすればそれはなにか？

（回答）大きく 3 点ある。1 つは、卒業要件になっていること。2.0 以下の GPA だと卒業不可となり、卒業時期が伸びてしまうため、必然的に学費が高くなる。2 つ目は、高い GPA を保持するものには奨学金が授与されることである。最後に、高い GPA を持つことで、より良い会社や特定の部署に応募することができるからである。

③ 一般的にベトナムの学生が職を探す時期はいつか？

（回答）キャリア計画については、1 年時にパートタイムで見つけた職を通じ、将来について考える人もいる。一方、４年生になってもはっきりと何をすべきかわからない人もいる。公式に就職活動を始めるのは、卒業後になってからの方が多いかもしれない。

④ベトナム人学生にとって、日本が『夢の留学先』であると聞き嬉しく思う。しかし、その具体的な理由は何か？

（回答）日本は教育の最高峰と認識している。また、日本は長い間ベトナムを教育面でサポートしてくれている為、その現地で学ぶ意義は大きい。更に、日本語に長け、日系企業に就職したものには明るい未来が約束されている。

4. ディスカッション

両大学プレゼンの共通点は、入学試験において教師や両親からのプレッシャーを受ける事や、大学に入った後、学生生活は大きな開放感に満ちあふれていることであった。転じて食い違った点は、教育の最終着地点は良い大学とするか（ハノイ財政大）、それとも良い就職先とするか（一橋大）であった。また、結論としての提案が双方真逆であったのは非常に興味深い。すなわち、大学教育において実践を重視すべきか（ハノイ財政大）、はたまた実践本位より軌道修正し理論学習を尊重するあり方に立て直すべきか（一橋大）である。

これらの相違点を念頭に、まず教育を「教授」する側である先生方の議論が白熱した。

【一橋大学の先生より】
一橋大からの提案の一部は非現実的である。例えば AO 入試の実施は、その選定人員も多くいるし、日本のほとんどの大学にとってはその人員確保からして難しい。また、企業と大学の協力においても、ビジネス色の薄い学部が多い為、商学部や経済学部など一部の学部以外は企業と連携するのも難しい。

【ハノイ財政大学の先生より】
営利を目的とする企業にとって、応募してくる人材の質を確保するのは非常に繊細かつ重要な問題である。ベトナムの大学の例で言えば、一部オーストラリアやイギリスの企業と提携し、学内で職業に関するオリエンテーションを行うことに合意した。大学生の時期からある程度こうしたキャリア形成への『介入』を行うことは、将来についてより深く、真剣に考える良い機会となるだろう。また、大学における職業訓練や調査機関の機能もより充実させていくべきと考える。

【一橋大学の先生より】
そもそも大学・企業間の『協力』のコンセプトは何か？
企業側のメリットとしては、将来性の高い学生を早めに青田刈りできることが挙げられる。特に銀行や保険会社などは、将来性だけではなく、積極的に大学で講義を行っており、専門性の高い学生を見つけるケースもある。必要な人材を得る為に、企業が大学と協力するならば、大学にとってのメリットやデメリットは何か？ 学生のキャリア形成における資金やコストが保証される、というのは１つの答えかもしれない。
ともあれ、教育においては理論と実践の良いバランスが必要である。
大学教育・及びその先の就職活動において、理論重視のベトナムのあり方と、コミュニケーションスキルの重視に傾きつつある日本のあり方、これらを統合してみてはどうか？
例えば本討論会のような国際交流の場は非常に有意義である。準備段階では理論的な事を学び、更に実際のディスカッションでコミュニケーションスキルの向上が期待できる。
そもそも他人を説得させるためには、十分な理論の理解と提示が必要である。
このプログラム然り、準備段階における十分な理論の理解、統計の理解と、本番でのコミュニケーションスキルの３つが統合されることによって国際的に通用する人材ができるのではないか。同時に、セミナーを通じて、知り得た自己の反省点と向き合い、将来的に自分が何を伸ばすべきかを自覚する良い機会ともなる。
一つのグループの中でも、理論重視の学生や、コミュニケーションに強い学生など、いろいろおり、それぞれが自分の長所を活かし改善点を認識するのが大切ではないか。

5. 感想

私達が想像する以上に、他の途上国社会は日本のシステムや教育に憧れていると知った。日本の学生側が欧米式の教育をよしとして引き合いに出したにもかかわらず、一方ベトナム学生のプレゼンには常に日本が比較対象にあった。当たり前のように享受し、恐れ多くも不満な点ばかりを指摘していた我が国の教育が高く評価されていたと知り、少しむず痒い思いがする。不平を言う前に自分がその環境を十分に利用しきれているのか、振り返る必要があると感じた。

内向きと揶揄されることの多い日本人にとって、本国内に留学生が増えることには大きな意義がある。世界の留学生の熱意に駆られより多くの日本人のベクトルが外向きになるよう、私達自身もより積極的でありたいと思う。(中尾)

ベトナムの大学生も高校・大学のギャップや勉強へのモチベーションなど、日本と同様の問題を抱えていることに驚いた。現在、日本ではセンター試験の廃止など教育改革の議論が盛んだが、こうした領域でも両国が知見を共有する利点があるのではないかと思った。

また、ベトナムの学生が日本の教育を高く評価していることも印象的だった。しかし、その理由は長きに渡る日本からの援助と日系企業の待遇の良さだという。日本の大学が教育内容そのもので留学生を引き付けるには、まだまだ道程は遠そうだと感じた。

討論会後に交流した学生の話を聞いていると、大学生の勉強時間はベトナムの方が日本よりも大幅に多いと感じた。現行のシステムに不満があるのは確かだが、我々日本の大学生はそれすらも有効活用できていないことを恥じるべきだと自戒も込めて痛感した。今回の討論は自国の教育を客観的に考えてみる良い機会だった。(石井)

日本とベトナムそれぞれの教育の問題点には共通する点も多くベトナムのプレゼンテーションには強い共感を覚えた。ベトナムの学生が大学 1 年生になると下宿生活などによる生活環境の変化や専攻内容以外に対して興味を持つことにより勉学に対するモチベーションが低下するという問題が財政大学のプレゼンテーションで提示されたが、これらはまさに日本の大学でも起こっている問題であり、大学生の抱える問題は似通っている。ベトナムの学生は、日本との教育連携を希望しているが、日本にとってもベトナムと教育の連携をすることは、日本とベトナムが共通して抱えている問題を解決するにとどまらず、専門的な分野における理論から実践への転換など、日本の大学教育ではあまり解決できていない点を解決する点においても有意義であると感じた。

また、ベトナムでは外国の有名な専門書は翻訳されておらず、英語で学習せざるを得ないという話を聞いて、日本ではそのような本は翻訳されている場合が多く、日本は大学教育システム以外の面での学習環境が充実しているということを認識させられた。(齋藤)

学生のモチベーションというものが、教育において大きな問題であることを痛感した。ベトナムの学生は勤勉で、大学での勉強をおろそかにはしないイメージだったため、モチベーションの低さが問題になっていることにはおどろいた。その理由が日本は大学での勉強内容や成績が将来につながっているという実感が薄いことが大きな理由であるのに対して、ベトナムでは大学の学習環境への落胆や生活環境の劇的な変化、専攻選択への自律性がなかったことへの気づきだった。両国とも、大学だけではなく社会環境や企業の姿勢などが複合的に絡み合った原因で、解決のむずかしさやさまざまな施策の必要性を感じたが、最も強く感じたのは、あくまで学生が「受け身」であることだった。積極的に自分から大学での学びをつかんでいき、それを自分なりに将来に生かそうという努力をしない。そして自分自身も大学の施策や教えを待っている姿勢であることを痛感した。大学生は、入学試験での苦労を乗り越えた分、そこから先は大学が至れり尽くせりでサポートしてくれるはずだ、と驕っているのだと感じた。積極性を引き出すような教育を初等教育から通してずっとできたら、根本的に変わるのだろうか。難しいとは思うが、そういう方法も考えてみたいと思った。（潮崎）

Education in Japan

Haruka Saito, Miki Nakao, Taiga Ishii, Maiko Shiozaki

2013 Summer Study Program in Vietnam
Hitotsubashi University
Sept. 11, 2013

What happened to this student???

BEFORE

AFTER

Job hunting as a goal of life-long education....

Contents

+ 1. Research Question
+ 2. Hypothesis
+ 3. What Does a "Capable Person" Mean?
+ 4. Present Situation
4-1. Present Situation of Japanese Recruitment
4-2. Education in Japan
4-3. Problems
4-4. Higher Education in Japan
+ 5. Higher Education
5-1. Students' Expectations
5-2. Aquirement of Knowledge
5-3. Experiences and Network
5-4. One Day in a Typical University Student
5-5. Abilities Learned through Japanese University Education
+ 6. Main Factors Behind Japanese Students' Attitudes to University Education
6-1. Problems in Japanese Educational Administration
6-2. Problems linked to the Changing Views of the Japanese
+ 7. Proposal of Solutions
+ 8. Supplement
+ 9. References

1. Research Question

+ **Is the Japanese education system effective enough to bring up the young who are suitably qualified to meet the needs of the times?**

-Sub Questions-

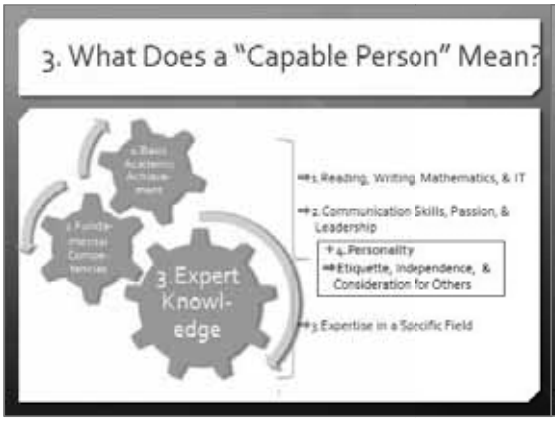
- What ultimate goals should higher education try to achieve?
- It is often said that in choosing university, Japanese people tend to place a higher priority on the school's reputation over the quality of its education. If this is the case, what kind of education are they expecting of university?

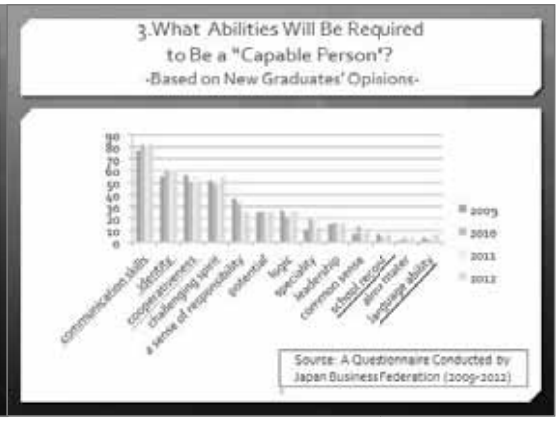
2. Hypothesis

+ One of the essential goals of higher education should be **to bring up the young who are qualified enough to become capable workers** immediately after graduation.
+ Current education in Japan has **failed** to achieve the aforesaid goal and fulfil its fundamental role in the development of capable human resources.
+ **Lack of students' enthusiasm** for making the maximum use of university education has also contributed to the problem of the ineffective education system of Japan.

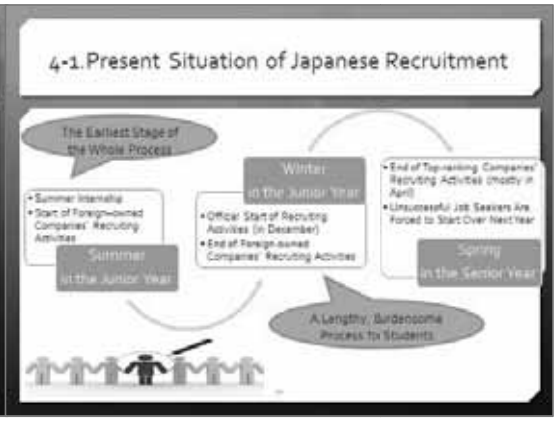
In short—

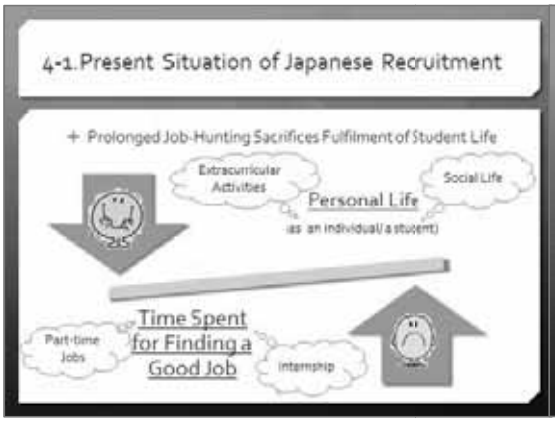
<u>Japanese students tend to choose schools and companies of established reputation. What social factors are there behind this tendency?</u>

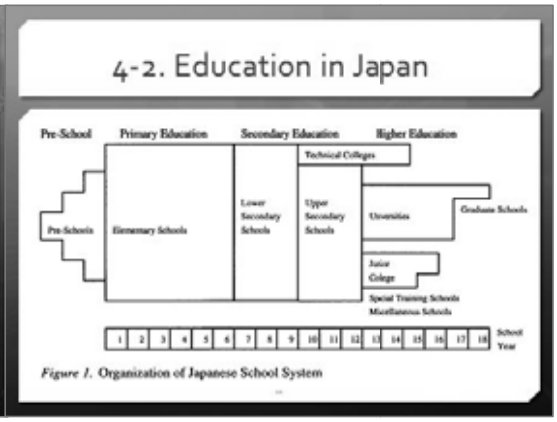

3. What Does a "Capable Person" Mean?
3. Expert Knowl-edge
1. Reading, Writing, Mathematics, & IT
2. Communication Skills, Passion, & Leadership
+ 4. Personality
Etiquette, Independence, & Consideration for Others
3. Expertise in a Sorcific Field

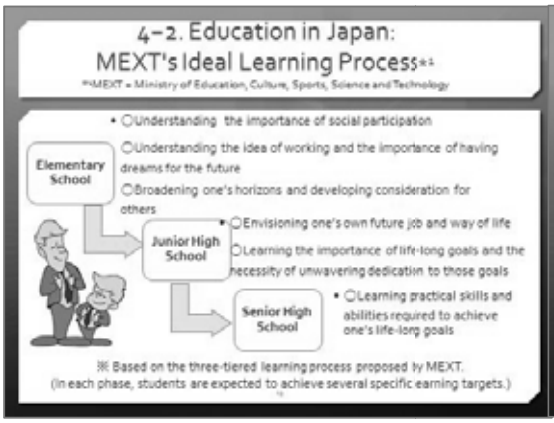

3.What Abilities Will Be Required to Be a "Capable Person"?
-Based on New Graduates' Opinions-
2009
2010
2011
2012
communication skills
identity
cooperativeness
challenging spirit
a sense of responsibility
potential
logic
specialty
leadership
common sense
school record
area master
language ability
Source: A Questionnaire Conducted by Japan Business Federation (2009-2012)

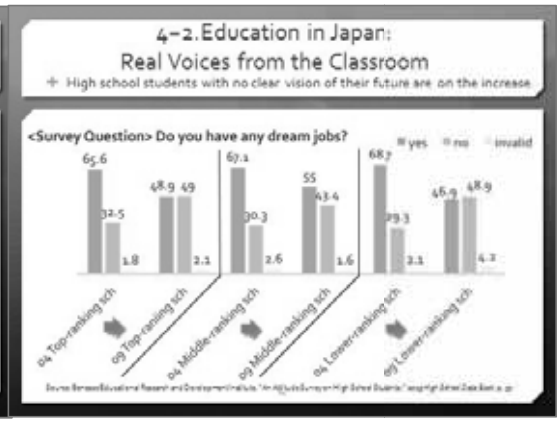
3. Where Can We Find a "Capable Person"?
+ Apparently only a superman or a superwoman will fit the definition of a "capable person."

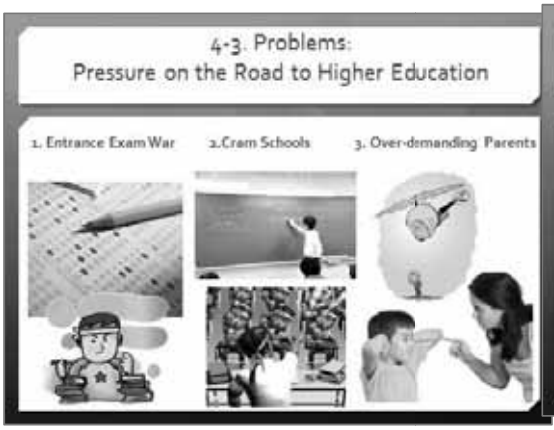

4-1. Present Situation of Japanese Recruitment
The Earliest Stage of the Whole Process
Summer in the Junior Year
• Summer Internship
• Start of Foreign-owned Companies' Recruiting Activities
Winter in the Junior Year
• Official Start of Recruiting Activities (in December)
• End of Foreign-owned Companies' Recruiting Activities
Spring in the Senior Year
• End of Top-ranking Companies' Recruiting Activities (mostly in April)
• Unsuccessful Job Seekers Are Forced to Start Over Next Year
A Lengthy, Burdensome Process for Students

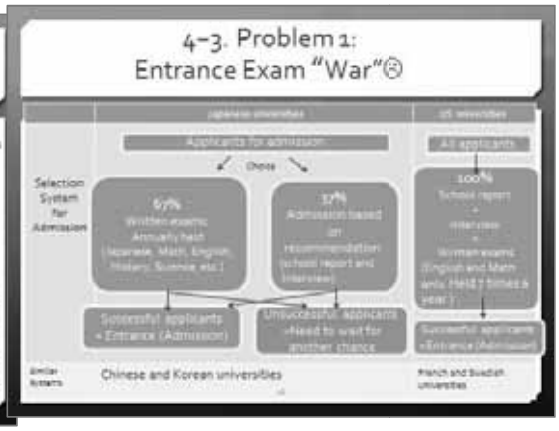

4-1. Present Situation of Japanese Recruitment
+ Prolonged Job-Hunting Sacrifices Fulfilment of Student Life
Extracurricular Activities
Social Life
Personal Life
(as an individual/a student)
Time Spent for Finding a Good Job
Part-time Jobs
Internship

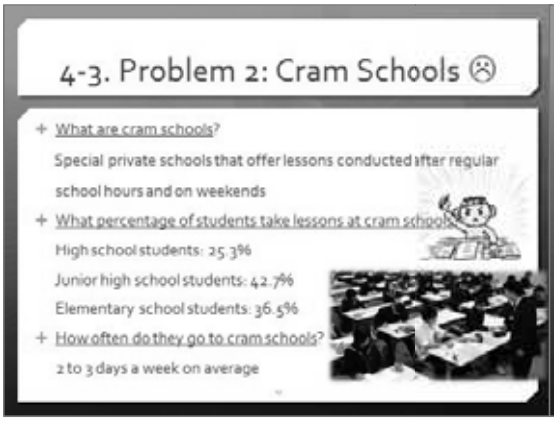

4-2. Education in Japan
Pre-School
Primary Education
Secondary Education
Higher Education
Technical Colleges
Pre-Schools
Elementary Schools
Lower Secondary Schools
Upper Secondary Schools
Universities
Graduate Schools
Junior College
Special Training Schools
Miscellaneous Schools
School Year
Figure 1. Organization of Japanese School System

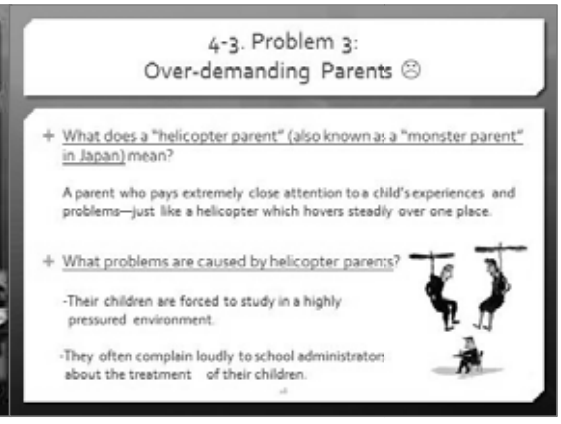

4-2. Education in Japan:
MEXT's Ideal Learning Process※1
※MEXT = Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology
Elementary School
○Understanding the importance of social participation
○Understanding the idea of working and the importance of having dreams for the future
○Broadening one's horizons and developing consideration for others
Junior High School
○Envisioning one's own future job and way of life
○Learning the importance of life-long goals and the necessity of unwavering dedicatin to those goals
Senior High School
○Learning practical skills and abilities required to achieve one's life-long goals
※ Based on the three-tiered learning process proposed by MEXT.
(In each phase, students are expected to achieve several specific earning targets.)


4-2. Education in Japan:
Real Voices from the Classroom
+ High school students with no clear vision of their future are on the increase
<Survey Question> Do you have any dream jobs?
yes
no
invalid
65.6
32.5
1.8
48.9
49
2.1
67.1
30.3
2.6
55
43.4
1.6
68.7
29.3
2.1
46.9
48.9
4.2
04 Top-ranking sch
09 Top-ranking sch
04 Middle-ranking sch
09 Middle-ranking sch
04 Lower-ranking sch
09 Lower-ranking sch


4-3. Problems:
Pressure on the Road to Higher Education
1. Entrance Exam War
2.Cram Schools
3. Over-demanding Parents

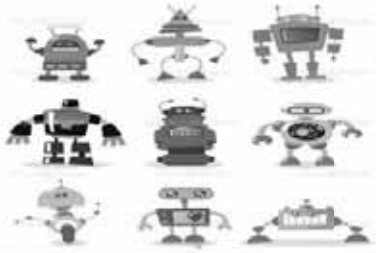

4-3. Problem 1:
Entrance Exam "War"☹
Japanese universities
US universities
Applicants for admission
All applicants
Chose
Selection System for Admission
67%
Written exams
Annually held
(Japanese, Math, English, History, Science etc.)
33%
Admission based on recommendation (school report and interview)
100%
School report
+
Interview
+
Written exams
(English and Math only. Held 2 times a year.)
Successful applicants = Entrance (Admission)
Unsuccessful applicants =Need to wait for another chance
Successful applicants =Entrance (Admission)
Similar systems
Chinese and Korean universities
French and Swedish universities


4-3. Problem 2: Cram Schools ☹
+ What are cram schools?
Special private schools that offer lessons conducted after regular school hours and on weekends
+ What percentage of students take lessons at cram schools?
High school students: 25.3%
Junior high school students: 42.7%
Elementary school students: 36.5%
+ How often do they go to cram schools?
2 to 3 days a week on average


4-3. Problem 3:
Over-demanding Parents ☹
+ What does a "helicopter parent" (also known as a "monster parent" in Japan) mean?
A parent who pays extremely close attention to a child's experiences and problems—just like a helicopter which hovers steadily over one place.
+ What problems are caused by helicopter parents?
-Their children are forced to study in a highly pressured environment.
-They often complain loudly to school administrators about the treatment of their children.

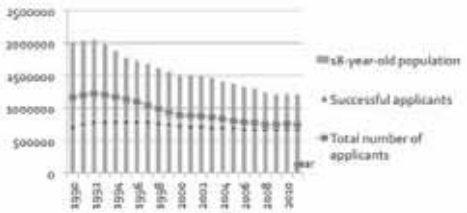
4-3. Possible Consequence of Constant Pressure on Children

+ Production of exam-passing machines or remote-control robots?



4-4. Higher Education in Japan

Transitional change in the number of admission applicants for universities and junior colleges in Japan



5-1. What Do Japanese Students Expect of Higher Education?

+ After long years of hard work, successful applicants finally get into a university. Then what can they expect to gain from the university education?

Knowledge
- To acquire professional skills
- To heighten one's level of cultural awareness

Networking
- To meet other people who have similar interests, share information, and support each other

Experience
- To experience a particular activity or purpose to which one can dedicate oneself and make good use of that experience in the life after graduation

5-2. Acquirement of Knowledge: A Standard University Curriculum for the Humanities Majors

- Introductory level: Introductory courses for major subjects; ex.) An Introduction to Economics
- General education subjects: Languages (English, second foreign languages); Math
- Advanced level: Advanced courses; Applied researches
- Seminars: Researches in major fields
- Graduate level: Graduate courses (Often open to undergraduates as well)
- Graduation thesis: Graduation requirement

5-2. Knowledge Required of the Humanities Majors

The Screening Effect

A theory that the main subject or course of a university student can influence what career they tend to choose in their future.

Typical examples:

+Finance majors→ bankers

+Law majors → lawyers/ enrolment in law schools

+Social science majors→ journalists and other media-related careers

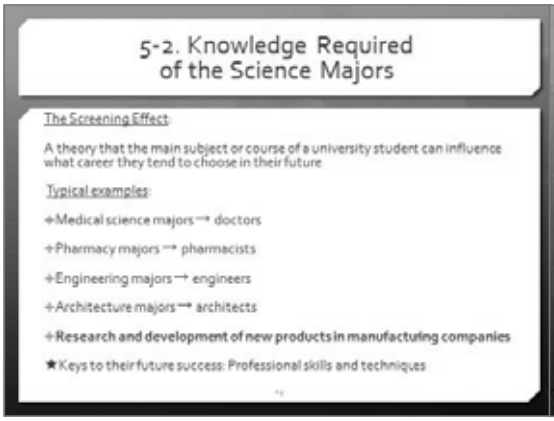
+**Sales and business staff in companies of various industries**

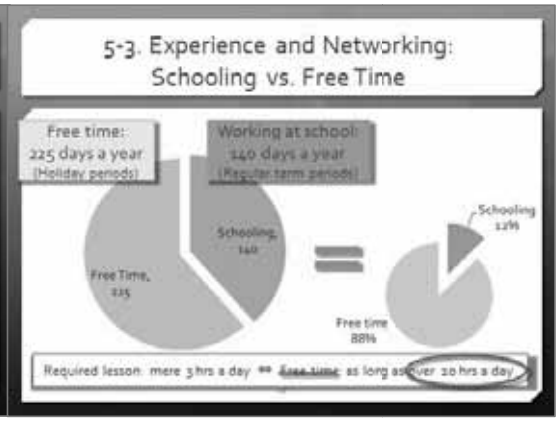
★Keys to their future success:

Extensive experience, reliable personality, and good communication skills

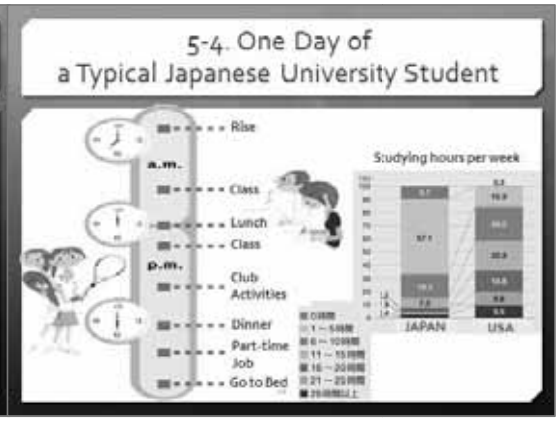
5-2. Acquirement of Knowledge: A Standard University Curriculum for the Science Majors

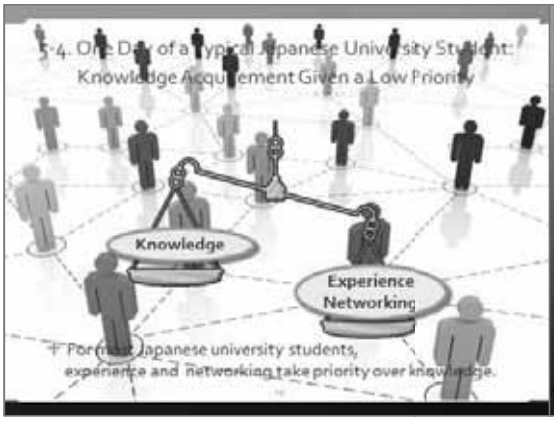
- Introductory level: Introductory courses for major subjects; Lectures on communication skills and problem-solving skills
- General education subjects: Language courses; Mathematics, information skills
- Advanced level: Laboratory work, practical skills; ex.) Medical treatment skills
- Practical training: Anatomy, practical training in medical diagnosis and treatment (Medicine); Practical training in architectural design (Architecture)
- Graduate level: Highly specialized courses in specific fields; ex.) Internal, External Medicine, Emergency Treatment, Local Treatment
- Graduation exams: Graduation requirement; Passing state examinations

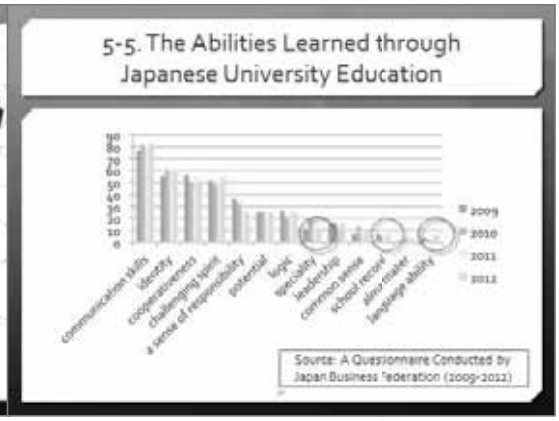

5-2. Knowledge Required of the Science Majors
The Screening Effect
A theory that the main subject or course of a university student can influence what career they tend to choose in their future
Typical examples:
+Medical science majors → doctors
+Pharmacy majors → pharmacists
+Engineering majors → engineers
+Architecture majors → architects
+Research and development of new products in manufacturing companies
★Keys to their future success: Professional skills and techniques


5-3. Experience and Networking: Schooling vs. Free Time
Free time: 225 days a year (Holiday periods)
Working at school: 140 days a year (Regular term periods)
Schooling, 140
Free Time, 225
Schooling 12%
Free time 88%
Required lesson: mere 3 hrs a day ⇔ free time: as long as over 20 hrs a day

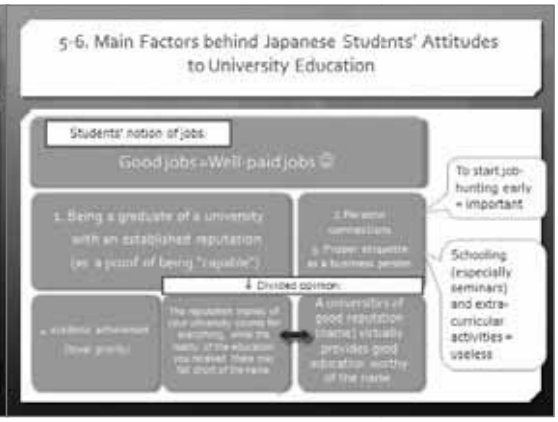
5-3. Experience and Networking: Major Activities of Japanese University Students
At school:
+ Club activities
+ School festivals
Outside school:
+ Studying abroad
+ Travelling around Japan / the world
+ Part-time jobs
+ Internship
+ Studying for qualifying examination

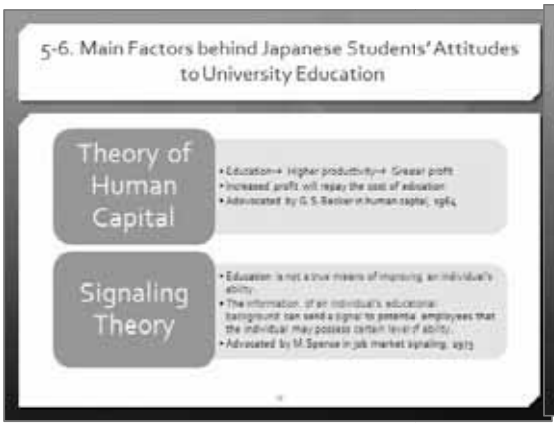

5-4. One Day of a Typical Japanese University Student
Rise
a.m.
Class
Lunch
Class
p.m.
Club Activities
Dinner
Part-time Job
Go to Bed
Studying hours per week
JAPAN
USA

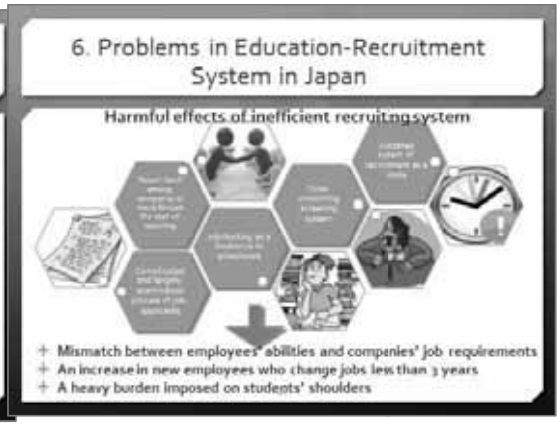

5-4. One Day of a Typical Japanese University Student: Knowledge Acquirement Given a Low Priority
Knowledge
Experience Networking
+ For most Japanese university students, experience and networking take priority over knowledge.

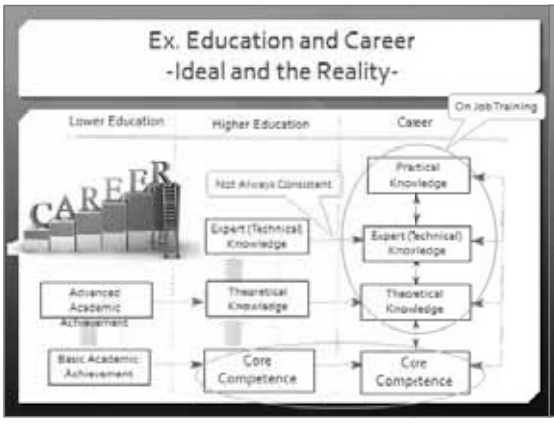

5-5. The Abilities Learned through Japanese University Education
communication skills
identity
cooperativeness
challenging spirit
a sense of responsibility
potential
loyal
specialty
leadership
common sense
school record
any master
language ability
2009
2010
2011
2012
Source: A Questionnaire Conducted by Japan Business Federation (2009-2012)

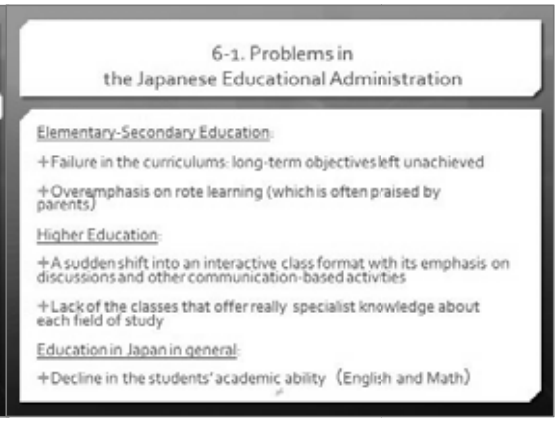
5-1. ~5-5. What Do Japanese Students Expect of Higher Education? (Summary)
+ The ultimate goal of most Japanese univer students is to be successful in job-hunting
+ Students take the reputation of a university more seriously than the quality and contents of the education it offers.
+ What do university years mean for Japanese students?
= "The last long vacation" to fully enjoy their free time
⇒ Beginning of job-hunting
End of free life as private individuals
Students are forced to charge into irreproachable, but faceless, would-be employees


5-6. Main Factors behind Japanese Students' Attitudes to University Education
Students' notion of jobs
Good jobs=Well-paid jobs
1. Being a graduate of a university with an established reputation (as a proof of being "capable")
2. Personal connections
3. Proper etiquette as a business person
Divided opinion
A universities of good reputation (name) virtually provides good education worthy of the name
To start job-hunting early = important
Schooling (especially seminars) and extra-curricular activities = useless


5-6. Main Factors behind Japanese Students' Attitudes to University Education
Theory of Human Capital
• Education→ Higher productivity→ Greater profit
• Increased profit will repay the cost of education
• Advocated by G. S. Becker in human capital, 1964
Signaling Theory
• Education is not a true means of improving an individual's ability
• The information of an individual's educational background can send a signal to potential employees that the individual may possess certain level of ability
• Advocated by M. Spence in job market signaling, 1973


6. Problems in Education-Recruitment System in Japan
Harmful effects of inefficient recruiting system
+ Mismatch between employees' abilities and companies' job requirements
+ An increase in new employees who change jobs less than 3 years
+ A heavy burden imposed on students' shoulders


Ex. Education and Career -Ideal and the Reality-
On Job Training
Lower Education
Higher Education
Career
CAREER
Not Always Consistent
Practical Knowledge
Expert (Technical) Knowledge
Expert (Technical) Knowledge
Advanced Academic Achievement
Theoretical Knowledge
Theoretical Knowledge
Basic Academic Achievement
Core Competence
Core Competence

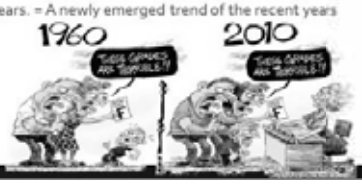

6-1. Problems in the Japanese Educational Administration
Elementary-Secondary Education:
+Failure in the curriculums: long-term objectives left unachieved
+Overemphasis on rote learning (which is often praised by parents)
Higher Education:
+A sudden shift into an interactive class format with its emphasis on discussions and other communication-based activities
+Lack of the classes that offer really specialist knowledge about each field of study
Education in Japan in general:
+Decline in the students' academic ability (English and Math)

6-2. Problems Linked to the Changing Views of the Japanese

+ It is increasingly becoming obscure who should be ultimately responsible for students' education.

  –Teachers? Parents? Or students themselves?

+ 30% of new graduate recruits leave their first job within 3 years. = A newly emerged trend of the recent years

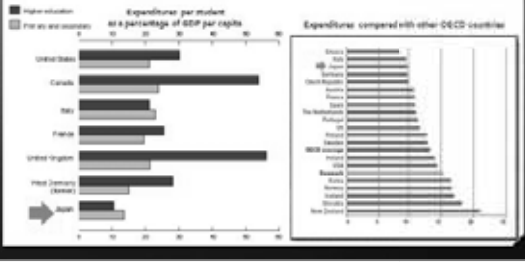


7. Proposal of Solutions

1. The government needs to **increase the education budget**.
2. Universities and companies should cooperate closely to provide the environment where students can participate in **internships and other work experience programs** and more actively.
3. **GPA should be more emphasized** as a trustworthy indicator of students' academic achievement. (The GPA score as a graduate requirement should be raised.)
4. Students **need to build their own individual career plans**.

7-1. Need to Increase the Education Budget

+ Japanese government's expenditure, especially on higher education remains low for the past 4 years.



7-2.Internships

+ 1.The term should be planned much longer
+ 2. The contents should be more similar to the real job
+ 3.Cooperation among companies and universities is strongly suggested (Ex. Hit-U)

7-3.GPA in Japanese Universities

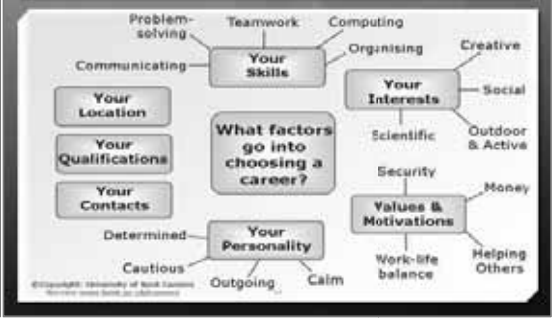
+ Universities and companies should recognize the significance of GPA as a trustworthy indicator of students' academic achievement.
+ Most Japanese universities use a four-point system, with the highest grade point of 4.0 (which is equivalent to a letter grade of "A").

A = 4, B = 3, C = 2, D = 1, F = 0

Grade Points = Grade Value **x** Units Earned

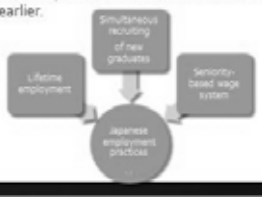
G.P.A. = $\frac{\text{Total Grade Points}}{\text{Total Units Earned}}$

7-4. Building Individual Career Plans



8. A Question for Further Research

- The problems in education in Japan are complicatedly linked with Japanese-style employment practices.
- The reform of the conventional Japanese employment system will be the first step toward the solution of educational issues we discussed earlier.



9. References

- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan http://www.mext.go.jp/b_menu/shiryo/index.htm
- The report from The 34th International Symposium for Students, 2012 34th Symposium Executive Committee
- Job market signaling, M.Spence 1973
- Human Capital, G.S.Becker 1964
- 文部科学省　大学改革実行プラン
- 高等教育支援の在り方ー大学間・産学連携、開発金融研究所報、2012
- 21世紀の教養と教養教育、日本学術会議 日本の展望委員会 知の創造分科会、2010
- 若年労働市場における教育過剰ー学歴ミスマッチが賃金に与える影響ー、ESRI Discussion Paper Series NO.154、2012
- 日本の教育経済学：実証分析の展望と課題、小塩隆士・妹尾渉、ESRI、2003
- 大学教育と初職キャリアの関連性-全国大学四年次と卒業後二年目の継続調査、梅崎修・田澤実、法政論叢、2012
- 大学教育の分野別質保証の在り方について、日本学術会議、2010

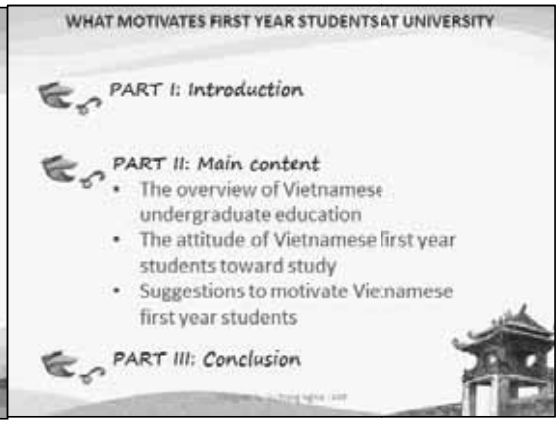
9. References

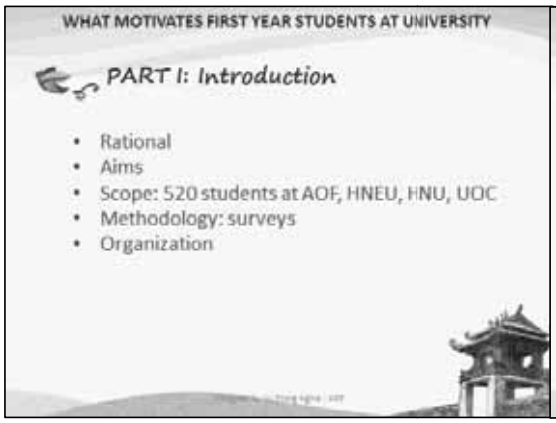
- 大学教育機会の拡大によって大卒学歴の価値はどのように変化したのか？-日本版学歴インフレの再一検証-、ディスクッションペーパー大学・産業大学院研究科、2011
- 入社員総調査　大学・短期大学、RECRUIT、2012
- キャリア教育についてのアンケート、パネッセ
- 新卒採用に関するアンケート調査結果、(社)日本経済団体連合会、2009・2010・2011・2012
- 就職における大卒の価値ー大卒と高卒の比較を通してー 宮崎和樹・青木英子・高橋豊・高橋林蓮・中村直樹（東北大学教育学部）、2011
- 現代における大学生の就職問題と対策への提案ー厳しい就職、大学とはー高橋和也子、2012
- 平成２４年度　学校基本調査、　Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology-Japan 2012

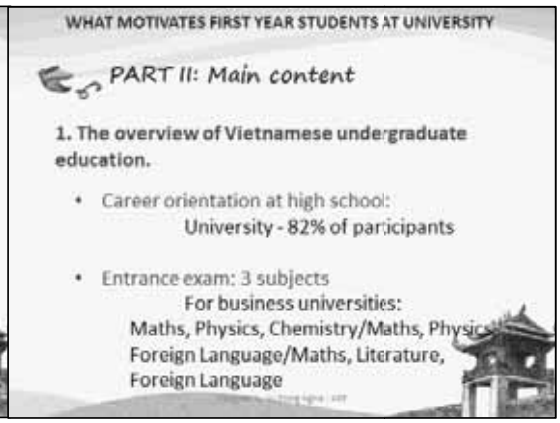
Thank you for your kind attention...

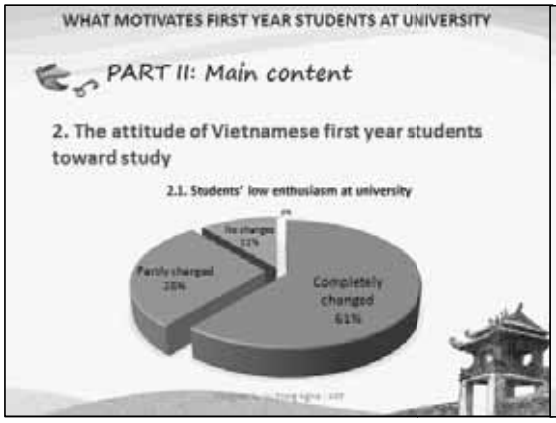
Any questions are welcome!!!

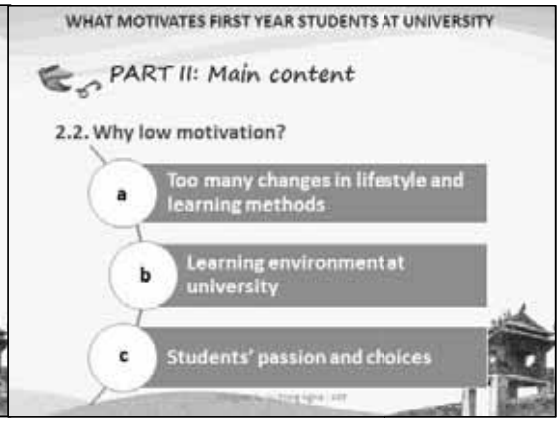
WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
Presenters: Le Ngoc Anh (CQ50/51.02)
Nguyen Ngoc Ha (CQ49/51.02)
Le Thi Kim Nhung (CQ49/51.02)
Designed by Vu Trong Nghia (CQ50/51.02)


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTSAT UNIVERSITY
PART I: Introduction
PART II: Main content
• The overview of Vietnamese undergraduate education
• The attitude of Vietnamese first year students toward study
• Suggestions to motivate Vietnamese first year students
PART III: Conclusion

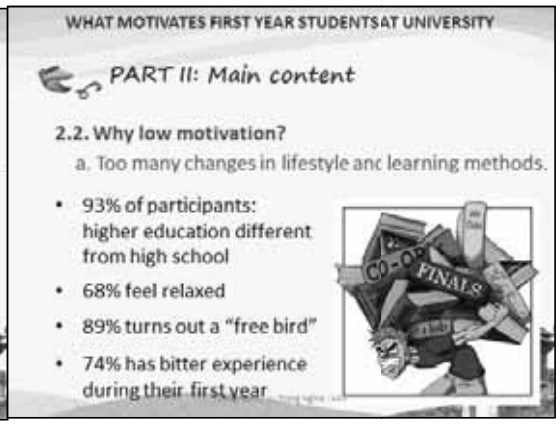

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART I: Introduction
• Rational
• Aims
• Scope: 520 students at AOF, HNEU, HNU, UOC
• Methodology: surveys
• Organization

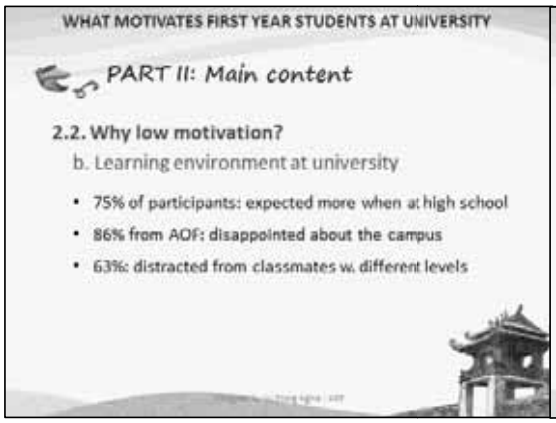

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
1. The overview of Vietnamese undergraduate education.
• Career orientation at high school:
University - 82% of participants
• Entrance exam: 3 subjects
For business universities:
Maths, Physics, Chemistry/Maths, Physics, Foreign Language/Maths, Literature, Foreign Language

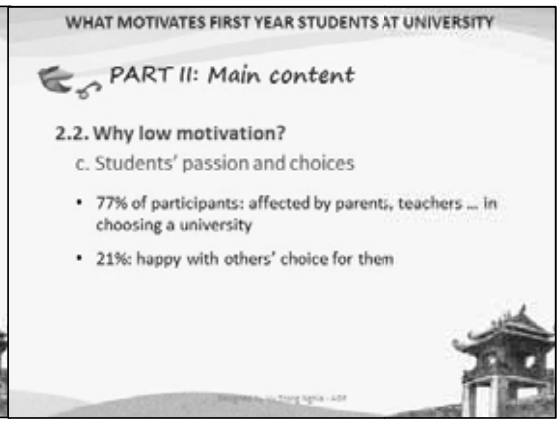

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2. The attitude of Vietnamese first year students toward study
2.1. Students' low enthusiasm at university
Completely changed 61%

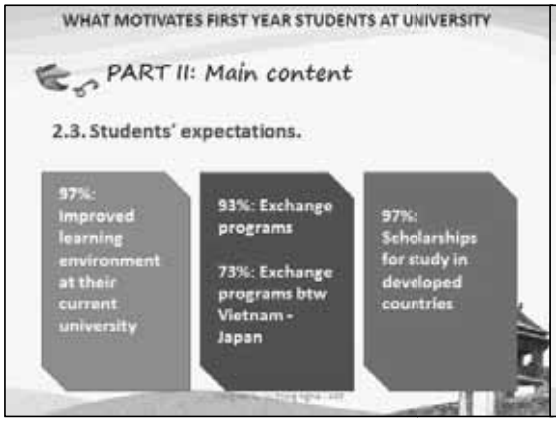

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.2. Why low motivation?
a Too many changes in lifestyle and learning methods
b Learning environment at university
c Students' passion and choices

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.2. Why low motivation?
a. Too many changes in lifestyle and learning methods.
Free life without control
Self financial management
New learning styles
Good mark pressure


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTSAT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.2. Why low motivation?
a. Too many changes in lifestyle anc learning methods.
• 93% of participants: higher education different from high school
• 68% feel relaxed
• 89% turns out a "free bird"
• 74% has bitter experience during their first year
CO-OP
FINALS


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.2. Why low motivation?
b. Learning environment at university
• 75% of participants: expected more when at high school
• 86% from AOF: disappointed about the campus
• 63%: distracted from classmates w. different levels


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.2. Why low motivation?
c. Students' passion and choices
• 77% of participants: affected by parents, teachers ... in choosing a university
• 21%: happy with others' choice for them


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
2.3. Students' expectations.
97%: Improved learning environment at their current university
93%: Exchange programs
73%: Exchange programs btw Vietnam - Japan
97%: Scholarships for study in developed countries

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
3. Suggestions to motivate Vietnamese first year students.
• Administrative refoms and students assessment reforms
• Stronger connection between high schools and universities
• Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.1. Administrative reforms and students assessment reforms

❖ Suggested activities

- Keep holding entrance exam annually, but there will be one and only 'pass mark'
- Divide students into classes and let them have one month to study called 'trial period'
- Hold a placement test to group students by their levels
- After a fixed time (2 months or more), organize a placement test again, re-group students

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTSAT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.1. Administrative reforms and students assessment reforms

❖ Suggested activities

- Focus more on practice, not only on theory.
- Reduce students' pressure.
- Improve students' soft skills.

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.2. Stronger linkage between high schools and universities

- Introduce some majors in university to high school students through basic subjects.

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.3. Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education

- Before university: Develop and enhance careerguidance in high schools
- During university: Improvethe quality of education
- After the graduation: Increase job opportunities

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.3. Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education

Before university: Develop and enhance career guidance in high schools

- Hold career consultations
- Introduce Japanese scholarship programs to Vietnamese high school students
- Introduce Japanese culture to Vietnamese students and vice versa

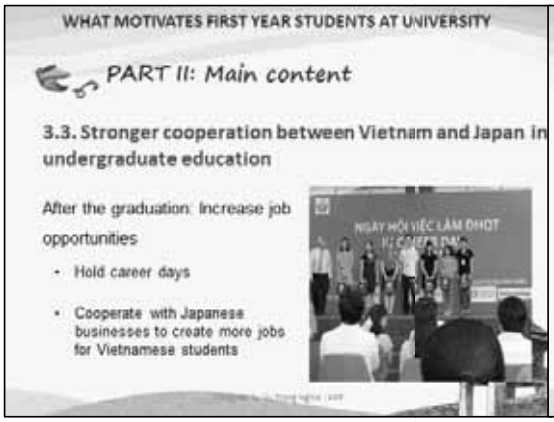
WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY

PART II: Main content

3.3. Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education

During university: Improve the quality of education

- Upgrade educational infrastructure
- Implement exchange programs for students and teachers
- Keep introducing Japanese scholarship and internship programs to Vietnamese first year students


WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART II: Main content
3.3. Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education
After the graduation: Increase job opportunities
• Hold career days
• Cooperate with Japanese businesses to create more jobs for Vietnamese students

WHAT MOTIVATES FIRST YEAR STUDENTS AT UNIVERSITY
PART III: Conclusion
1. Administrative reforms and students assesment reforms
2. Stronger linkage between high schools and universities
3. Stronger cooperation between Vietnam and Japan in undergraduate education

THANK YOU FOR YOUR ATTENTION!

Does anyone have any question?

ハノイ財政大学の学生との
待ちに待った討論会。
立派な部屋に通され、少し
緊張・・。

教育班の
プレゼンテーション

真剣に発表に耳を傾けま
す。

時に笑顔に・・♡

農業班の
プレゼンテーション

終了後、
写真撮影を行ないました♪

1・2・3・ジャンプ!!!!

財政大学の皆さん、
ありがとうございました♡

【コラム　カフェ】

7 日間を通して、ホテル周辺の様々なカフェを回りました。忙しいスケジュールの合間を縫い、カフェを探しに出歩くのがしばしの憩い(笑)。とりわけハノイの町にはカフェが立ち並び、コーヒー、スムージーを 20000 ドン(100 円)で売っていました。味は驚くほど美味しく、日本で同じクオリティを求めたら 500 円ぐらいするだろうと、全員でベトナムカフェの魅力にはまってしまう始末(笑)写真はハノイのホテルの前のカフェで。日本ではなかなか体験できない、お風呂場にある椅子に腰掛けて飲むという習慣がとても興味深く、飲み物を楽しみながら様々な話に花を咲かせました。

ベトナム調査

五日目

ベトナム計画投資省

文責　中尾　実貴

1. 訪問日時・場所

9 月 12 日（木）10 時から 11 時

ハノイ市のベトナム計画投資省会議室にて

2. 担当者

計画投資省　日本担当　Nguyen Hoang Linh　課長

3. 機関概要

・計画投資に関する管理・マネジメントの役割を担う国家機関。

・五カ年計画などの国家社会経済発展の計画や経済発展と特定分野課題における政策策定・調整などを行う。

・国内の投資や海外投資の促進、工業団地や輸出加工地区の経営や政府開発援助の受け入れ、国家全体のビジネスルールの策定などを担っている。

・　五カ年計画の流れ：計画投資省による草案作成→首相提出→大臣と共同で仕上げ→国会提出→討論、決定。

・経済成長を達成する主要な課題として、①経済インフラの整備（高速道路、IT)、②高い人的資本の開発、③国際経済へ参画の他、④貧困削減を掲げている。

4. 講義内容

（1）　事業内容について（2011-2015 年度五カ年計画概要）

1. 主導的で健全な金融政策。市場経済原理に沿った価格政策を柔軟に実施し、マクロ経済の安定的な持続成長を目指す。
2. 国家経済の構造改革を続ける。軽工業からハイテク産業へのシフトと、国営部門主導に加え民間部門の支援策強化。
3, 公平な競争環境創出、ビジネス環境改善、企業競争力向上。
4. 経済成長と社会進歩の並行。貧困削減計画と社会保障。
5. 国家機関の能力向上、社会主義志向の市場経済体制改善。

5. 質疑応答

–ベトナム産業構造について

（1）今日のベトナムでは、工業化にともなって農業従事者の数が減っている。今後、ベトナムの産業構造はどのようになると考えているか？

（回答）ベトナムは農業に大きく依存している国だが、日本の協力もあり１０年以上前から工業化が一層促進されてきた。首相は２０２０年目標でベトナムの工業化戦略を出したばかりである。これには６つの戦略要素があるが、農業もそのうちの一つ、しかも核である。この戦略に依拠するならば、今後も農業は継続してベトナムの中心産業となるであろう。

（２）日本では、農業従事者の数が減ったのみならず、高齢化もしている。このため、日本政府は「第六次産業」などの新たな政策を考えている。ベトナムでは、農業における生産性を改善し、農業従事者と工業従事者の賃金格差を埋めるためにどのような取り組みを行っているか？
（回答）生産性を向上させるのは難しい。更に、労働力となる人々の多くが、都心部に来て仕事を見つける時代になっている。そんな彼らに農業に注力させるためには、科学・技術を用いたり、他国からの新たな知識を学んだりと、農業におけるキャパシテイビルディングを行う必要がある。

（２）−２　ハノイ財政大学の学生は農業は魅力的でないというが？
（回答）確かに若者にとって農業はあまり魅力的ではない。近年では、経済や財政分野について学んだほうが卒業後にも良い仕事につきやすいからだ。とはいえ、経済状況が良くない今、例え経済を学んでも卒業後に仕事を得られない学生もいる。このため、経済学部に志願する学生の数自体を制限する試みも見られる。

（３）ベトナムの労働力について、軽工業から重工業への転換は本当に可能なのか？また、生産物の質を高めるためにどうしたいか。
（回答）ベトナムでは３つの政策を特に重要視している。
①インフラへの集中　②高い技術力を要する労働力　③組織改革　である。
これらに注力することによって、労働力の移転や重工業化も徐々に実現すると考える。

（４）ベトナム経済において継続的に貿易赤字が続いているのは問題だ。主な輸出品は軽工業における生産物や農産物で、利益率は低い。一方、石油製品やインフラなど、重工業の生産品は主要な輸入品目となっている。この構造が一層貿易赤字の解決を困難にしていると見るが、この問題を解決するためにはどのような方策が考えられるか？
（回答）ベトナムの首相が掲げる工業化戦略における６つの主要分野に注力したい。例えば、オートバイ、農業の機械化などだ。この工業化により、高価格の輸入品目を減らし、国内生産を増加させるなど、生産構造を変えていくことが求められる。

-投資環境や金融セクターについて

（５）今日、ベトナム政府は市場主義経済への移行を行っていると聞く。社会主義経済から市場主義経済に移行することによるメリットは何か？経済発展の文脈でお聞きしたい。

(回答)いまやベトナムのシステムは市場主義経済よりになったと考える。近年でも、税金の変化、国内物価や石油価格の安定なども良い変化があった。

（６）投資総額に占める外資系企業の海外直接投資額はほとんど 25%であり、これは他国と比較してもとても高い。ベトナムにおける海外直接投資のメリットとデメリットはなにか。

（回答）我々は発展途上国だから、まだまだ資本が必要な段階だ。途上国のほとんどの国は海外直接投資（FDI）に頼っているし、FDI は発展のための重要な資源である。むろん、国内投資も重要だがまだそれが満足に行われる段階にはない。また、FDI が増加すれば、海外の高い技術力、高い生産性に学ぶことができるのもメリットである。

（６)-２　技術的な面・発展を考えた時目標とする国とは？

また、日本よりは技術力や質に劣るが、安い技術を提供する国をどう見るか？

（回答）この問題には二面性がある。まず、日本の技術力はとても高く評価されている。(例：オートバイ）例えば韓国の技術は日本より安いが、日本の技術力には劣る。日本製品の問題点はやはりとても高いことだ。受注する側としては、どうしても質と価格の妥協を行わなければならない。

ただし、ベトナム政府としては、受注決定における最優先事項は質、80%であり、残り 20%足らずが価格面であることを強調しておく。

-ベトナム経済の方向性について

（７）ベトナム経済発展の帰結をどのように評価するか？その他 ASEAN 諸国などに比べて有利な点があれば教えてほしい。

(回答)現在、ベトナムでは 8500 万人の人口を抱える。これは世界的にも大きな市場であり、東南アジアではインドネシアの次に高い。人口の平均年齢も低く、また労働賃金も安い。このように、需要・労働の市場として可能性に満ちていることは一つの有利点だ。

（８）経済発展はベトナムの国としての独立性をもたらすと思うか？

（回答）現在、FDI の比率が多いし、確かに未だベトナムが一国として経済的に独立しているとは言えない。だが、より発展していくことによって、経済の独立性が確立されると信じている。

（９）ベトナムのガバナンス改善を望む他国の声に対しどう対応したいか？
（回答）ベトナムは現在、他国の声に対しとてもオープンな国である。
例えば、計画投資省長もリーダーを務め、途上国のパートナーとコンサルティングのグループミーティングを行っている。経済的なマネジメントを含め他の国々の意見はとても歓迎している。

（１０）レストランでお釣りがなく、キャンディで代用する現状をどう思うか？？？
（回答）ご指摘のような会計のシステムだけではなく、他の不具合も含め変更が必要なのは自明だ。しかし、会計システムなどで新たな基準を採用するためには、採択までにそれが真に有効なものか慎重に計算せねばならず、速攻で解決できるとも言えない。国際化の進む中、こうした基準を採択するにあたっても先進国日本などの支援を望んでいる。

（１１）ASEAN 経済統合についてはどう思うか？
（回答）多くの分野で、ASEAN 諸国とは交渉を行っている。例えばサービス分野において、同じシステムを使おうとしている。このプロセスは、EU が貨幣統一を行った時と同じだと思っている。
（１１)-２　しかし、多文化異人種の集う ASEAN は EU のようにいかないのでは？相違をどう克服するか？
（回答）文化において合意を得るのはとてもむずかしい。地道な交渉のプロセスが要となる。とはいえ、あらゆる文化を持ちつつも ASEAN 諸国は皆よく似ていると思う。

（１２）人民にやさしいベトナム政府だが、妥協折衷を重視するあまりプロジェクトに時間がかかっている現状をどう思うか？
（回答）今すぐに土地をとりあげると、ベトナムの人々は収入を失ってしまう。
日本の ODA プロジェクトでは特に、土地利権が絡み、人々との妥協に時間がかかっている。大きな理由の一つに、土地を担保とする政府からの補償が十分でないと思う人々が多く、納得していないことが挙げられる。国の発展の為には重要だと説得し続けるしかない。査察機関（Reassessment Unit）の責任の下で、家庭訪問を行いつつ対話を進めている。

-その他
（１３)日本の政府についてどんな印象を持っているか？
（回答）先程も述べたように、受注の最優先事項は質である。ただ、市場主義経済の中にあっては、価格も大事な問題だ。全体を考慮し、仮に他国の技術が日本の９０％

を満たしていれば、日本より格段に安い他国の技術を選ぶ。
ODA 提供のあり方として、紐付き、紐なしがあることはご存知だと思う。日本とは紐付き案件が多い。（パッケージ方式）しかしこの場合、全体総額が高すぎて利用できない事が多い。日本政府・企業は、今後全体的な価格の見直しをしなければ、これから他国の技術が向上して行くに伴って競争に負けてしまう事が増えるだろう。

（１３)-２　ここでいう『他国』とは？
（回答）アメリカやヨーロッパなどの先進国。ただし中国とは品質の問題があるため距離をおいている。中国企業の価格は非常に安いが、質があまりにも良くない。

（１４）日本人学生に対して最後に何か一言あるか
（回答）ベトナムをもっと訪れて、日本が先進国であることを知ってほしい。
自分たちの環境とここ途上国のあり方の違いを学び、異なる視点を得てほしい。

6. 感想

共産圏の政府関係者ということで、インタビュー前はとても緊張したが、大変気さくな方で安心した。計画投資省の中でも、親日的な方として知られるという。私達のような若者世代が、将来のベトナムを担う若者たちとの交流を進め、このように日本に親近感を持つ方が政府関係者に増えゆく事が、少なからず将来の日本外交の円滑さにつながるような気がした。案件採択の文脈で聞かれた、『このままだと日本は他国に負けてしまう』との言葉は、受注国側の声だけに真実味があり、真摯に受け止めなければならないと思う。

ベトナム中央銀行

文責　新井　小百合

1. 訪問日時・場所

9 月 12 日（木）14 時から 15 時

４９Ly Thai To-Hoan Kiem,Hanoi

2. 担当者

JICA Japan Desk Coordinator 八木規子様

Do Viet Hung 様　Nguyen Vinh Hung 様他

3. 機関概要

通貨政策の決定、外国為替準備金の管理などを行う。また商業銀行といった信用機関や金融機関の設立許可・監督などを行う中央政府の機関。

4. 質疑応答

（１） ベトナムの銀行はなぜここまで不良債権問題に悩んでいるのか。

（回答）まず、銀行が不良債権に悪影響を受けているのには主に３つの理由がある。

① 最近ベトナムではインフレが発生し、その後経済成長が停滞したことにより、多くの企業が影響を受けている。企業は生産面において、高い生産費用、金利の上昇、資金の調達面での制約などの問題に直面している。

② 多くの銀行が、リスク管理能力が低い中、競争にさらされ利益を出さなければならず、無理のある融資やリスクのある投資(不動産投資)に手を出してしまった。その結果銀行は不良債権を抱え込むことになった。

③ ベトナム中央銀行(以下 SBV)の銀行監督能力には限界があり、全ての銀行の法令違反を調べ防ぐことはできない。

以上が主な理由である。しかし、この監督能力を改善するために銀行監督機関でオフサイトモニタリングを行ったり、国際機関の支援を受けたりしている。

（２） 不良債権を買い取る会社(Vietnamese Asset Management Company 以下 VAMC)を設立したが、どのように機能しているのか。

（回答）VAMC は２０１３年７月に不良債権回収のため設立された。VAMC は銀行からローンを購入している。その方法は二つある。

① VAMC は銀行から不良債権を簿価で買い取る。
② VAMC は不良債権を市場価格で買い取る。
買い取った後、VAMC は自身の判断で不良債権を処分することができ、売却の価格や買い手の峻別を取り決めることができる。

VAMC は銀行にとっても借り手にとっても有益である。なぜなら銀行は不良債権を VAMC に送り処分して資金を手に入れることができるとともに、自身の資産を償却して財務諸表をよりよくすることができる。一方借り手の方も返済の条件を組み直せる。

（３） ベトナムの銀行による不良債権の虚偽報告に対する対処はどのようなものか。

(回答) SBV に各銀行が不良債権のデータを報告するが、不良債権を定義する方法と評価する方法は別のルールに基づいている。また、SBV によって発行される資料は各銀行から報告された資料をとりまとめたものである。さらに不良債権についてのデータをより確実なものにするために銀行の監督をより厳密に行った。そして銀行の実地検査をより弾力的に行えるよう、手続きを簡単にした。

（４） ドンの信用を上げるための対策は。

(回答)２００７年頃からドンの信用を上げるため、国家的な脱ドル化をすすめている。それから６年経ったが効果はよく、ドル化比率が４２％になった。一方、現地通貨の価値を安定させるために、インフレのコントロール、マクロ経済の安定、ドンの価値の安定に焦点を当てた。そしてドンとドルのバランスを保つようにし人々にドンの貯蓄を促している。

一方人々がドルの預金や借入れを抑制するような政策をとっている。具体的には、外国為替市場の制限やドル取り引きを行う銀行への監督の強化である。法令に違反した場合、外貨の没収といった厳しい処置を下す。

（５） ドルに対する理想的なドンの為替水準とは。

(回答) この問に答えるため、包括的な考えをまず述べたい。

① マクロ経済のバランス②SBV の金融政策の方向③市場における通貨の供給量　である
  ① については経常収支がやや黒字になったことでドンとドルの需供バランスがとれるようになった。
  ② についてはインフレ率を改善しようとしている。物価の上昇率をモニタリングし、指標の精度を上げるように工夫をしている。
  ③ については経済活動の状態に見合った通貨量を確保する。

このように、経済全体の状況でドンドルレート水準が決まるので、ドンドルレート水準は市場に任せている。

（６） 中所得国の罠から脱するためにはどうしたらよいか。

(回答) ２００９年からベトナムは中所得国と分類され、多くの人が「中所得国の罠」について懸念するようになり、実際に２００８年から経済成長が鈍くなった。このような状況に陥った理由はいくつかある。そのうちの一つが世界的な金融危機である。多くの国で景気後退が起こったのだ。そこで、ベトナム政府は他国(既に金融危機を経験した東アジアなど)とは違った方法でこの状況を打破することにした。SBV はこれに沿って経済政策を建て直し、経済成長のモデルを、投資に基づくモデルから、高い生産性、革新、科学技術に基づくモデルに変えたのである。また、経済の立直しと効率性に基づく経済成長モデルを組み合わせたのである。

さらに、経済の立て直しとして 3 つの分野に焦点を当てている。それは、公共投資、金融セクター(銀行セクター)、大企業の 3 つであり、新しい生産方法、新しい輸出市場を探している。これらのことを実行するために、科学技術の革新(資源を利用する上での効率性、生産性、質、国の競争力の向上)をするよう企業を促している。もし成功すれば、輸出の増加、国内消費の促進、中流階級の増加をもたらし国内の経済成長につながる。また、持続可能な経済成長を達成するために、法制度の改正、教育の拡大、人的資本の質を高めるための社会保障の拡充に焦点を当てている。

（７） 克服しなければいけない課題はたくさんあるが、優先順位は何か。

(回答)2010 年から 2015 年までの、最初の 2、3 年間はマクロ経済の安定、社会保障の充実、経済成長の維持、経済の立て直しを目標とする。次の期間は経済成長を確実にし、高い経済成長と社会保障を組み合わせることを目標とする。またインフレ抑制のため、マクロ経済の安定、現地通貨の価値を高める。よって、マクロ経済の状況によって、違った優先順位や方法を設けることはあるが、今のところはインフレの抑制が第一の優先事項である。

（８）その他関連質問

(回答)・ドンの桁が大きすぎて、他国の人にとって不便だった。（今のところデノミを行う予定は無し）

・どのように企業の科学技術の開発を促進するのか。⇒ベトナム政府は科学技術促進のために多くの方針を設けた。特にベトナムへの投資、産業を支援する外国企業には、優遇税制を適用する。最近の事例では、ノキアが携帯電話会社を設立したので、地方政府はノキアがプロジェクトを成功できるように優遇税制を適用した。

・おつりが通貨ではなく日用品であったのはショックだった。このように、小額紙幣がないことはインフレが原因だと思うが、どのように考えているのか。

インフレの結果が、おつりが十分に無いことだとは思わない。投資の効率性が低い、高い経済成長にターゲットを当てている、他国の経済に左右されやすい(資源価格、世界市場な

ど)といった理由からインフレになっている。また、最近市場システムを変え、石油、石炭、水、医療・教育サービスといった商品・サービスにも市場メカニズムを導入したことも原因の一つとなっている。

5. 感想

中央銀行ということで館内は厳かな雰囲気であった。挨拶から質問内容まで全て英語なので緊張し、難しかった。また、自分の担当にも関わらず、質問状を考えるのに苦労したので先輩方のお力を借りた。さらに、中銀の方に直接意見や質問を投げかけることもできず、後悔が残った。帰国してからも、当日の講義内容を録音したものを聞き直し、時間をかけてまとめた。今後は、英語力とともに経済の知識を深め、自分の力にしていこうと思う。自分の未熟さがわかったいい経験だった。

ホーチミンのお墓を訪れました。　　警備体制が厳戒!!!

アオザイガールズ♡♡
自分の好きな色をチョイスしました♪♪

ベトナム女子になりきって
ご機嫌＾＾

ハノイ最終日・・
ティエムさんとの名残惜しい
お別れ・・カムゥ!!!

ハノイから２時間と少し。
きらびやかなホーチミンへ!!
ボンサンアネックスホテルに
到着!!

ホーチミン最初の夕飯!!

はるかさんご機嫌です♡

コラム　ハノイとホーチミン

ハノイとホーチミンの違いは何だろうか。基本的なことから言えば、ハノイは政治都市でホーチミンは経済都市である。やはり商業の発展は後者の方が圧倒的であり、それが都市の雰囲気を異なるものにしている。

ハノイは古き良き情緒漂う都市である。高層ビルもあるが、大部分は低層の住宅であった。住宅の一部を改装したような小規模の店が多い。軒先にはベンチが置かれ、住民たちはそこに腰かけコーヒーを飲む。店の人は英語も通じないことが多いが、絶えず笑顔で接してくれた。街はバイクで溢れ道を渡るのも一苦労だ。ベトナムと聞いて想像する風景が、そこにはあった。

対してホーチミンは発展著しい経済都市である。高層ビルと外資系企業の看板が立ち並ぶ。チェーンのお店と土産物屋が並び、日系のコンビニもよく見かける。この土産物屋が商魂逞しく厄介であった。なまじ上手な日本語を使うものだから、情緒のかけらもない。ホーチミンの魅力はやはり大規模な市場だろう。特に雑貨は種類豊富で安いので、店を周るだけで楽しい。どうやらサイゴン川でのクルーズや戦争博物館などメジャーな観光スポットはホーチミンにあるらしいので、いかにもな観光が楽しみたい方はホーチミンの方が良いだろう。

このように同じベトナムとはいえ、各都市で大きく性格が異なるというのは面白い。両方を訪れることで、南北ベトナムの歴史と文化の違いを感じられるだろう。また、経済発展と伝統保存というジレンマについても考えさせられる。

以上読んでわかる通り、私にとってはハノイの方が魅力的だった。これはベトナム的情緒を求めたからだろう。今回の研修ではホーチミンの魅力を発見するには時間が足りなかった。次回、観光で来る際には、また違った側面を見つけようと思う。

ベトナム調査

六日目

Dream Incubator Vietnam Joint Stock Company

文責　石井大河

1. 訪問日時・場所

9 月 13 日（金）11 時から 12 時

ホーチミン市のオフィスにて

2. 担当者

細野恭平様(執行役員)

田代雅明様(マネジャー)

3. 機関概要

大手企業のコンサルティング、ベンチャー企業のインキュベーション及び自己資本のインベストメント業務を実施している戦略コンサルティングファーム。「未来のソニーやホンダを 100 社作ろう」という企業理念のもと、ボストンコンサルティンググループの日本代表であった堀紘一によって 2000 年に設立された。

4. 講義内容

（1） ベトナム事業について

ベトナム現地企業への投資、日系企業の進出コンサルティング、日越企業間の M&A アドバイザリーなどを行っている。

事例としては、地方政府から受注した海外工場の誘致戦略のプロジェクトなどがある。

ファンドの運用について

ベトナム企業との提携に関心のある日系トップ企業が出資している。日本企業と現地企業の提携を促進し、技術やノウハウを移転する。さらに DI が投資先の中長期戦略の構築を支援する。

事例としては、現地粉ミルク大手企業や医療機器卸の最大手に出資している。

（2） ご自身の経歴について

細野恭平様　東京大学文学部卒業　サンクトペテルブルク大学留学

ミシガン大学　公共政策学修士(SPP)

国際協力銀行を経て DI に参加
田代雅明様　東京工業大学工学部社会工学科卒業
同大学院社会理工学研究科社会工学専攻修了(工学修士)後、DI に参加

5. 質疑応答

・ベトナムでの業務について

（1） 最初の海外展開がベトナムであるのはなぜか？
(回答)これは偶然だった。当時、東南アジアでアミューズメント施設関連の仕事をしていて、ベトナムという国はとても面白い国だと思った。東南アジア各国には既に多くの競合他社が進出していたが、ベトナムならば先行プレイヤーになれるという利点もあった。

（2） 競合他社はどのようになっているのか？
(回答)外資系コンサルティング会社をはじめとして多数の競合が進出している。しかし、彼らの多くは利益を出せていない。DI の業務は実際に経営に関わるなど、他社とは性質が異なり優位性があると考えている。

（3） ベトナムでは現在でも個人商店が大部分を占めているが、どのように対処しているのか？
(回答)ベトナム特有の行動パターンがあるので、それを理解することが大事になる。例えば、ベトナム人の多くはバイクに乗ったまま商品を購入するので、通りに面した小型商店が無くなることはない。また、法律で大型店舗の出店が規制されているため、チェーン展開が難しいといった特殊性もある。
個人商店へのアプローチには①自分たちで商品を届ける②卸売業者を使う、の 2 通りが考えられる。基本的には②の手法が中心で、①のように直接営業をしているのは味の素くらいしかない。彼らは労力と時間をかけてフォーの実演などの営業をしている。ただし、ベトナムでは先進国のような全国流通を一手に引き受ける卸売業者は存在しない。実は道端で適当に歩いているように見える人たちは卸売の営業マンであり、彼らを使って商品を販売する。
こう話すとベトナムのビジネス環境が遅れているように思うかもしれないが、日本も昔はそうだったことを忘れてはいけない。ネスレなどは日本でどうすれば商品が売れるか必死に考えていた。
日本とベトナムの共通点としては卸売が細かいことと、人間関係がビジネスで大きな意味を持つことが挙げられる。

（4） ベトナムのエンターテイメント業界はどのようになっているのか？

（回答）実はベトナムのエンターテイメント業界はあまり発展していない。映画館やゲームセンターがあるくらいだ。カラオケも存在するが、裏で怪しいビジネスをやっていたりする。強いて言えば、若者の間でネットゲームが流行っている。しかし、電子決済ができないので、現金で集金していたりとまだまだ始まったばかりだ。

（5） ベトナムでの困難な点をお聞かせください。
(回答)一番困るのは会計制度が整っていないことだ。財務諸表が無い企業もある。売り上げくらいしかわからず、利益が分からない場合もある。税務申告書ならば提出してくれる場合もあるが、利益は少なく申告していることが多い。こうした問題に対処するため、帳簿を検証していく作業が必要になる。

・ファンドについて

（6） ベトナムでのファンド運用についてお聞かせください
(回答)ベトナムには投資家はたくさんいるが、投資先がないという金余りの状況だ。日本勢では大和証券や日本アジア投資などが進出している。
DI では現在ヌティフードというベトナム乳製品業界 3 位の企業に出資している。ベトナム業界の乳製品業界は現地企業のビナミルクや外資のネスレやダッチレディが強い。他の食品も同じような構造で欧米系が強く弱いプレーヤーは淘汰されていく。投資家としては強いプレーヤーに投資したいので競争が激しくなる。
また、ベトナムで向こうから投資してほしいと言ってくる企業は大体良くない企業なので、そうではない企業から探す必要がある。

（7） 売却先はどのように見つけるのか？
(回答)見つけるというよりも、将来どこが買ってくれるか考えてから投資している。例えば日本企業が興味を持っている企業に投資するなど、投資先には一定の条件を設けている。

（8） 現地採用の人材はどのように選んでいるのか？
(回答)エンジニアや投資関連の業界から採用している。日本語を学んでいる学生の採用も考えたが、語学だけでは仕事はできない。

（9） ご自身のビジネスと国益の関連についてはどのようにお考えか。
国益というレベルかどうかは分からないが、日本企業と共闘していく意識はある。それが日本企業と現地の利益になれば良いと考えている。

・ベトナムの政治的要素のビジネスへの影響について

(10) 社会主義であることに対してどう思うか？

(回答)特に気にしない。強いて言えば、政府の許認可に時間がかかることくらいだ。

(11)南北ベトナムの違いについて

（回答）南北ベトナムを比較すると、南部の方が民間ビジネスが活発なので交渉先企業も多くなっている。対して、北部は国営企業の影響力が強く難しい部分もある。

6. 感想

新興国と言うとインフラ系企業ばかりが取り沙汰されるが、経済発展に伴い内需が拡大するベトナムではサービス産業が発展する段階にあると聞いていたので、彼らをクライアントとするコンサルティング業界の視点からお話が聞けてとても興味深かった。ファンドから出資を行い、出資先に役員を派遣し経営の中長期戦略にまで携わるという業務を、商習慣や法制度の異なる新興国で行うことの困難は計り知れない。今後はベトナムのように中所得国に移行したマーケットでは援助案件は減少していくことは間違いなく、従来のODAを軸とした投資からDIのような産業育成型の投資が増えるのかもしれないと感じた。

ホーチミン市都市鉄道建設プロジェクト

文責　高津柊人

1. 訪問日時・場所

9 月 13 日（金）13 時 30 分から 15 時 50 分

ホーチミン市の事務所、その後建設現場にて視察

2. 担当者

松沢様　後藤様

3. プロジェクト概要

現在、ホーチミン市では 6 つの都市鉄道計画が存在している。本プロジェクトはその中の一号線の建設に関する計画である。一号線は、ホーチミン市の中心であるベンタン市場を起点として、国道一号線に沿って北東約 20ｋｍに位置する Soui Tien までを結ぶ都市郊外鉄道線である。一号線は地下及び高架を通るよう計画されており、現在建設中で 2020 年に開通予定。

4. 講義内容

（1） プロジェクト概要

一号線は地下と高架の複合鉄道で、始点のベンタン駅から三駅目のバソン駅までの 2.2 ㎞は地下鉄、バソン駅から終点までの 17.5 ㎞は高架鉄道となっている。沿線には既成市街地（ベンタン・オペラハウス周辺）や新高密度商業地（バソン・タンカン地区）、新学園地区やハイテクパーク、郊外新住居や商業開発地区などポテンシャルの高い地区も存在する。

一号線は計画されている六路線で一番進捗が早く、唯一工事段階まで進んでいる。一号線は円借款（STEP…入札関係者が日本とベトナムの企業に限定かつ 30%以上の物品サービスが日本から調達する条件付きの低金利・長期返済ローン）で事業が実施され、住友商事や日立製作所など日本企業がプロジェクトを受注している。一号線プロジェクトにかかる総額は約 2400 億円であり、2000 億円弱は日本からの借り入れという巨大案件である。

（2） プロジェクトの特長

・ベトナムで初の都市鉄道案件（電気・複線）

・都市鉄道案件で初めて STEP が適用されたケース

・ベトナムで過去最大の円借款案件

・コンサルタント契約には大阪市交通局の協力による鉄道システムオペレーションの指導も含まれ、開通後 5 年間は助言などを行う。さらに鉄道システムのコンダクターである日立製作所が開業五年間の鉄道システムのメンテナンスも行う。

・JICA が技術協力プログラムを行うなどホーチミン市都市鉄道事業会社の設立支援も並行して実施される。

・鉄道敷設に伴い、必要とされるインフラ（駅、事業会社）や他交通網との連結（駅前広場バスターミナル、道路）の関連調査も実施

（３） プロジェクトの進捗

・政府の補償金支払いが進まず土地収用が終了していない⇒遅延の要因に

・地下土木（CP1）…五社の入札辞退後、三社が事前審査を通過

・高架土木（CP2）…住友商事が応札し 2012 年 8 月にから工事

・鉄道システム（CP3）…日立・日立プラントが応札、現在 JICA に対して契約書同意申請中

5. 質疑応答

（１） 日本の鉄道システムを導入するメリットとは何か？

（回答）ベトナムは日本の鉄道システムを導入することで、STEP（日本製品購入条件付低金利ローン）により 10 年措置 40 年償還の低金利融資を日本から受けることができるメリットがある。

日本の鉄道システムは他国の鉄道システムとの顕著な差はない。また社会的背景や輸送ニーズが異なるので日本の都市鉄道をそのまま導入することはできない。

（２） ベトナムが複数の国と提携を結ぶメリットは？　またデメリットを克服する工夫は何か？

（回答）複数の国と提携を結ぶことにより競争的環境で有利な融資や技術移転の条件を引き出すことができる。

複数の国からの技術導入によって生じるデメリットをベトナム側は明確に認識できておらず、未成熟な段階ではないかと思われる。ある程度の経験を積んで初めてデメリットを認識し、克服する努力が始まった。日本はデメリット克服のための技術基準整備を支援しているがベトナム側はその段階まで至っていない。

（３） 日本の鉄道システムが他国の鉄道と比べて優位・劣位な点とは何か？

（回答）一見優位と思われる点は、実は欠点とも考えられる。例えば東京の都市鉄道は黒字だが、一方で高い運賃や旅客サービスを犠牲にしているなど欠点も存在する。

対してヨーロッパの都市鉄道は赤字経営だが公的資金注入により低運賃かつ質の高い旅客サービスを実現している。メリットとデメリットは表裏一体であるといえる。
省エネ・運行の正確さ・清潔さは日本の鉄道文化として発信できる。

（４） 都市鉄道はバイクの代替交通手段として考えられているが、鉄道と縁のない人々がスムーズに鉄道利用に移行するための工夫が必要ではないか？

（回答）ベトナム人にとってバイクは生活の一部であり、また交通渋滞も事故も自動車ほど深刻とは言えない。バイクから鉄道への移行は簡単には進まないであろう。
例え鉄道が開通しても、駅から目的地への公的交通機関が整備されておらず、さらに徒歩での移動は熱帯のため苦痛を伴い、バイクに代わる手段が見いだせない。

（５） Suica のような IC 技術の改札機への利用は検討しているか？　IC カードはベトナム全土で一本化されるのか？

（回答）1 号線は IC カードによる自動出改札（AFC）を利用する。
IC カードは大きく分類すると Type A,B,C の三種類があり、日本は Suica 等と同じ分類である Type C（価格は高いがレスポンスが早い）を推奨しているがヨーロッパ勢の Type B（価格が安いがレスポンスが遅い）の売り込みも活発に行われている。

6. 感想

●建設現場見学

事務所での講義・質疑応答を終えた後、JICA ホーチミン駐在員の豊田様の案内のもと高架部分の工事現場を見学させていただいた。工事現場では日本人も働いているが、ベトナム人も多く働いていた。ベトナム人の方は見学が来るため勝手に休んでいたそう。日本人とベトナム人の労働に対する価値観の違いや文化の違いに遭遇することは多いようで、安全面や働き方に関して指導することは多いとのこと。見学段階では高架の基礎を建設しており地下深くまで掘ってある状態であった。

●考えたこと

事務所にてお話を聞かせていただいた後ふと感じたのは、鉄道が本当にホーチミン市民のニーズに応えて建設されているのか？という疑問であった。鉄道を開通させても肝心のホーチミン市民が利用するか分からないのではないか、と感じた。現状、ホーチミン市の交通は麻痺しているとはいえない。発展途上国や中所得国に対する先進国のインフラ建設支援は一概にその国のためになっているとは言えないのではないだろうか。

ただし従来のようにバイクを使い続けることにも環境問題や都市化の発展・人口増加などにより限界が来るであろう。今は自動車の利用が課税や中古車の輸入規制によ

り抑制されているが、やがて自動車が交通のメインになる時代を予測して都市鉄道が建設されているのだろう。現在はあまり必要がないが将来は必要であるとも言える。将来を見据えた上で提案しているなら良いのだが…。確かにバンコクの都市鉄道も最初は利用者が伸び悩んだが黒字になるほど利用者が増えているという事実もある。

最後に受け入れてくださった方々には貴重なお話を聞かせて頂き、心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

三菱東京 UFJ 銀行

文責　経済学部　4 年　齋藤　玄

1. 訪問日時・場所

9 月 13 日（金）16 時から 17 時

ホーチミン市の三菱東京 UFJ 銀行ホーチミン支店にて

2. 担当者

ホーチミン支店　支店長　山下 眞毅様

ホーチミン支店　支店長代理　幕内 茂雄様

3. 機関概要

三菱 UFJ フィナンシャル・グループの都市銀行である。その規模の大きさから三菱東京 UFJ 銀行は、三井住友銀行、みずほ銀行と並んでメガバンクとも呼ばれる。創業は 1919 年 8 月 15 日。主な業務は個人への融資、企業への融資、為替業務など。

支店数は国内が 766 店舗、海外が 74 店舗(2013 年 3 月)。ベトナムのホーチミン支店は海外支店の中の一つである。1920 年に旧東京銀行がサイゴンに支店を構えて以来、撤退と再進出を経て 90 年の歴史を有する伝統ある支店である。

ベトナムにはハノイ支店も存在する。

講義内容

事業内容について

ベトナムのホーチミン支店では、企業取引をターゲットにした事業戦略をとっている。100%コーポレートに対する融資である。また、預金や貸出、外国為替が収益構造の中心となっている。今後はベトナムの現地銀行との提携を通じてリテールの分野への業務拡大を図り、ベトナムに進出している外資系の銀行に対抗していく。

ベトナムの歴史と地理などのお話もしてくださったので、要点を記す。

地理について

北部　北越は中国に支配されてきた歴史があるため、中国の影響が強い

中部　チャンパー族がすんでいた地域

南部　クメール王国が存在

北は湿度が高く、寒暖の差がある。よって、稲作の収穫の時期が決まっている。
よって住んでいる住民の気質は計画的に行動する傾向にある。
南は、いつでも稲作が可能であるため、年に三回は収穫ができる。基本的には計画する必要がないため、住んでいる人は個人主義的な気質がある。

歴史について
ハイフォン市にはバクダン川という川があり、1286 年に元軍がベトナムに三度目の侵攻を行った際に、チャン・フン・ダオという将軍が撃退した。この勝利により、日本の三回目の元寇の計画がなくなった。このような意外なところでもベトナムと日本の歴史はつながっているのである。

現在でも日本とベトナムの結びつきは強く、対外債務などの面から考えると、日本の影響力は強い。ベトナムの投資環境が良くなれば、さらに経済的な結びつきは強くなる。

4. 質疑応答

（1） 三菱東京 UFJ 銀行様がベトナムで行っている事業の概略と、山下様が携わられている業務について

（回答）ベトナムで現在行っている事業は 100%企業取引である。口座数について考えると、日本のものと日本以外のものではその割合はジャパニーズ：ノンジャパニーズ＝8：2 であるが、一方で残高について考えるとその割合は、ジャパニーズ：ノンジャパニーズ＝5：5 となり、口座数に対してノンジャパニーズの残高の影響が大きい。山下様は、支店長として、人事や IT、コストシステムのメンテナンスや開発などすべてを担当している。

（2） 収益構造について、何が一番大きな割合を占めるのか?

（回答）収益構造は、貸出、預金、外国為替の三つが中心となっている。

（3） なぜベトナムに進出したのか?他のアセアンとの違いは何か?

（回答）三菱東京銀行の源流の一つに東京銀行がある。東京銀行は 1920 年にはすでにサイゴン（現在のホーチミン）に出店しており、銀行の統合前の進出、撤退回数も含めると第二次世界大戦やベトナム戦争などで 3 回撤退したものの、今回 4 回目の進出を果たしている。海外支店としてサイゴンは、ビルマのラングーン、フィリピンのマニラと並んで東南アジアの中核となる支店であった。進出する目的としては、顧客ありきの銀行進出、すなわち日本企業がベトナムに積極的に進出するのでそれに合わせて進出を行っている。

他のアセアンの国との違いは、賃金水準は経済の発展水準に比例しているため、他の国と比べて労働賃金が低く労働集約型経済となっている。また、他の国と比べて法律を守ろうとする意識は低い。

（4） 他の 2 つの邦銀と比較して三菱東京 UFJ 銀行がもつ独自な強みは何か?

（回答）他の 2 行と比べるとノンジャパニーズの層に強く、意識しているライバルは日本の 2 つの銀行というよりは ANZ 銀行、シティバンクや HSBC などといった外資系銀行である。このような外資系銀行は IT の発展にも敏感で、最新の技術を取り入れるので、こちらもそれに負けない形で、IT システムの発展にも務めることが重要となってくる。

（5） ベトナムでの業務について、外資系銀行と比較してビジネスモデルの違いは何か?

（回答）外資系銀行は現地法人であるが、三菱東京 UFJ 銀行は支店である。将来的には現地法人にしたい。外資系銀行と比べると個人マーケットが弱いので、個人マーケットに打って出たいと考えている。

（6） なぜヴィエティンバンクと提携したのか?

（回答）日本の銀行は企業取引が中心で、地場のリテール部門には、現地の財務諸表がいい加減であるなどの理由で進出できていない。しかし、企業取引は収益プールの大きさのうちのあくまでも 10%から 20%に過ぎず、残りを占めるリテールに進出することが不可欠であり、ヴィエティン銀行の地場の力を使って協力することが必要だったから。

（7） 提携の経緯や交渉の詳細について

（回答）三菱東京 UFJ 銀行はもともと他の銀行と提携交渉を行っていたが、ディールブレイクして、他の銀行との提携を模索していた。折しもヴィエティンバンクも他の外資系銀行との提携が破綻した。ベトナムでは一つの銀行につき一つの外国銀行しか提携できないという銀行法があり、提携できる銀行に限りがある中で、以上のようなタイミングも重なってヴィエティンバンクと提携することとなった。

（8） 現地顧客の獲得について、現地銀行との提携はどのような効果があるのか?

（回答）ヴィエティンバンクの地場の力を使った現地顧客の獲得効果が見込まれる。

（9） ベトナムの業務における困難はどのようなものか?

（回答）銀行でも法律は守らない、商習慣として買った代金は払わない、借りたお金を返さないなどの商習慣が存在するなど、コンプライアンスといったものがないのが大変。また、外貨準備高が低く為替の変化が大きかったりするためマクロ経済が非常に弱いことも業務を行う点では悩ましい点である。ベトナム国民はドンを信用しておらず、タンス預金が主流であるため、なかなか銀行に預金してくれないことも大変な点である。ドン金利が 20~30%と高く、ドル金利を適用した取引を禁止されているため、高金利で取引しなければいけない点も大変な点である。

5. 感想

銀行の業務が個人への融資や預金業務、企業への融資業務が中心であるということは知っていたが、現在の段階では企業取引の分野にしか進出できておらず、まだ、リテールの分野に進出できていないという点は意外であった。銀行や証券が海外で経営基盤を固める際にはリテール部門から固めていくものだと考えていた私にとっての常識が覆された。また、お話を聞く中で、財務諸表がいい加減であったり、現地の企業がたとえ銀行であっても法律を遵守しなかったり、代金を支払わなかったり借りたお金を返さなかったりなどこちらの常識では考えられないビジネス環境がベトナムには存在していることが分かったことは今回のお話を聞いた中での収穫であった。また、ベトナムと日本の歴史の関係性やベトナムの歴史についても教えていただき、海外でビジネスをする際には、現地の歴史や、その国と日本の外交関係についての歴史を理解しておくことはとても重要であることを改めて感じた。

如水会サイゴン支部の方々との懇親会

ベトナム研修も残すところ 1 日となった折に、如水会サイゴン支部の皆さんとの食事会に参加させて頂いた。美しい夜景が見られる SH Garden というベトナム料理のレストランで、旅を締めくくるに相応しい素敵な場所だった。如水会からは、日系企業のベトナムオフィスに勤めている方々が 10 名ほどいらっしゃった。人生の大先輩方と一対一でお話をさせて頂くという貴重な機会だった。

自己紹介と乾杯を済ませたのち、各々お話をさせて頂いた。話は尽きることが無く、とても楽しく刺激的な時間だった。

元は商社にお勤めで現在はグループ企業であるコンビニのベトナム事業に携わっていらっしゃる OB の方から面白いお話を聞くことが出来た。ベトナムでは未だ発展途上の小売業界ならではの苦労があるそうだ。例えば、日本のようにコンビニの外観がきれいすぎると、ベトナムの人はお店に入ることを躊躇してしまうそうだ。さらに、屋台文化が根強いため、買ったものをその場で食べるイートインを設けると大人気になったそうだ。実は、今回の企業訪問の候補としてそのコンビニが挙がっていたのだが、2013 年 6 月にベトナムでの合弁会社がタイ企業に買収されるという事件があったため断念したという経緯があった。ベトナムで新会社を作っている話を含め、事件の詳細を聞くことができ興味深かった。次回のベトナム研修ではぜひ訪問してみて欲しいと思う。

また、銀行にお勤めの OB の方にはご自身の経歴についてお話して頂いた。銀行員としての仕事の醍醐味、タイへの留学やベトナムでの業務など大変刺激になるお話だった。私が就職活動中であることを話すと、それについてアドバイスもしてくださった。海外で働きたいと思っているので、実際に海外勤務をされている方の話を聞くと具体的なイメージをつかめるので非常に参考になった。

一橋大学の近況をお話して皆さんが懐かしんでいる様子を見て、自分が将来 OB として話をする姿を想像した。今回お会いした OB の方々は知的で優秀な方ばかりだった。私も立派で魅力的な人間になれるように精進しようと思った。

一橋大学の如水会の繋がりはすごいとよく言われているが、今回改めてそれを実感した。世界各地に散らばった仲間たちがこうして集まれるとは何とも頼もしい限りだと思う。

お忙しい中集まって頂いた如水会サイゴン支部の皆さんにはとても感謝しています。本当にありがとうございました。

将来のベトナムの交通に革新をもたらすインフラ整備の現場!!

ホーチミン散策中♪　つい気になって SONY ショップを覗きます

ホーチミン・ベトナム最後の夜。
如水会ホーチミン支部の方々との懇親会。
ネオンで輝くホーチミンの街を一望!!!

コラム　おつりとレストラン

経済学部　4 年　齋藤　玄

ベトナムでは、日本円で 2500～5000 円くらい払えば、高級レストランでおいしい食事をとることができる。今回食事をとったレストランでは、どこでもフォーや空芯菜の炒め物などといったベトナム料理が出てきて、どれも大変美味であった。その中でも特に印象に残っているレストランは、ホーチミンで如水会のサイゴン支部の方との食事会の時に使用したレストランである。

これは、そのレストランで眺めることのできた夜景である。このような夜景を見ながら食事をとることができ、幸せな時間であった。このレストランは夜景が他のレストランと比べても格別に美しいことに加えて、会場に向かうまでのエレベーターが、籠になっていて風流であったので特別に取り上げた。下の写真のエレベーターが会場までの移動に使われた。エレベーターというと、通常は外が全く見えない構造になっているものが主流であるが、このエレベーターは下も横もよく見える構造になっていて、高所恐怖症の私には少し怖い構造ではあったが、周りの風景をよく眺めることができる点では、今までに乗ったエレベーターの中では最も楽しかったかもしれない。

しかし、ベトナムで最高級のレストランといっても、会計処理などは結構ずさんであった。ベトナムではインフレが進んでいて、1000 ドン札や 2000 ドン札が大変に不足している状況にある。そのために二日目に訪れたレストランでは 1000 ドン札や 2000 ドン札が不足しており、ガイドの方が、おつりのためのお金を両替しなければならない事態に陥った。
レストラン自体はそこまで高くない値段で素晴らしいレベルの料理を楽しむことはできるが、会計の際には、1000 ドン札や 2000 ドン札が不足しているためトラブルが起こる可能性があることは、現地の食事処を利用する際には注意するべきである。

ベトナム調査

七日目

ホーチミン市内視察レポート

①歴史博物館

ベトナムの歴史を紀元前からさかのぼり、土器や美術品などが展示してある博物館。

②永原寺

ベトナムのお寺。豪華な内装とお供え物が目についた。

③ベンタイン市場

ベトナムの市場。観光地化しており値引き交渉の力が試される。

④国営百貨店

国営のスーパー。市場で値切るよりだいたい安い。

大きな傘でお出迎え!!

大河さん、キメキメです♡

レストランの裏路地で＾＾

ベトナム人、ミンさん!!!!?????

残り少ない　ベトナム料理・・

最後の晩餐はフランス料理!!
最後までフレッシュジュースを楽しみました♪

ガイドさんと名残惜しくもお別れし、ホーチミンを飛び立ちます。

充実した７泊８日を経て、皆さん少しお疲れモード・・

おやすみなさい zzz.....

コラム　ベトナムでのお買い物諸注意

ベトナムで現地の物をお買い物するとしたら、以下の３パターンの店がある。

①　お土産屋さん
②　市場
③　スーパーマーケット

さあ、この項目を聞いて、どの順番で安く物が売っているか、貴方は予測できるだろうか。当初私は、安い順に②③①だと予想していた。「市場」という響きはなんだか安く聞こえるし、①のお土産屋さんが最も観光客向けであって高いのだろう、と。

しかし実際は違った。正解は、(物によって違いはあるだろうが、感覚としては)③①②である。つまりスーパーマーケットが一番安く、次がお土産屋さん、なんと一番高いのが市場である。

勿論留意しておかねばならない点は「値切れるかどうか」である。スーパーマーケットは値切れない。お土産屋さんは 30%くらいの確立で値切れる。市場はほぼ 100%必ず値切れる。つまり、市場は基本的に、値切られることを前提として価格設定がなされている。だから元値がとても高い。

しかし、だ。市場で物を「安く」買うためには、並大抵の値切りではダメなのだ。少なくとも、当初言われた額の２～３分の１に値切らないとならない。これにはかなりの精神力が必要である。値切り初心者は市場での買い物は避けた方が良い。市場の雰囲気自体は楽しいが、金銭面では所謂「ぼったくり」をされてしまうだろう。

ちなみに本研修で最も「ぼったくり」されてしまった商品を発表したい。下写真の「ベトナムコーヒーT シャツ」である。私は市場で最初にこれを見つけ、一目惚れして買ってしまった。最初に言われた金額は 2100 円。私も頑張って値切り、結果 1300 円で買った。しかし次に行ったお土産屋さんでは 500 円で売っている所に遭遇。そして極めつけはその後行ったスーパーマーケットで、300 円で売っていた。つまり、1300 円あれば、4 着買えたはずだった。絶望しかなかった。
この T シャツの例は、きれいに③①②となった例である。

個人的には、スーパーマーケット→お土産やさん→市場の順番で、全て回ってみることを勧めたい。市場が高いとは言え、店の種類によって特徴があることはやはり興味深いので、全て見て欲しい。

例えば、スーパーマーケットは、盗難防止の為か、財布以外の手荷物はコインロッカーに預けないと食材コーナーに入れない。お土産屋さんは小物を買うためには必須の店だが、多くの店で、日本語が話せる店員がいたり、日本円が使えたりすることが面白い。日本人

客の多さが伺えると共に、ベトナム人がいかにドンを使いたがらないか(信用していないか)が伺える。彼らは、仕方なく円で取引しているというよりは、円をほしがっている印象が強かった。また、市場は沢山の店が一箇所に集ってお祭りのような雰囲気で楽しい。値切り交渉も、精神力は使うが、なかなかに楽しい経験だ。

海外での買い物は、常に「さっき買った物がこの店でもっと安く売っていたら嫌だな」という恐怖と隣り合わせである。しかし、ショッピングこそ、現地の人と観光客の一番の触れ合いの場。値切ったり、髪を結ってもらったり、一緒にアオザイを選んだり。そして「ドンドン」ドンを使う（ガイドのティムさんの十八番）ことは、ベトナム経済にも少し貢献できる。コミュニケーションしつつ、物欲を満たしつつ、現地にお金を落とすこと、それはまさに身近に出来るちょっとした Win-win な関係である。

コラム　アンケート～ベトナムでの思い出～

文責　新井小百合

その１　もう一度行きたいレストランは？

１位　SH Garden

（理由）レストランから見えた夜景がベトナムの発展を象徴していたから。（Ｉさん　男性）エレベーターなどの演出がすごかった。（Ｓさん　男性）特にお豆腐料理とチェとコーヒーがおいしかった。（自分）

（他）Cordon Blue…最後に食べフレンチ（Ｎさん　女性）財政大学とのビュッフエ…まだ食べきれていない。（Ｓさん　女性）　Yeebo（飲茶）…久々の中華に感動。（Ｒ・Ｍさん　女性）全部おいしくて選べないという声も！

その２　研修中出会った方で特に印象に残っている方は？

１位　ティエムさん（ガイド）

（理由）一緒にいた時間が長くて面白い話がたくさん聞けたから。（Ｒ・Ｍさん　女性）大好き！（Ｍ・Ｍさん　女性）　ティエムさんの電話番号の書いた紙を鞄からまだはずせていない程愛してます。（Ｓさん　女性）愛くるしい方でした。（自分）

（他）ＵＦＪの山下様と幕内様…謙虚さとアグレッシブさを兼ね備えた理想のビジネスマン！（Ｎさん　女性）　財政大学の学生…仲良くなってベトナムの市民の方の話を聞けた（Ｉさん　男性）

ティエムさんは、私がバスの中に iphone を忘れたときも助けて下さって…。感謝です。

その３　ベトナムで一番驚いたことは？

- 横断歩道で素手で車を止めたおばあちゃん、ただただ強い（Ｎさん　女性）
- フルーツジュースの安さ！（Ｔさん　男性）
- 日本では見られないバイクの多さと乗り方（Ｒ・Ｍさん　女性）
- 日本ブランドの強さとそれを奪いにくる中韓企業…街中の看板と製品を見て（Ｉさん　男性）
- ベトナム女子のスタイルの良さ（Ｍ・Ｍさん　女性）
- 親日の雰囲気が強いこと…二万ドンに書かれた「日本橋」など。のあんなに親日とは予想していなかった。（Ｓさん　女性）
- 通貨の信用があまりないこと…日本では決済が１円単位で行われるのにベトナムでは１０００ドンでも価値が期待されていなかった。（Ｓさん　男性）
- バイクの数に圧倒…。（自分）
  最初は本当にバイクに引かれるのではないかと思いました。怖かったです。しかし、慣れてくると渡り方のコツがつかめました。

今回の研修を漢字一文字で表すと？

- **実**…実ある研修でした。（Ｎさん　女性）
- **愉**…愉快で楽しい一週間♪♪（Ｔさん　男性）
- **知 or 見**…実際に見て知ることの大切さを実感したから。（Ｒ・Ｍさん　女性）
- **新**…初に新興国で新しいことを見聞きできたから。（Ｉさん　男性）
- **学**…たくさんのことを学べたのはもちろんこれからの学びの方針が立てられたから。（Ｍ・Ｍさん　女性）
- **染**…文化、歴史、経済、人々の繋がりを身に染みて感じることができたから。（Ｓさん　女性）
- **情**…情緒あふれるベトナムで、日本では得られない情報を得ることができたから。また財政大学の学生やガイドさんとの友情がいつまでも続きますように。（Ｓさん　男性）
- **成**…大切なものを得て成長できた気がするから。（自分）

アンケートはこれで終わりです！皆さんご協力ありがとうございました！

【コラム　ホテル】

ハノイではギャラクシーホテル、ホーチミンではボンサンアネックスホテルというホテルに滞在しました。ガイドブックではビジネスホテルのくくりだったので、そこまでのレベルの高さを想像していなかったのですが、着いてみるとその広さ、心地よさに驚かされました。とりわけホーチミンのボンサンアネックスホテルは二人用の部屋でベッドが 4 つ(笑)　一つの部屋が扉を隔て二部屋に分かれていたので、ほとんど個室状態でした。客層を見てみると、そのほとんどが日本人観光客で、エレベーターや食堂で交わされていた言語のほとんどは日本語。さらに驚くことに、テレビをつけてみると日本のテレビ番組が(笑)朝食は全日ともにホテルでとりましたが、洋食よりのものをバイキング形式で楽しみました。(頼めばその場でフォーを作ってくれるサービスがあり、懲りずに毎回楽しんでいる人も笑)　何はともあれ、7 泊８日の長旅を快適なものにしてくれる、サービスの整ったホテルでした。写真は左がハノイのギャラクシーホテル、右がホーチミンのボンサンアネックスホテルです。

第三部

終わりに

ベトナム短期海外調査

経済学部１年　新井小百合

1. 出発前

大学生になったら海外に行って色々見てみたいなと漠然とした気持ちでいた 4 月。そんなときにベトナム短期海外研修の存在を知った。もともと途上国の開発には興味があり、初心者にはちょうどいい一週間という期間で行われるので早速応募した。しかし、実際準備してみると思った以上に大変だった。私が担当する中央銀行の質問は中々思いつかないし、財政大学との討論会へのプレゼンの資料を集めるのにも苦労した。とりあえず、プレゼンのテーマである農業に関する本や資料をあさり、まとめる日々。そして本番が近づくにつれ、英語力も経済の知識もなくて大丈夫だろうかと不安になっていった。

2. 研修中

いよいよ本番になった。乗り切るぞと心の中で思っていた矢先、空港で３時間程待たされる。さい先悪いな、大丈夫かと再び不安になって飛行機に乗る。約五時間後、無事空港についてハノイに降り立ったとき、何とも言えない大陸の空気が体を包んだ。しかも目の前には韓国企業の大きな看板。自分が日本にいないことを認識した瞬間だった。

その後は目まぐるしく日数が過ぎていき、内容を理解するのに必死だった。見るもの、聞くもの、味わうもの全てが新鮮だった。JICA では京都大学の学生の方にお会いし、三菱商事では商社の実態を理解することができ、都市鉄道ではベトナムが直面する鉄道事情の困難さがうかがえた。訪問先でお話しをして下さった方は皆さん目が輝いていて、日本を背負って第一線で活躍しているのだなとつくづく思った。特に JBIC の方の日本人としての忸怩たる思いという言葉は印象に残っている。というのも、他国の企業の存在感がどんどん高まっているからだ。JBIC の方の言葉や姿には、日本人としての誇りが感じられた。

また、財政大学の討論会では、学生の皆さんの英語に驚いた。私の英語とは比べものにならない程上手で、しかもフレンドリーだった。プレゼンの準備もきちんとしていてわかりやすかった。日本に帰ったら早速見習わなければと反省したものである。しかし、財政大学での驚きはこれだけではない。夕食のレストランがとても豪華なのだ。ここまで待遇してくれるなんて、と嬉しくなってたくさん食べてしまった。

食事と言えば、ベトナムではフルーツとコーヒーが特においしかった。日本のもの

とは味の種類が違う。一口、口にしただけで全体に広がるのだ。コーヒーのあの香ばしさと濃いめの味はくせになる。

3. 帰国後

長いようで短い一週間であった。しかし、得たものは確実にあり、わずかかもしれないが成長できたと思う。ここでは主に３つのことを説明したい。

①韓国企業の勢力を目の当りにした。新聞やニュースでもとから耳にしていたが、これ程だとは思わなかった。町を歩けば、韓国企業の大きな高層ビルが立ち並び、ホテルにつけば韓国製のテレビが置いてある。このまま安穏としていては、日本は世界からおいて行かれると思った。世界の声に素早くこたえ柔軟に対応していかないと、太刀打ちできないのだ。

②開発について考えさせられた。ハノイにいた夜、メンバーの皆とスムージー片手に話したことでもあるのだが、開発という名で現地の文化を壊すことになりはしないか。実際、都市鉄道の方がおっしゃっていたが、鉄道はベトナムで必要なのか。先進国の文化やシステムを持ち込むことは、先進国側の自己満足に終わってはいないか。そんなことを考えさせられたのだ。研修に参加する前は思ってもいなかったことがこれからの課題として見つかった。

③世界は広いということ。ありきたりな言葉だが、本当にこの一言に尽きる。一歩海外に踏み出すと、自分がいかに小さな存在だか思い知らされる。自分が今まで経験し、悩んでいたものがちっぽけに思えるので自信を無くしてしまう。しかし、そこからまた積み上げればいい。また、やってみればいい。ちょっとくらい大回りしたって、必ずしも直線コースでなくたっていい。とにかく常に挑戦して自分を高めることが必要なのだと痛感した。

今だから言えることだが、ゼミに参加する前犬飼さんに不安を打ち明けたこともあった。しかし今は研修に参加してとてもよかったと思っている。プレゼンの出来や、訪問先の理解など、全て自分の思うように成し遂げたとは言い難いが、自分の未熟さがわかり、これからの課題が見つかった。

紙面ではありますが、本研修に携わった方々にお礼を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

ベトナムで垣間見た新興国の勢い

経済学部 4 年　石井大河

1. 感じたこと

個人レポートを書くにあたって、私がこのプログラムに参加した理由を明確にしておきたい。１つ目は、日本との関係性において政治的にも経済的にも重要性が高まるアジアの新興国の現場を知りたかったからだ。私は一年間のカナダ留学で先進国の成熟した環境を見てきたので、次は勢いある新興国を見たいと考えていた。このプログラムは単なる旅行と異なり、政府機関の方々や現地の学生の生の声を聞くことが出来るので、ベトナムという国の現場を理解するのに適していると考えた。２つ目は、新興国で奮闘する日本企業とそこで働く日本人の方々の、失敗や苦労も含めた実際の部分を知りたかったからだ。「海外で働きたい」と口で言うのは簡単だが、実際の現場を知らずに言っているのでは単なる学生の戯言である。かくいう私も就職活動を控えているため、自分の将来像を模索するにあたり、より現実感を持った思考の材料が欲しかった。このプログラムでは如水会の皆様のご協力もあり、現地で働く方々のお話を聞く機会に恵まれているので、上記の事柄を考えるのに役立つと考えた。

・ベトナムの政治について

訪問先でお話を聞く際に社会主義国家の直面する問題を感じた。共産党独裁であるため政策の運営は不透明なようだ。ビジネスへの影響も大きく、政府の許認可は外国企業が進出する際の大きな障害だそうだ。個人的に気になったのは、政府機関の人々の計画が極めて社会主義的であった点だ。産業の高度化や人材育成について施策を尋ねた際に、全て政府主導で機関を設置すると回答していたのが印象に残っている。

・ベトナムの経済について

予想以上に急速に発展していた。あれほど多くの高層ビルが建築されているのは見たことが無い。中韓企業の投資の勢いには目を見張った。ただ、ベトナム経済は急速なインフレや人口ボーナスの終了などもあり、成長は鈍化している。個人的には 2015 年に予定されている ASEAN 経済統合がベトナム経済に与える影響に注目したい。

・ベトナムでのビジネスについて

冒頭にも書いた通り、やはり現場で働く方々の話を聞くことは非常に有意義だった。まず、インフラ関連のビジネスの規模と社会的意義の大きさを再認識することができた。私は援助の側面が強いビジネスには懐疑的なのだが、少し考えを改めようと思った。また、銀行やコンサルティングといった第三次産業も新興国に市場を見出す局面に入っていることを感じた。私は今回の研修で企業訪問を担当していたのだが、前年の研修とは毛色の違う企業を意図的に選択してみた。具体的には、訪問先がインフラ・政府系に偏らないように配慮した。経済成長を遂げ内需の拡大する新興国で、日本が

誇る質の高いサービスが戦えないはずはないと考えており、その現状を知りたかったからだ。未だ課題を抱えてはいるが、訪問を通じてその可能性を改めて感じた。

チャイナプラスワンとして日系企業の進出が相次ぐベトナムであるが、制度や慣習で多くの困難があるとのことだった。現地特有の商習慣のお話などは、日経新聞を読んでいるだけでは絶対に分からない興味深いものだった。

・日越関係について

驚くほど良好な関係にあると感じた。住民が日本に対して良い感情を持っているのは、ひとえに日本が長年にわたり行ってきた援助と日系企業の活躍の賜物だろう。昨今の報道で「日本はアジアの嫌われ者」との印象を刷り込まれている我々であるが、それは一面的な見方に過ぎないことは、ベトナムという国を見れば一目瞭然であった。両国の関係が維持されることを願うとともに、アジア地域の種々の問題についても連携が深まることを期待している。

2. これから

正直申し上げれば、4 か月の事前準備と一週間の現地訪問で何か具体的な成果があったわけではない。しかし、このプログラムの成果はそのように短期的に測れるものではないと思う。このプログラムを通じて見聞きした事柄は、我々個人の目指す将来像や国のあるべき姿といった長期的な視野に、間違いなく影響を与えたと考えている。

また、このプログラムの利点として、学年の異なる多様な学生が参加していることが挙げられる。先輩の優秀さには驚き後輩の新鮮な視点には刺激される日々であった。集団で一つの目標に向かうことは困難を伴うことを再認識した。多くの反省点を学びに昇華し次に生かしていきたい。

最後に、このような有意義なプログラムを提供してくださった一橋大学、サポートして頂いた関係者の皆様にはこの場で心からお礼を申し上げさせていただきたい。本当にありがとうございました。

一週間で感じたこと

経済学部　4 年　齋藤　玄

1.　今回この研修に参加した動機

日本はバブル崩壊以降、1990 年代以降体感的に基本的には経済が停滞している状態であるため、1990 年代に生まれた私は経済的に成長している状態というものを肌で感じたことがなかった。予てから、ベトナムは GDP 成長率も毎年 5～6%と高く、鉄道や発電所、水道などインフラ整備が積極的に行われているという事実は経済学部の講義などを通じて知っていた。折しも、一橋大学でベトナム短期海外調査というものが行われることを知り、実際にこれから経済的に発達していく様子を見て、社会人になった時にどのように日本の経済発展に自分が貢献することができるかということを考えるいい機会であると考えて、今回の研修に参加した。

また、今年は日越国交樹立 40 周年という節目の年であり、ベトナムの人から日本はどのように映っているのかを知り、今後中国がより台頭することが予測できる国際情勢の中で、今後日本とベトナムはどのような関係を築いていったらよいのかということも考えることも今回の研修に参加する動機となった。

2.　実際に参加して感じたこと

今回の短期海外調査を通じて、企業訪問や政府機関の訪問、ハノイ財政大学の学生との交流といった調査のプログラム自体から多くのことを学び感じたが、それ以外にも滞在していたハノイやホーチミンの街中の散策などを通じても感じることが多く存在した。

・企業訪問や政府機関の訪問、ハノイ財政大学の学生との交流を通じて感じたこと

今回、企業については、銀行や商社、コンサルティング会社といった様々な業種の会社に訪問させていただいたが、お話を伺う中で、日本と商習慣が全く異なるベトナムで、しかも会計や金融など企業が活動していく上で必要な制度の環境が未発達で問題を多々抱えているベトナムで、いちからビジネスを起こしていくということはとてつもない苦労を伴うが、そのような状況下でも企業に勤める皆様は強い信念をもって業務にやりがいを感じて仕事をしているということを、言葉の端々から感じられた。

政府機関については、JICA やベトナム中央銀行、ベトナム計画投資庁などに訪問させていただいたが、いずれの機関も明確なミッションをもって存在している組織であり、実際にそのミッションを達成するために具体的にどのようなことを行っているのかということを実際に業務に携わっている方から伺えたことは、普段見ることができない世界を垣間見

ることができたという点で大変貴重な機会であった。教科書などを見るだけでは知ることができないような、政策の実行における問題点や政策の限界についても伺うことができた。日本と共に経済成長をしていきたいという旨の回答も向こうの政府の方からいただき、ベトナムをはじめとする東南アジアの国では、日本はアジア経済をけん引する国として認識されていること、日本がベトナムにとっての友好国であるということを再認識されられた。また、ドイモイ以来、いかに計画経済から市場経済への変革を進めているとしても、ベトナムは共産主義国家であるということがベトナム中央銀行の質問の回答などから改めて認識させられた。

ハノイ財政大学の学生との交流を通じて感じたこととしては、とにかく英語が堪能で、将来ベトナムの中心を担う人材として、ベトナムの将来について真剣に考えているということである。また、ベトナムの大学生が英語が堪能な理由として、ベトナムにはまともな教科書がなく、あるいは海外の文献が翻訳されて母語であるベトナム語で学べるという環境にはないため、英語で書かれた文献で学習しなければならないという事情があることをハノイ財政大学の学生から聞き、先達の努力により母語である日本語で難しい概念について学習することができる私たちは大変幸運な立場にあるとともに、私たちも後学のためにより一層努力しなければならないと感じた。なお、そのベトナムの学生は将来的にはベトナム語の本で、あるいはベトナム語に翻訳された本で経済や会計などの専門分野を学べることができるようにしたいということを言っていたので、ベトナムの教育事情の向上に向けて頑張っていただきたいと思う。

・ハノイ、ホーチミン街中の散策などを通じて感じたこと

ベトナムに実際に訪れるまで私はベトナムの都会は、所狭しとバイクが走っていて、道端では露天商が各々好きなように商品を売っているイメージがあった。実際にはハノイは私がイメージしていた通りの町であったが、ホーチミンはそこまでバイクが走っていることもなく、露天商もあまり存在していなかった。ホーチミンは商業都市として、欧米資本の店の進出が進み（ルイ・ヴィトンのようなブランドショップやシティバンクのような金融機関）、発展が進み、街並みが洗練されていて私が想像しているよりも発展していて驚いた。

ハノイの町にはコーヒーショップが多く、昼間から多くの人で賑わっていた。なぜ昼間から人がたくさんいるのか疑問に感じていたが、ドリームインキュベータを訪問させていただいた際に、ハノイのカフェで昼間からいる人はだいたいが卸売を営んでいる人で、さぼっていたりその日のノルマが終わったためにくつろいでいるのだということを伺った時に、ベトナムに来て以来感じていた疑問が解決するとともに、コンサルティング会社の現地のリサーチ能力にただただ驚かされるばかりであった。

また、ベトナムの経済は現在インフレが進んでおり、最も小さい通貨単位である 1000 ドンや 2000 ドンは流通量が少なく、おつりの際に 1000 ドン単位まできっちり帰ってくれば

いい方で、1000 ドン紙幣などがない場合は飴などでおつりを代替すると聞いて大変驚かされた。街中を散策しているかぎりでは、このような事態に遭遇することはなかったが、ベトナムではよくあることであるそうだ。この話を聞いた際に、ベトナムの会計制度は未熟で財務諸表がいい加減で現地で事業を行うことは大変なのではないかということに気づけたことで、会計面で苦労している点について現地の企業の方に聞くことができた。このことはベトナムの経済の中に実際に身を置くまで感じなかった問題点であり、先に述べたカフェで感じた疑問の解決と共に、企業訪問と街中の観光が有機的に結びついたという点で大変有意義な経験であった。

3. まとめ―今回の海外調査を通じて

ベトナムの人々はとにかく日本が好きで、日本と共に成長していきたいという意識を持っている人が多く驚いた。経済力があるから日本が好きであるといっているわけではなく、日本の漫画やアニメ（日本人である私が知らないものもあった）など文化についてもよく知っており、心の底から日本が好きなのだと感じるとともに、ベトナムのポップカルチャーなど知らない状態でベトナムを訪れてしまった自分が恥ずかしくなった。企業訪問の際に複数の人から言われた、現地の人と仲良くなるには相手国の文化や歴史と自国の文化の歴史をよく知ることが重要ということを肝に銘じて、自国の文化や歴史をより深く勉強するとともに、今後訪れることとなる国については、事前に文化や歴史を勉強していく必要があることを痛感した。

また、日本人とベトナム人のコミュニケーションツールとして英語を用いるわけであるが、私はこの能力が稚拙であるため、言いたいことが私が伝えたいように伝わらないことが多々あったため、今後国際化が進んでいく社会で生き抜くためには、もっと英語の能力を磨かなければならないと感じた次第であった。

今回の研修は一週間と期間にすると長くはないが、様々な企業や政府機関を訪問させていただいたおかげで、当初私がこの研修に参加しようとした動機であり設定した目標は達成することができた。ベトナムと日本の関係のあり方については、ベトナムの将来を担う学生との交流やベトナムの政府の方との面談を通じて十分に考えることができ、自分がどの様に日本の経済の発展に貢献できるかということについては、現地の成長を続けている実情や、異国の地でビジネスを拡大している企業の方との面談を通じて十分に考えることができた。

事前に立てていた目標を大方達成することができたという点で私にとって今回の研修は大変に価値のあるものであった。

ベトナムの「人々」と未来

経済学部２年　潮崎 真惟子

短期海外調査に参加するということは、今まで(少し)培ってきた経済学の知識を基盤にして、目で見て、耳で聞いて、五感全てで感じ、発展途上国の現状と未来を色々な視点から考えてくること。**私はその中でも、実際に会わないと一番分からない「人々」という視点から、ベトナムを考えたい。滞在した数日間で、ベトナム人がどのような人々であると実感したか。また、その性質からベトナムの未来を考えたい。**

1. やさしくてフレンドリー、ご近所同士の仲が良い、おおらかな性格

基本的にお店を経営している人と触れ合う機会の割合が多かったため一概には言えないが、やさしくてフレンドリーだと感じた。コーヒーショップに１人で入って、店の人と言葉が通じずお金が払えずにいた私に対して、周りに居た大勢の人が、自分なりの英語で金額を教えようとしてくれた。(大半はよく分からない言葉だったことから、英語の発音に強い癖があること、一般人に余り英語が浸透していないことが伺える。)また、ベトナム人は一戸建ての家を町中に持つと、上の階を居住スペースにして、一回は雑貨屋・食べ物屋を開くことが追い。そして近所の店同士はとても仲が良い。そのことからも、周囲とのコミュニケーションをとろうという傾向が強いのではないか。またベトナムは古くから三毛作が出来る土地が多く、おおらかな性格に育ちやすいのではないかと考えられる。

2. 若者の向上心が強い、真面目、若い世代が多く活気にあふれている、

ハノイ財政大学の子たちと話した際に、若者の真面目さ・向上心の強さを感じた。ベトナム戦争後の世代(３０歳未満)が人口の６割を占める。街中を見ていてもやはり若い人が多いと感じる。人口の多い世代が出産適齢期であるため、妊婦服専門店や小さな子供向け屋台が目につく。また、お土産屋にいくと、多くの店員が日本語を使えた。どうやって勉強したのかと聞くと、仕事の中で徐々に覚えていったらしい。日本人観光客が多いとは言え、客の言語まで覚えるのは向上心の高さではないかと感じた。しかし、昼間のコーヒーショップの前を見ると、風呂用の椅子に座ったおじさんたちが何人もボーッとしながらコーヒーを飲んでいる。三菱東京 UFJ 銀行の方によると、彼らは実は営業マンで、ノルマをさっさと済ませて昼間からコーヒーショップに入り浸るらしい。こんなところは向上心とは結びつかないようにも思えた。

3.　ベトナムドンを信用していない、箪笥貯金、愛国心＜家族愛

ベトナムの多くの店は、円やドルで商売したがる。ベトナムの通貨であるドンはいつ暴落するかもわからず、ベトナム人はあまり信用していない。また、銀行なども信用しておらず、ベトナムで銀行口座を持っている人は人口の４割ほどで、ほとんどの人

が箪笥貯金をしている。ベトナムで聞いた話だと、またいつか戦争が起きたら、いつでもベトナムから逃げられるように準備したい、という気持ちが根底にあるらしい。愛国心よりも、自分と自分の家族を守ることを何よりも大切にしている。国になにかあったら、ドン(円、ドル)を持って、家族を連れて、安全なところへ。ベトナム戦争の記憶が後を引いているのだろう。

4. 法律を守ろうという意識が弱い

訪問した企業・機関の多くで、ベトナム人は余り法律を遵守しないと言っていた。財務諸表を偽ることが多いことに苦労する、とドリームインキュベータの方は仰っていたし、三菱東京 UFJ 銀行の方は、借りたお金を返さないなどの商習慣が存在しコンプライアンスといったものがないのが大変、と仰っていた。街中でも、信号は基本的に守らないため、横断歩道ひとつ渡るのにも大変苦労する。世界銀行でガバナンスの改ざんの話が話題になった際は、中央集権で作られた法を全国であまねく同じ呵責をさせるのは難しい、またベトナムでは法の草案を作るプロセスにその法律の利害者が関与することがあるのがいけない、と仰っていた。むやみに法を増やすのでは意味が無い。法を作るプロセスや教育、広報に改善の余地があるのだろうか。

5. まとめ

他にも、**かかあ天下、気候による北部南部での性格の違い(北が厳しくしっかり者、南がおおおらか)、近視眼的である、**など色々な場面で様々な側面を見聞きした。女性の自立心の高さは日頃強く感じたし、企業訪問の際はベトナム人が近視眼的であるということが事業のやりにくさとして何度か上がっていた。どちらも、戦争で父親が兵士としてかり出されていたことや、「明日を生きられるか」の中で生きていたことが、背景として考えられる。ベトナム戦争終戦からやく 30 年、未だその爪痕が残る中、ベトナム人は戦争の辛い記憶に固執せず、先を見据えていこうという意識が強いと聞いた。家族愛や地域での繋がりの強さは、必ずやベトナム社会の強みとなるだろう。経済成長の中でこれらを失ったと言われている日本人としては、ベトナム人にはそのような絆を失わないで欲しいと願いたい。ただ、ドンへの信用が低いことや法律を遵守しない傾向から読み取れることは、社会をもっと良くしていくために自分が何かしよう、という気持ちがまだ強くないのではないか、ということだ。逆に日本人はこういった、社会が良くなるように(社会に迷惑をかけないように)行動しよう、という気持ちが少し強いと、私は思う。ベトナム人が家族や自分の所属する地域を大切にするだけではなく、もっと広い視野で自分の世界を見て、「自分のゾーン」を広がれば、もともと家族や地域への愛が強い彼らは、社会への愛も強く持てると思う。社会として/国としての一体感をベトナム政府・マスコミが作っていくことで、社会をもっとよくするために、例えば法律を守ろう、といった意識が芽生えると思う。向上心が強く優しいベトナム人に対してだからこそ、強制力で彼らを動かすのではなく、そういった内面からのアプローチを考えたいと思った。

ベトナムでの研修を終えて

経済学部３年　高津柊人

1. 中所得国・ベトナムについて

●訪問中の体験

今回の研修は発展途上国や中所得国を実際に訪れ、自分の目や耳で現地の雰囲気や実態を調査することが目的であった。私は海外経験がヨーロッパ１か国のみで、アジア・及び発展途上国に足を踏み入れるのは初めてであった。

初めての途上国ということで新鮮な出来事が多かった。例えばおつりが厳密に返されないこと、バイクが多く道路の横断が困難なことなどである。困ったことも多かったが、それ以上にベトナムという国のたくさんの魅力に触れることができた。

ベトナムは食事や飲み物がおいしく、毎回の食事は研修の楽しみの一つであった。ベトナムは中国やフランス文化の影響を強く受けているため、ベトナムの食文化は中国・フランスの食文化とベトナムらしさが混ざりあっていた。喫茶文化も強い支持があり、街のあちこちにカフェがあった。カフェでベトナムコーヒーを飲みながらのんびりくつろぐことが至福の時間であった。

また今回北部のハノイと南部のホーチミンを訪問したが、北と南で文化や街の発展具合がかなり違うことに驚いた。首都のハノイよりもホーチミンの方がビルや大型商業施設が多くブランド店があちこちに点在していた。

一週間の研修でベトナムの現状や雰囲気を肌で感じ取ることができた。ただ文献を読んだり授業を受けたりするだけではその国についてなかなか実感を持って理解することは難しく、実際にその国を訪れることの重要性を感じた。

●ベトナムの将来の自立

印象に残ったのはベトナムの人々は日本の助けや協力を切実に求めているという事実である。ハノイ財政大学の学生のプレゼンでは日本の協力によって農業の生産性を上げる、という解決策が提案されており、さらに計画投資省でも日本の技術支援を求めていると担当者の方はおっしゃっていた。2013 年は日越修好 40 周年ということもあり、ベトナムの人々は日本との関係を深め協力を引き出そうとしているように感じられた。

厳密にベトナムは、発展途上国という段階を終え中所得国という段階に移行している。持続可能な発展を将来遂げるためにはそろそろ経済的支援への依存から脱却し、自立する必要があるのではないか。なぜならばベトナムへの経済支援は単純にベトナムの経済発展を目的にしているわけではなく、日本への見返りを求める側面もあり、これから収益性の高いインフラが整っていくことが予想されるため、ベトナムは今ま

でのような支援は望めないからである。ベトナムの自立のために日本は国益も考慮しつつ、ベトナムの人々が将来独り立ちできるような技術支援や体制づくりをより強化していくことが先進国としての責任だと感じた。

●日本の今後

日本国内の経済成長は頭打ちにあり、多くの日本企業が海外特にアジアに進出し活躍の場を広げている。しかし韓国・中国などライバルは手ごわい。特に韓国企業の躍進はめざましく、ベトナムでも韓国企業の広告の方が多く目立っていた。ベトナムに滞在する韓国人の数は日本人の数よりはるかに多いそうだ。韓国や中国の方が、人件費が安いため日本よりも価格が安く、途上国ではそちらに目を向けてしまう場面は多いそうだ。ただ、日本の技術力や品質の高さなどセールスポイントは多く魅力はまだまだ十分にあると日本企業を訪問して認識した。長期的な目線を相手に持ってもらい、ロビー活動等でうまく売り込んでいくことが重要だと感じた。

2. 社会人の方々とお会いして

ベトナム研修ではたくさんの社会人の方々にお会いした。私が研修に参加した一つの理由は、就職活動前に様々な業種の社会人の方々とお会いできる機会があるからであった。懇親会でお会いした如水会ハノイ・サイゴン支部の一橋の OBOG の方々、企業訪問で伺った担当者の方々など本当に多くの社会人の方とお会いしお話しさせていただいた。

その中で感じたのは第一線で働いている方々の凄さである。企業の担当者の方はお話しも理路整然と分かりやすく、特に自分の業務について語る姿からは仕事に対して情熱を持っていることが感じられた。その一方で自分はまだ論理的に話や質問ができていないと感じる場面が多かった。将来はベトナムでお会いした方々のような立派な社会人になりたいと思った。

また様々な業種について直接質問をする機会があり、商社や銀行など一見業務内容が見えづらい職種の業務内容についても深く理解することができた。ここで得た知識や経験を就職活動に活かしていきたい。

3. 最後に

この研修は初めてのことだらけであった。東南アジアを訪れること、英語でプレゼンやディスカッションをすること、たくさんの社会人の方とお話しすることなどなど、普段の大学生活ではあまりない機会を数多く経験することができた。特に英語でのプレゼンは非常にハードルが高く、苦戦した。しかしゼミ形式での準備や先生方やゼミテンの協力でなんとか形にすることができた。事前の準備のかいもあって非常に中身の濃い一週間をベトナムで過ごすことができた。

ベトナム個人レポート

法学部４年　中尾実貴

早起きには自信のある方だ。朝食を欲しがる腹時計の正確さか、世界のどこにいても、時差の別なく朝６時には気持よく目覚める、私の特技だ。
そんな私にとっても、ベトナムの朝は早かった。夜明けと共に聞こえるバイクのエンジン、店のシャッターを開ける音。寝ぼけ眼に窓の外を見れば、既に朝食のフォーを食べ、コーヒーを飲み、新聞を読む人々がいる。

めまぐるしい７日間の研修の日々を経て、ベトナムで『はやい』のは朝だけで無いことを知った。

経済学者養成研修への参加は二度目である。前回、中国へ発った時のレポートでは中国で感じた「さしすせそ」についてまとめたと記憶している。今回は、ベトナムにおける３つの『はやさ』について述べたい。

1. 早さ

朝の早さもさることながら、ベトナム人は何においても『飲み込み』が早い。ベトナム国民性としての勤勉さはよく聞かれるが、その故か、新たな文化・情報に適応するタイミングは日本人より早いのではないかと思う。学生と話していても、世界的な最新技術や流行への敏感さに驚かされた。家業として営む伝統家具屋を継ごうとしている学生などは、学問の傍ら最新の SNS を駆使し、世界に情報発信しながら両親の事業を手伝っていた。新しい物事の吸収に貪欲で、旧いものと組み合わせることにも抵抗感が弱い。かといって、むやみやたらと飛びつくでもない。転じてビジネスのスピードの遅さについては次にも述べている。この遅さが無知によるものでなく、良く学び良く理解してこそ時に躊躇する慎重さに由来するならば、見倣うべき態度といえまいか。

2. 速さ

ここでは文明や技術進歩の速さについて述べたい。日本の高度経済成長期を思い返し、同等に迅速な発展を遂げているかといえば、むろん否である。とりわけ、前回（2011 年時）の中国の経済成長を目にした後では、成長の意欲からして物足り無い。ベトナムは『人民に優しい』共産主義を謳うだけあって、国民一人一人の合意を経ての土地開発を重視する。中国のように有無をいわさぬ土地剥奪を前提とする迅速な（しかし脆い）開発は難しい。

途上国＝無知、未熟とは言い切れない。むしろ技術進歩の利点も存分に理解した上で損

失をも天秤にかけた時、見境無い進歩をためらう賢さがある、というと褒め過ぎだろうか。
一億総中流社会を築き上げた日本の経済成長のあり方は、国防やその他軍事への負担免除を考慮しても、不思議なほどに立派であったと胸を張りたい気持ちである。ベトナムにはベトナムのやり方があるのだろうし、できるだけその自主性に添いたい思いが芽生えた。

3. 疾さ

ここまでは、いわば良い意味でのおおらかさを説いたつもりだ。とはいえ一方で、こうしたベトナム人の選択パターンが必ずしも最善のケースには当てはまらない事も強調しておく。
まだまだ自国通貨の信用が低い経済状況がそうさせるのか、彼らは非常に近視眼的である。『１年後の１００万より明日の１００円』、目の前の確実な利益への飛びつきは『速く』、不確実な損から逃げる足が『疾い』とは、日系企業の対越担当者からもよく聞かれた文句である。リスク回避といえば聞こえはいいが、度が過ぎれば進展も何もない。交易や交渉の場でベトナムに対峙する側としても、じれったい思いだ。特に質を重視する日本製品は、長期的な物持ちの良さを考慮した日本人視点での価格設定が主である。（つまりとても高い。）例えば今まで一度も寿司を食べた事が無い人に、一食一万円は下らない築地の高級寿司を薦めたところで、どうだろう。とりあえずは 100 円均一のかっぱ寿司で十分、と尻込みされる気持ちがわからないでもない。同様に、ベトナム人にとって日本の高級製品やインフラは、憧れでありながらも現実味に欠け、高額の投資リスクを押しきれないという。現在の生活水準からも、果たしてその機能が必要かどうか疑問である。こうした躊躇から、日本との取引はますます停滞しているのが現状だ。より交渉に明るい価格調整が日本側に求められる一方、隣国の安価な技術による事故や苦情も多いと聞く。「世界が日本の水準に追いつくのを待つ」という強気な日本人もいるが、今後もまだまだ『忸怩たる思い』を抱える日本人が少なくなさそうだ。

はやいようでおそい、おそいようではやい、ベトナムの人々と彼らの日々。
この度の研修を機に、その様子を今後も追い続けたく思う。親日国として知られる彼らの良き友人として共に寄り添う為には、その少し不安定な歩みにも辛抱強く合わせる努力が必要である。先進国のレッテルに奢ることなく自国の足跡を振り返りながら、他国に学ぶ謙虚さを持ちつづけたい、そう心に留めた。
最後になりますが、今回の研修を共にした良きメンバー達をはじめ、快くご協力頂いた関係者の皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。有難うございました。

3 つの異なる視点

経済学部２年　三浦真実

調査とは単に「調べる」ということではないということを、今回のベトナム海外調査で感じた。ここでの「調べる」というのは、あらかじめフォーカスする点を決め、それについての情報を収集することを意味する。つまり、「調べる」だけではないと言ったのは、実際調査に行くと、私があらかじめ焦点を当てると決めていたベトナムの経済だけではなく、他の違う目線、すなわち歴史的側面や社会学的側面からもベトナムを見ることができたからである。ここでは、経済を含めたこの 3 つの目線から観察、考察を行ったことをそれぞれ詳しく述べていきたいと思う。

1. 経済的視点

先ほど述べたように、私はベトナム経済を「調べる」ことを目的としてこのプログラムに参加した。従って、ここで記述する内容は、自分もしくは自分たちで観察し、考察を行っていったものである。

まず、様々な機関や企業を訪問して聞いた話から分かることとして、ベトナムのマクロ経済は日本と大きく異なるということが挙げられる。どのように異なるのかというと、ベトナムでは外貨(ドル)の力が国内で強く、中央銀行や政府がコントロールできる範囲が狭いということや、各企業の財務諸表などの管理がまだ正確に行えていないということが、現実問題としてあるということである。

また、実際に街を歩いてみて気がついた事は、ドンではなくドルが使われている店がたくさんある（あった）ということ、同じものを売っているお店が何軒も並んでいること、細かい額のお釣りが不足していることである。まずドンではなくドルが使われているということは、ドンがまだ十分信用されておらず、より信用できるドルで取引が行われている（いた）ということである。現在と過去両方の形で表現しているのは、いまだにドルを使っているところもあるが、原則ドル表示やドルでの取引が禁止されるようになったからである。次に、同じものを売っているお店が何軒も並んでいることは、市場主義に移行したとはいえ、まだ民間の人々の間にはそのような競争的意識が欠けているということだと思う。そして、細かい額のお釣りが不足していることは、それによって人々が値段を切り上げていくため、インフレーションの原因の一つになっていると考えられる。もっとも、ベトナム中央銀行の方々は逆にインフレーションが釣銭不足の原因になっているとして、細かい額の紙幣を発行する必要性を感じていないようだった。しかし、インフレーションと釣り不足には相互関係があるだろうから、インフレーションを抑制したいのであれば、あまり使われないと思われる少額紙幣もきちんと発行するべきではないかと、私は思う。

日本では、自分たちがその一部であることもあってか、日常からこのように経済を分析していくことはあまりないように思われる。自分たちのものとは異なる日常に触れ、実際の事象から経済の状態を説明できるということは、私にとって、とても新鮮だった。

以上が経済的視点から行った考察である。次の 2 つの視点に関しては、私がこれにより考察をしようと思ってベトナムに赴いたわけではなく、教えていただいたことがほとんどだが、今回のベトナム研修で得た新しい観点として、またこれから私が活用したいと考える分析ツールとして、ここに書き記しておきたいと思う。

2. 歴史学的視点

これは主に訪問した企業の方やバスガイドさんなどの「人生の先輩」が与えてくれた新しい視点である。ここでは主に記憶に残った話を 3 つ挙げておく。

ハノイからホーチミンに移ったとき、ベトナムでは南北で文化の違いが大きいと感じた。そしていろんな方の話を聞き、それがベトナムの歴史に大きく関わっているということが分かった。例えば、南北の都市としての性質の違いについて述べると、北のハノイに政府機関が集中していて、南のホーチミンに経済の中心となる多国籍企業のオフィスや大手企業が集まっている。それはベトナムが南北に分かれていたとき、アメリカの本拠地であったホーチミンではその間に経済発展の土台が作られていて、南北戦争で勝利したハノイの方に政府機関が集まっているのである。

また、今回バスガイドをつとめていただいたティエムさんは歴史に関してとても深い認識をもっていて、私たちに歴史に関する豆知識をいろいろ教えてくれた。ベトナムと日本の間には歴史的に見ても仲が良いということを、2 万ドン札の話や韓国人学生の話を通して教えて下さった。この話に関しては「ティエムさんの深イイ話」というコラムを参照していただきたい。

歴史の出来事が現在の企業のモチベーションに影響を与えていることがある、という話を、訪問した企業の方から伺った時は、とても驚いた。その方から聞いた話は以下の通りである。13 世紀、日本に 3 回目の元寇が来なかったのは、ベトナムが元軍を弱らせたからだという。日本企業のベトナム進出やそこでの慈善活動は、その時の恩を返すという意味を含んでいる、とのことだった。こんなに昔の話を現在の活動と結びつける考え方は、あまりメジャーな例ではないかもしれないが、歴史は企業行動にも影響を及ぼしうる、ということがよく分かった。

今まで歴史とは机の上だけの付き合いだったが、これらの話を聞いて、世界史の授業で学んできたことが現実世界にあらわれているということが分かり、私は今までになく歴史に魅力を感じるようになったのである。

3. 社会学的視点

１で述べたように、去年学んだマクロ経済の基礎知識を応用することができたのはとても良い経験だった。しかし、それと同時に、今回のベトナム訪問では、経済という視点からのみで発展というものを見ることに疑問を持った。

この疑問を抱いたきっかけはドンラム村訪問である。この村の所得は、ここ数年街に出稼ぎに出る人が増えたため、高くなっていて、またこの村は世界遺産に登録されることを目指して観光業に力を入れている。もし世界遺産に認定されれば、たくさんの企業がこの村に進出して、この地域の経済は活性化するだろう。しかし、このような村の経済的発展は、村の人達の生活を考慮すると、必ずしも良い選択ではないということを、そこに訪れた時強く感じた。実際に、政府と住民の仲介役となっている青年海外協力隊の方に話を聞いてみると、開発をしていきたい政府と、従来の伝統的な生活を壊されたくない住民との間に、軋轢が生じているとのことであった。

また、ベトナムを訪問している間何人もの方から、ベトナムの人達は家族が幸せであることが第一だという考え方を持っている、ということを聞いた。家族全員で仲良く食卓を囲む情景。それは、日本が高度経済成長期を通っていく過程で、発展と引き換えになくしてしまったものではないかと私は感じた。

すでに幸せな生活をしているところを経済発展させるため開発という形で介入することは、果たして為されるべきことなのだろうか。今までの私が持つ経済学部的な（経済的視点に偏った）思考に基づくならば、もちろん為されるべきことなのだが、上で述べたことを考慮し、幸せというものがどの様な価値観に基づいているのかを考えた時、私はこの問いについて答えを出すことができなかった。このような問いに答えるには、より多角的視点を持って人々の生活を分析できるようになる必要がある。経済学部に入ってから、経済の専門知識を身につけようと、学部授業か数学の授業しかとってこなかったが、これからは学部間の垣根が低いこの大学の特色を生かし、他の学部の授業をとるなどして、「経済」に偏らない、より広い知見を養っていきたいと思う。

ベトナム研修を経て

経済学部１年　村田瑠璃子

大学入学したて一年生の私が、なぜこのベトナム海外研修に参加したのか、参加して何を得てきたのか。この疑問はあらゆる人に聞かれ、また未だに自問自答を繰り返している疑問である。前者については、大きく２つの理由がある。まず、これまで受験勉強で得てきた知識と現実の差を知りたいと思ったことだ。短い期間ではあったものの、途上国に降り立ち自らの肌でその成長を感じ取る機会、これはなかなか得られない貴重なものであったと思う。２つ目は私のチャレンジ精神によるものだ。この大学に入学したからには何か人とは違う特別なことをしてみたい、新しい事にチャレンジすることで吸収できるものを増やしたい、そんな事を四月に考えていたように思う。そんなモチベーションの高い時期に出会ったのがこのプログラムだった。後者については文末に述べようと思う。以下、心に残った事およびそれに対する私の見解を、項目別に簡潔に述べたい。

１、訪問先の都市について

ハノイとホーチミン。同じ国ながらこんなにも違うものかと、目を見張ってしまうほどである。1975 年の終戦からわずか 38 年しか経たないベトナムの今を、この２都市の違いでくみ取ったように思う。以下違いとして、3 つの項目にわけて説明したい。まず、お金について。レストランのメニューを見れば明らかだが、ハノイはベトナムドンのみ、ホーチミンはドンに加えドルや円を使用する事が出来る。これはベトナム戦争時代、アメリカが南ベトナムを支援したことによるものだ。ハノイよりホーチミンの方が物価も高く、貨幣の流通が進んでいる事から、この２都市間の経済状況は全く異なるものではないかと推測した。次に、町並みについて。空港を降り立った瞬間にその違いを感じた。ハノイは首都であるにも関わらず、国の中枢機関と目と鼻の距離にスラム街が広がる。地べたにいすを広げ井戸端会議をする人々、子供を背中に背負いながら小売店の番をする若い母親。それらは決してホーチミンでは見ることのできなかったものだ。ホーチミンは日本でいう銀座の様な町並みだ。高級ブランドが立ち並び、道路はきちんと整備されている。バイク一つとっても違いが見られる。どちらの都市もインフラの整備が遅れ、バイクの交通量が多いものの、ハノイのバイクの多さ、無秩序さには腰を抜かしたものだ。横断歩道を渡るのに一苦労。日本では味わえないそんな体験が、私の心に深く残った。最後に人について。ハノイとホーチミンでは、ホーチミンの方が陽気な方が多いように思う。ホーチミンの町を散策していた時、多くの方が日本語で話しかけてくださった。ハノイを散策していた頃は、ベトナムは他人にむやみに干渉しない、個人主義の強い国なのだろうかと思っていたが、ホーチミンの方々の人当たりの良さに触れ、一概には言えないと感じた。これら 3 点以外

にもその違いというものは多くあった。しかしどれをとっても、政府の中枢都市と観光都市、その違い以上の物がこの２都市にはあると感じた。

２、ハノイ財政大学の学生について

私は今回初めて海外の学生と接するという機会に恵まれた。お互い母語ではない英語で歯がゆい思いをしつつも、準備してきたプレゼンテーションを発表し合い、その内容について対話をしながら仲良くなる。こんな経験を大学生のうちにしてみたいと思ったことの一つが叶った瞬間であった。ベトナムの学生は日本に強く興味を持っている人が多い。アニメなどに疎い私よりもずっと日本文化に精通していた。彼らとの対話を通して、改めて日本現代文化の影響力や魅力に気づかされた。世界の同年代の学生とお互い青臭いながらも今後の世界について話し合い、自分たちがこれからの世界を担っていく立場なのだということを実感すると共に、こうしたミクロなレベルでの国際交流が、将来の国と国との関係につながるのだと確信した。

３、最後に

ベトナムという近そうで遠い国の成長を肌で感じ、かつての日本の面影を感じつつ、今の自分が将来この２国、しいては世界のために貢献できることは何であろうと考え続けた８日間であった。知識や経験の欠如ゆえに具体的にビジョンを描く事ができないのが悔しい事ではあるが、１つ心に誓った事は、世界の課題を人任せにしないということだ。自分が世界に出て行かないで誰が出て行くのか、そんなことを言えてしまうだけの自信を身につけていきたい。昨今なにかと「若者のコンサマトリー化」という声を聞く。コンサマトリーとは、何かの目的に向かって頑張るのではなく、「今、ここ」で仲間と楽しく過ごす事を重視する言葉で、現代日本の若者のメンタリティがまさにそれだという。日本の生活満足度の高さ故に若者がコンサマトリー化するのは当然という声もあるが、現状に満足してしまうことが日本の活気を削っているのだと私は思う。現状に満足するが故に、逼迫した問題が無いが故に、何か問題が発生したとしても自分ではない誰かがやってくれると思ってしまいがちだ。ベトナムの学生から感じた、自分の国の成長の為に自分が先陣を切って貢献していきたいという意欲、それが日本の学生には明らかにない。何の為に頑張るかということは人によりけりだ。しかし、現状に満足をしない姿勢や諸問題に対する当事者意識、それらを持ち続けてこそ「成長」は生み出されるのだと思うし、その「成長」があらゆる問題の解決につながり人を幸せにできるのだとしたら、私はこれからもそうした姿勢や意識を忘れずに頑張っていけるのだと思った。

終わりに

副幹事　経済学部　４年　齋藤　玄

今回のベトナム海外研修を通じて、得たことは４つの「情」にまとめることができると思う。

「情熱」
高い志をもって今回の短期海外調査に参加したメンバー、異国の地で頑張って働いている日本の企業や政府系機関の社員の方々、ベトナムの発展のために粉骨砕身働いているベトナムの役人、ベトナムの将来のことを考えて勉学に励んでいるハノイ財政大学の学生、これらのすべての人々に共通して感じられたものは、ベトナムの亜熱帯の気候に負けないくらい熱い情熱であった。
「情緒」
ベトナムの街並み、特にハノイの街並みには、高層ビルなどが建設されるなど経済的に発展し続けていながらも、昔からあるような路地裏の店なども健在で、日本では感じることのできない異国情緒があふれていた。
「情報」
ベトナムについての情報は、日本にいる限りにおいては、テレビや本などの媒体を通じてしか手に入れることができなかったが、実際に現地を訪れたことによって、ベトナムの人の間で何が流行っているのかということやベトナムの社会で問題になっていることを知ることができた。
「友情」
ハノイ財政大学での討論会を通じてベトナムの学生と仲良くなることができ、お互いの国の将来を、協力して発展させていこうという意志をベトナムの学生から感じることができ、また、自分自身その気持ちを抱くようになった。

今回の研修では、以上のようなことだけでは語りつくすことができないくらい非常に多くのことを学ぶことができた。
これも、ひとえに様々な方の協力があったからこそなしえたことである。
最後に、我々にご指導くださった小田島先生、奥田先生、佐賀先生、そして我々学生の訪問を快く受けてくださった各企業、政府機関の方々に心より感謝申し上げます。

編集後記

編集長　経済学部　３年　高津　柊人

ベトナムからの帰国後、10 月から報告書の作成に取り掛かり、約二カ月の期間で原稿を仕上げた。出来上がった原稿をざっと見てみると、短い期間でこれほど多くのことを学ぶことができたのだと感慨にふけってしまった。原稿を読みながら、ハノイで食べた料理や、ホーチミンで訪れた市場、企業訪問の後に考えたことなど、様々な出来事を思い出したりした。

この報告書には、ベトナムで過ごした濃密な一週間の体験がまとめられている。日本企業の現地オフィスの訪問、国家機関の訪問、財政大学のとの討論会など、普段の大学生活ではめったに経験できない貴重な体験をさせていただいた。また、中所得国とはどのような環境・雰囲気なのか、さらには海外を訪れることで日本を相対化してとらえるいい機会になった。

報告書を作成し、調査を経て考えたことや感じたことを文章でまとめたが、ベトナムにて肌で感じたことは全て言葉で表すことはおそらくできない。例えば、ベトナムはバイクが多いという情報は日本でも手に入るが、多いという形容ではその雰囲気を実感も持って理解することはできない。言葉で表すことができないことは、日本で本やインターネットで調べて理解することはできない。第三者を通すことなく、実際に自分の目や耳で現地の情報をキャッチし、それを飲み込み自分のものにする大切さを、調査を通して学んだ。その事実を身をもって経験した一週間であった。

このような貴重な経験ができたのも、訪問させていただいた企業や団体の皆様や財政大学のみなさん、さらに小田島先生や奥田先生など大学の方々、そして訪問中や訪問後も互いに助け合った調査員の皆のおかげである。編集後記という場を借りて、改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、来年や再来年、そしてその先も短期海外調査が開催され、多くのこと肌で学ぶことができる貴重な機会が末永く後輩に与えられることを願い編集後記の結びとする。

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY